

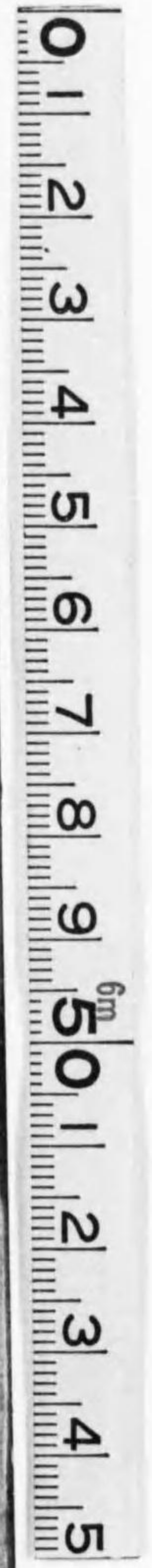
678.21
F82

678.21-F82ㄅ
1200500750549

和十五年三月

多港と臺灣

福岡市役所産業課



始



678.21
F82

はしがき

本書は對滿産業振興事業第五次調査復命書中より博多港後方地域經濟物資の動向、港船舶貨物に對する基本調査、近郊町村産業經濟事情及臺灣現地調査による臺灣經濟資源、重要産業管理專賣等の實際、輸移出入貿易の概要、主要港灣の現狀、臺灣出入物資の交通路と主なる市場、新高港出現と臺灣交通事情の將來、博多港と臺灣事情などを摘録したるものなり。

而して背域會社工場は時局柄その概況記載に止め、現地主要港灣の港灣設備の如き多少機密に關すべく思料したるものは總て之が掲記を見合せたり。

昭和十五年三月

福岡市役所産業課



博多港と臺灣目次

第一編 博多港の現況.....	1
第一章 博多港と其の背域.....	1
第一節 近代的の港博多.....	1
第二節 博多港の背域.....	1
第二章 博多港貿易の概要.....	8
第一節 船.....	8
第二節 貨物.....	8
第三章 博多港外國貿易.....	9
第一節 船.....	9
一、入港外國貿易船隻數及噸數表.....	10
二、入港外國貿易國籍別隻數及噸數表.....	10
三、定期船各線別基點、終點、寄港地入港回數及噸級表.....	11
四、入港船舶碇泊時間の最長、最短、平均.....	11
第二節 貨物.....	11
一、貿易額表.....	11
二、國別輸出貿易額表.....	13
三、國別輸入貿易額表.....	13
四、重要品輸出額表.....	15
五、重要品輸入額表.....	17

- 六、主要國別輸出重要品表.....六
- 七、主要國別輸入重要品表.....三
- 八、定期、不定期船別噸量、價額表.....三
- 九、輸出貨物仕向地別品名、數量、價額表.....三
- 一〇、輸入貨物仕向地別品名、數量、價額表.....三
- 一一、船積貨物積出別噸量表.....六
- 一二、船積貨物積入別噸量表.....六
- 第四章 博多港内國貿易.....七
- 第一節 船 舶.....七
- 一、入港内航船隻數及噸數表.....七
- 二、入港内航船定期不定期別隻數及噸數表.....七
- 三、定期船各線別基點、終點、寄港地入港回數及噸級表.....六
- 四、入港船舶碇泊時間の最長、最短、平均.....六
- 五、入港定期船、船用炭補給の有無及船用品積込關係.....六
- 第二節 貨 物.....六
- 一、貿易噸量表.....六
- 二、貿易額表.....三
- 三、特殊貨物別移出噸量價額表.....三
- 四、特殊貨物別移入噸量價額表.....三
- 五、定期不定期船別噸量價額表.....三
- 六、船積貨物品種別噸量價額表.....三
- 七、船卸貨物品種別噸量價額表.....四

- 八、船積船卸貨物仕向地仕出地別噸量價額表.....五
- 九、船卸に要する時間並に噸當り積卸諸掛費.....五
- 第三節 乗降船客調.....五
- 第五章 植物検査貨物.....五
- 一、輸入植物検査表.....五
- 二、仕出地別輸入植物検査表.....五
- 第六章 博多港より内外主要港灣に至る距離.....六
- 第七章 博多港於て現在利用せらるゝ小蒸汽船發動船及舢艀等の數.....六
- 第八章 博多港關係運送業者.....六
- 第九章 通漁船並に其の漁獲物.....六
- 第二編 博多港背域の主要外國貿易關係會社、工場、商店.....六
- 第一章 總 說.....六
- 第二章 福岡市及其附近.....六
- 第三章 久留米及其附近.....六
- 第四章 佐賀地方.....六
- 第五章 日田地方.....六
- 第六章 大牟田、熊本地方.....六
- 第一節 大牟田地方.....六
- 第二節 熊本縣地方.....六

- 第三編 福岡市近郊町村産業經濟事情.....七
- 第一章 近郊町村の範圍、面積、戸口.....七
- 第一節 近郊町村の面積.....七

第二節 近郊町村の業種別戸口並土地反別.....七〇

第二章 近郊町村の産業經濟事情.....七二

第一節 近郊町村の産業.....七二

第二節 近郊町村出入物資の概要.....七三

一、町村外流出物資.....七三

二、町村外流入物資.....七四

第三節 近郊町村内の主なる會社工場並炭坑.....七五

一、近郊町村内の主なる會社工場.....七五

二、近郊町村内の主なる炭坑.....七六

第三章 大福岡市建設に對する參考.....七七

第四編 臺灣經濟資源の概観.....七八

第一章 土地、戸口.....七八

第一節 土地.....七八

第二節 戸口.....八〇

第二章 産業.....八一

第一節 農業.....八一

米、甘藷、茶、落花生、黃麻、苧麻、バナナ、パイナップル、柑橘類、
蔬菜類、畜産、甘蔗.....八一

第二節 林業.....八三

阿里山、八仙山、大平山.....八三

第三節 鑛業.....八四

第四節 糖業.....八五

臺灣糖業の地位、事業經營、附帶事業、新式製糖工場.....八六

第五節 鳳梨罐詰工業.....八七

第六節 一般工業.....八七

紡績工業：黃麻工業、苧麻工業、莫大小工業、機械器具及金屬工業、窯業、化學工業
肥料工業：製紙工業、板紙、石鹼工業、皮革、油脂工業、食品工業、其他の工業.....八七

第七節 水産.....八八

第三章 運輸交通.....八九

第一節 鐵道.....八九

一、官設鐵道 二、營林所鐵道 三、私設鐵道.....八九

第二節 港灣.....九〇

第三節 道路.....九〇

第四節 河川.....九〇

第五節 航空.....九〇

第五編 臺灣重要産業の管理、施設、專賣等の實際.....九一

第一章 臺灣米.....九一

第一節 米穀政策の變遷.....九一

第二節 耕作概要.....九二

耕作法、米の種類及品種、苗代、本田、收穫.....九二

第三節 取引.....九三

島内取引、内臺間取引、正米市場.....九三

第四節 米穀検査.....九三

第五節 米穀關係倉庫.....九三

第六節 米穀關係團體.....一〇四

農會、産業組合、米倉(穀)利用組合、米穀移出商組合、米穀運送業者のプール、製麻組合麻袋販賣所、産米改善協會及臺灣米検査協會

第二章 特産物.....一〇五

第一節 砂糖.....一〇五

第二節 パナ、バナ.....一〇六

第三節 パイン.....一〇六

第四節 茶.....一〇七

第五節 柑、橘類.....一〇七

第三章 臺灣の專賣事業.....一〇八

第一節 阿片.....一〇八

製造、販賣、吸食.....一〇九

第二節 食鹽.....一〇九

第三節 樟腦.....一〇九

販賣、副産物、樟樹の造林.....一一〇

第四節 煙草.....一一〇

耕作、製造、販賣.....一一一

第五節 酒.....一一一

專賣の範圍、製造、販賣

第六編 輸移出入貿易の概要.....一二三

第一章 開港と税關.....一二三

第二章 貿易.....一二三

第一節 總貿易.....一二三

第二節 外國貿易.....一二五

第三節 最近の内地貿易.....一二六

第四節 重要輸移出入品と臺灣及其の仕出、仕向先.....一二七

外國貿易：輸出、輸入：内國貿易：移出、移入

第五節 最近年間臺灣入港船舶.....一三三

外國貿易船、内航船

第六節 最近年間貿易貨物噸量.....一三三

外國貨物、内國貨物

第三章 植物検査.....一三五

第一節 輸移出入検査取締.....一三五

第二節 輸出検査取締.....一三六

柑、橘、西瓜

第三節 移出検査取締.....一三六

第四節 内地移入禁止品.....一三七

第七編 臺灣主要港灣の現状.....一三八

第一章 基隆港.....一三八

第一節 船舶.....一三八

一、入港船舶隻數噸數.....一九一

二、繫船岸壁繫留船と沖懸船との割合.....一九一

三、定期船の各線船主別基點、終點、寄港地、入港回数並噸級.....一九二

四、専用バースの大体.....一九三

第二章 貨物..... 一〇

一、最近三ヶ年内外貿易貨物噸量價額..... 一〇

二、主要船積貨物仕向地別數量價額 (略)..... 一一

三、主要船卸貨物仕向地別數量價額 (略)..... 一一

四、貨物港灣諸掛費..... 一二

(一)輸移入の場合 (二)輸移出の場合

第三章 乗下船客..... 一三

第四章 基隆港より主要港灣に至る距離..... 一四

第五章 港灣設備 (略)..... 一五

第二章 高雄港..... 一五

第一節 船舶..... 一五

一、入港船隻數、噸數..... 一五

二、繫船岸壁繫留船と沖懸船との割合..... 一六

三、定期船の各線船主別基點、終點、寄港地、入港回数並噸級..... 一六

第二節 貨物..... 一七

一、最近三ヶ年内外貿易貨物噸量價額..... 一七

二、主要船積貨物仕向地別數量價額 (略)..... 一七

三、主要船卸貨物仕向地別數量價額 (略)..... 一七

四、貨物港灣諸掛費の大体..... 一七

第三節 乗下船客..... 一八

第四章 高雄港より主要港灣に至る距離..... 一八

第五章 港灣設備 (略)..... 一九

第三章 花蓮港..... 一九

第一節 船舶..... 一九

一、最近三年入港船舶隻數噸數..... 一九

二、定期船の各線船主別基點、終點、寄港地、入港回数並噸級..... 一九

第二節 貨物..... 二〇

一、最近三年移出入貨物噸量價額..... 二〇

二、昭和十三年移出入主要品價額..... 二〇

三、港灣諸掛費..... 二一

第三節 花蓮港より主要港灣に至る距離..... 二二

第四章 港灣設備..... 二二

第一節 船舶..... 二二

一、最近三年入港船舶隻數噸數..... 二二

二、繫船岸壁繫留船と沖懸船との割合..... 二三

第二節 貨物..... 二三

一、最近三年貿易貨物噸量價額..... 二三

二、船積外國貨物仕向地別數量價額 (略)..... 二三

三、船卸外國貨物仕向地別數量價額 (略)..... 二三

四、貨物港灣諸掛費..... 二三

第三節 淡水港より主要港灣に至る距離..... 二四

第五章 梧棲港..... 二五

第六章 安平港..... 二五

- 第一節 船 舶.....一四一
- 一、最近三年入港船舶隻數噸數.....一四一
- 第二節 貨 物.....一四六
- 一、最近三年貿易貨物數量價額.....一四六
- 二、最近三年移出品名別數量價額 (略).....一四七
- 三、最近三年移入品名別數量價額 (略).....一四七
- 四、貨物港灣諸掛費.....一四七
- 第三節 安平港より主要港灣に至る距離.....一四八
- 第四節 港 灣 設 備.....一四八
- 第七章 特別輸出入港.....一四八
- 後龍港、鹿港、東石港.....一四八
- 第八章 漁 港.....一四九
- 蘇澳港、新港、海口港.....一四九
- 第八編 臺灣出入物資の交通路と主なる市場 (都市) の瞥見.....一五一
- 第一章 臺灣交流物資の概要.....一五一
- 第一節 臺灣生産物資.....一五一
- 第二節 臺灣出入物資.....一五一
- 第三節 臺灣鐵道輸送貨物.....一五二
- 第二章 中央縱貫鐵道と基隆、高雄兩港.....一五二
- 第一節 西部臺灣の土地、人口並産業.....一五三
- 第二節 西部臺灣の鐵道.....一五三
- 第三節 中央縱貫鐵道と基隆、高雄兩港.....一五三

- 一、鐵道關係より見たる基隆、高雄兩港.....一五四
- 二、土地人口生産物資より見たる基隆、高雄兩港.....一五五
- 三、貿易上より見たる基隆、高雄兩港.....一五七
- 第三章 臺東線と花蓮港.....一五八
- 第四章 臺灣主要市場 (都市) の瞥見.....一五九
- 第一節 西部臺灣市場.....一五九
- 臺北 市場.....一六〇
- 一、臺北市の土地、人口.....一六〇
- 二、臺北市の産業經濟.....一六〇
- 三、臺北市場と淡水港.....一六三
- 基 隆 市 場.....一六三
- 一、基隆市の土地、人口.....一六三
- 二、基隆市の産業經濟.....一六四
- 新 竹 市 場.....一六四
- 一、新竹市の土地、戸口.....一六四
- 二、新竹市の産業經濟.....一六四
- 臺 中 市 場.....一六五
- 一、臺中市の土地、戸口.....一六五
- 二、臺中市の産業經濟.....一六五
- 嘉 義 市 場.....一六六
- 一、嘉義市の土地、戸口.....一六六
- 二、嘉義市の産業經濟.....一六六

- 臺南市場.....一七〇
- 一、臺南市の土地、戸口.....一七〇
- 二、臺南市の産業經濟.....一七一
- 高雄市場.....一七二
- 一、高雄市の土地、戸口.....一七二
- 二、高雄市の産業經濟.....一七三
- 三、高雄市の工業地帯.....一七四
- 屏東市場.....一七五
- 一、屏東市の土地、戸口.....一七五
- 二、屏東市の産業經濟.....一七六
- 第二節 東部臺灣市場.....一七七
- 臺東市場.....一七八
- 一、臺東街の人口.....一七八
- 二、臺東街の産業經濟.....一七九
- 三、臺東廳下の山地開發.....一八〇
- 花蓮港市場.....一八一
- 一、花蓮港街の土地、人口.....一八一
- 二、花蓮港の産業經濟.....一八二
- 三、臺灣の工業と花蓮港.....一八三
- 四、花蓮港と移民村.....一八四
- 第九編 新高港出現と臺灣交通事情の將來.....一八五
- 第一章 臺灣の地理的考察と新高港の出現.....一八五

- 第一節 臺灣港灣の地理的分布と中部港.....一八六
- 第二節 新高港築港.....一八七
- 第二章 新高港と電力關係.....一八八
- 第三章 新高港と背域産業.....一九〇
- 農業、畜産、林産、工業、水産、鑛業.....一九〇
- 第四章 新高港出現と基隆、高雄、花蓮港の將來.....一九一
- 第一節 新高港出現と臺灣四港の分野.....一九一
- 一、土地、人口.....一九二
- 二、生産額.....一九三
- 第二節 新高港出現と基隆、高雄、花蓮港の將來.....一九四
- 地理的より見て、交通系統より見て、生産物資より見て、流入物資より見て、綜合要約.....一九五
- 第十編 博多港と臺灣事情.....一九六
- 第一章 現在の博多港と臺灣貿易.....一九六
- 第一節 博多港と臺灣航路.....一九七
- 第二節 博多港と臺灣貿易.....一九八
- 第二章 博多港と一部背域を同化する門司港外三港の臺灣貿易上に顯れたる貿易品の檢討.....一九九
- 第一節 門司港對臺灣貿易.....二〇〇
- 第二節 長崎、三池、下關三港臺灣貿易.....二〇一
- 一、長崎港.....二〇二
- 二、三池港.....二〇三
- 三、下關港.....二〇四
- 第三章 博多港臺灣航路開拓と臺灣貿易の將來.....二〇五

博多港と臺灣

第一編 博多港の現況

第一章 博多港と其の背域

第一節 近代的の港博多

博多港は九州文化の中心地たる福岡市の海上大玄関にして九州の北部博多灣の南岸に位す。明治十七年朝鮮貿易港に指定同二十二年特別輸出港、同二十八年特別輸出入港、同三十二年開港に指定せられ『殘島北端より志賀島滿切に引きたる十線及姪濱小口鼻より殘島南端に引きたる一線』を以て其の港域とし東西一杆、南北八杆六、面積約八千ヘクタールの廣大なる水面を領し、古來の要津なるも地勢漸次遠淺となりて海運界の進展に従ひ利用上に支障を感ずるに至つた。

博多港修築は實に港の眞價發揚の唯一の活路で地方人士の之に對する要望も次第に實現化せらるゝことゝなつた。

即ち明治三十一年資本金二十五萬圓を以て博多築港株式會社設立市の補助を得て那珂川口より御笠川に至る博多地先に二萬三千九百坪の船入場を築造すると共にその周圍四萬八千五百坪の埋立を計畫、同四十一年竣功後福岡市に於て之を繼承した。是現在の博多船溜である。又同社と相前後し福岡築港株式會社成り資本金十二萬圓を以て西公園下に船入場修築を企て舊藩時代に施設せし錨地を利用し面積四萬八千餘坪の船入場を築造すると共に其の沿岸一萬九千二百坪の埋立を計畫せるが工事半にして福岡市之を繼承し明治四十三年竣功した。是現在の福岡港である。然るに其の後埋没の度甚しく利用價值の乏しきに至りたるを以て市は昭和九年度工費十四萬八千圓を投じ水深二米以上に浚渫すると共に沿岸を整理し、



面積八千五百坪を埋築して公共物揚場及海岸道路を設け、又小型船舶造船修理場並に工場住宅用地に利用、海陸連絡の便に供することとした。

又大正五年博多灣築港株式會社設立せられ、市の東隣箱崎海岸に築港計畫を樹て資本金三百萬圓を以て工事に着手したるも偶々世界大戰後の財界變動にあひ一時事業を中斷、昭和四年再び工事を開始し昭和八年一月第一期工事に屬する二十二萬坪の埋立を竣功した。

一方昭和二年十一月第二種重要港灣に指定せられ同三年臨時港灣調査會に於て修築計畫の確定を見、同四年度より國庫補助の下に内務省直轄工事として着工した。當初計畫に於ては工費五百三十萬圓にして昭和四年度以降十七年度に至る十四年間の繼續事業の豫定なりしも其後三百七十六萬二千五百十圓（國庫補助百六十一萬七千三百四十四圓、縣費補助四十四萬四千三百三十六圓）に變更し工期六ヶ年を繰上げ昭和十一年度を以て竣功することとなつた。倉庫上屋等の貿易設備は百三十萬圓を以て昭和十二年度に於て小型上屋二棟三二六坪を竣功、昭和十四年大型上屋三棟二九四〇坪及倉庫一棟九八〇坪竣功する豫定で、東西防波堤其他即ち所謂第二期修築工事は二百八十八萬圓（内半額國庫補助）を以て十二年度工事に着手し工期五ヶ年の計畫である。尙箱崎地先、須崎裏、西公園下等の埋立、水中貯木場設置、港内浚渫等の博多港臨時修築並埋立工事は二百九十九萬三千圓を以て昭和十二年度工事に着手し第二期修築工事と同じく昭和十七年度竣功の豫定である。

第二節 博多港の背域

博多港の背域は福岡縣下に於ける福岡市、久留米市、粕屋郡、宗像郡、朝倉郡、筑紫郡、早良郡、糸島郡、浮羽郡、三井郡、三潞郡、八女郡の二市十郡、佐賀縣下に於ける佐賀市、佐賀郡、神埼郡、三養基郡の一市三郡及大分縣下に於ける日田郡を加へて三市十四郡である。この博多港背域は北は洞海湾の工業地帯に接續し、東に筑豊の大炭田を擁し、南は坦々たる所謂筑紫平野となり、西北は開けて玄海洋に面し、港を距る僅々數十裡にして世界幹線航路に接してゐる。而して交通關係にありては九州本線中央を南北に貫通し之が培養線として九大線、長崎線、佐賀線、篠栗線、筑肥線の五省線及

博多灣鐵道の一私線を具へ、電車、軌道、國縣道等四通八達し眞に本邦西部の交通道路網を構成し文化經濟の一大中心地をなしてゐる。

博多港圏内の面積は二百五十方里、人口百五十萬を算する。而して既往五ヶ年間背域生産額は左表の通りにして昭和十二年は四億一千萬圓である。

自昭和八年 博多港背域生産高表
至昭和十二年

年産高	工業	礦産	農産	水産	畜産	林産	計
福岡縣	昭和八年 三九,一八八,〇八四	一,八四八,〇〇九	二,三四五,七四六	一,三四四,八一九	八六三,九五五	一〇,六四〇	四一,四九一,二八七
福岡市	昭和九年 三五,四四六,七六六	二,三〇一,四〇〇	一,八六四,九四四	一,五七八,四三六	七五四,〇〇三	一五,七三四	四一,九六一,三七三
	昭和十年 三八,六三八,八〇八	二,五六八,二八二	二,四七六,八二四	二,四九六,六五五	七九二,四一九	一六,四四八	四六,九九九,四六六
	昭和十一年 五〇,五五六,五〇八	二,六七八,四九五	二,三三〇,六五八	二,九九九,七七七	七九五,五八〇	一八,八五一	五九,六六一,八六九
	昭和十二年 六四,七二六,二二三	三,一三五,二八五	二,九四二,三四四	三,四〇六,七三三	一,一五八,七四四	一八,七六五	七五,三八六,四七四
	昭和八年 三九,一八六,三三六	一,八八一,五五二	二,一〇四,〇三三	九一,一三九	二九五,四九九	一,三五四	四〇,四五五,七九〇
久留米市	昭和九年 四一,〇一一,八六五	一,〇六八,〇三三	一,〇六八,〇三三	一,五三二,三四二	二七三,九二一	一,三七七	四一,五〇七,四二六
	昭和十年 三九,八二五,八四七	一,〇四九,九八八	一,〇四九,九八八	四〇〇,五五三	二五四,七四四	—	四一,五〇五,六六三
	昭和十一年 四一,四三三,四五五	一,一六七,一八六	一,一六七,一八六	四〇六,一一三	三〇九,八六四	—	四三,四一五,六六七
	昭和十二年 七八,六四九,七〇七	—	一,二九〇,八〇一	四四二,九六六	四二四,五〇六	一,三五二	八〇,七九九,二九二
	昭和八年 四一,六三六,五三六	九,四五八,九三四	四,六六六,四八二	四〇〇,五七七	二五七,七〇九	一六九,八五九	一九,六〇〇,〇九七
	昭和九年 四一,〇七二,五六四	八,五九六,五二七	三,八三八,三二三	四三六,二四〇	二七五,七七九	一八〇,九六二	一七,九三五,三八五

精屋郡		宗像郡		朝倉郡		筑紫郡	
昭和十年	三、八七〇、三三三	昭和十年	一〇、一三七、八〇〇	昭和十年	四、六九八、〇三三	昭和十年	一七三、六五〇
昭和十年	四、九〇六、八七三	昭和十年	九、一九七、七二一	昭和十年	五、一三三、一六七	昭和十年	一六五、九二一
昭和十年	七、八八六、五五〇	昭和十年	二、八九七、八〇〇	昭和十年	五、六〇六、九六七	昭和十年	二七〇、〇一六
昭和十年	一、一三三、五七〇	昭和十年	三、六〇、五八三	昭和十年	三、七五、一七三	昭和十年	六五、三三六
昭和十年	一、一六〇、五〇九	昭和十年	三、三一、一七〇	昭和十年	二、八〇三、五七九	昭和十年	七〇、九二九
昭和十年	一、三〇四、三六八	昭和十年	三、五五、一七一	昭和十年	三、七九三、六八〇	昭和十年	六八、一一三
昭和十年	一、三三三、六〇三	昭和十年	一、九八、八一	昭和十年	四、二三五、五五九	昭和十年	九、一三七
昭和十年	一、六八五、〇三七	昭和十年	六、一七、二二	昭和十年	四、六二七、九八一	昭和十年	一四、一七八
昭和十年	二、〇〇〇、一七七	昭和十年	一、七〇、〇五九	昭和十年	七、二三五、二二三	昭和十年	二、五一、五三六
昭和十年	一、九二〇、一六五	昭和十年	二、五八、七五五	昭和十年	六、〇三九、八九五	昭和十年	二七七、二七四
昭和十年	二、〇五三、一〇五	昭和十年	三、〇三、四三三	昭和十年	六、二六三、六五七	昭和十年	三、〇〇、〇六七
昭和十年	二、三三三、七六八	昭和十年	四、三七、四〇四	昭和十年	六、九四九、五三六	昭和十年	三、五六、一八九
昭和十年	二、七〇、九二九	昭和十年	六、六六、八一〇	昭和十年	七、九六、四一八	昭和十年	三、九七、一八五
昭和十年	七、一四九、一八六	昭和十年	四、二、四七八	昭和十年	五、六四九、二七四	昭和十年	二、四四、七三三
昭和十年	七、一〇、七四九	昭和十年	三、三、九五九	昭和十年	三、七五〇、四四四	昭和十年	一、四、六七
昭和十年	二、四六七、二五四	昭和十年	六、五、七六四	昭和十年	四、三四八、四四八	昭和十年	二、六、一九二
昭和十年	一、三、四三、五〇〇	昭和十年	五、〇、八六六	昭和十年	四、七五、一六三	昭和十年	二、七四、八九六
昭和十年	一、九、七六九、九三四	昭和十年	五、〇、五三	昭和十年	五、三〇、一〇五	昭和十年	三、六三、二八四
昭和十年	二、〇三、五九二	昭和十年	一、三、八八	昭和十年	一、三、七、八五二	昭和十年	一、七、二二三

早良郡		糸島郡		浮羽郡		三井郡	
昭和九年	二、四九、一八八	昭和九年	九、八五〇	昭和九年	一、三三三、四六六	昭和九年	七五、三九五
昭和十年	二、四六、一六八	昭和十年	七、四二一	昭和十年	一、四七、三三三	昭和十年	九三、五九〇
昭和十年	二〇二、九七七	昭和十年	五、四〇〇	昭和十年	一、七、七、八五二	昭和十年	八一、七〇五
昭和十年	二、三三、二二三	昭和十年	五、六一〇	昭和十年	二、〇〇七、九三二	昭和十年	九六、九〇五
昭和十年	九八二、一四八	昭和十年	二、二、五三六	昭和十年	五、〇五四、八一	昭和十年	三、一、三三〇
昭和十年	九三三、四六一	昭和十年	二、一、六八六	昭和十年	三、九〇、七三三	昭和十年	三、三九、八三七
昭和十年	九八四、五一七	昭和十年	二、一、九三二	昭和十年	五、五九九、六六五	昭和十年	三、九、五八二
昭和十年	一、〇〇一、三八五	昭和十年	二、二、九九六	昭和十年	六、二四三、三九〇	昭和十年	八、四六、七八〇
昭和十年	一、二二、二六二	昭和十年	五、七、二七三	昭和十年	六、九八七、四〇九	昭和十年	八、二九、六一
昭和十年	二、七〇七、四二二	昭和十年	三、〇、一三	昭和十年	六、三四一、六四五	昭和十年	二、六、七三五
昭和十年	二、五一九、八六〇	昭和十年	二、二、五九五	昭和十年	四、六三、八二五	昭和十年	二、九、三〇五
昭和十年	二、三三三、三三二	昭和十年	二、四、三六二	昭和十年	四、五四九、三四九	昭和十年	三、七、〇〇三
昭和十年	二、五三三、二四五	昭和十年	二、五、三四四	昭和十年	五、三七六、八五二	昭和十年	三、七、九一七
昭和十年	三、六四四、五五四	昭和十年	二、四、二九九	昭和十年	五、八八二、〇四八	昭和十年	二、六〇、四六四
昭和十年	三、〇三三、九五四	昭和十年	九、九五七	昭和十年	五、九四六、四〇三	昭和十年	二、〇〇、〇八五
昭和十年	二、六〇八、〇五三	昭和十年	四、六八五	昭和十年	七、〇六九、三七四	昭和十年	一、八、五五〇
昭和十年	二、五四三、三三三	昭和十年	八、二三五	昭和十年	六、八八四、三三七	昭和十年	二、〇三、三七四
昭和十年	二、六八八、〇六九	昭和十年	六、一七〇	昭和十年	七、八八〇、六一	昭和十年	二、六七、六四九
昭和十年	四、四六五、六三四	昭和十年	一、五、七〇	昭和十年	八、七四六、六九七	昭和十年	三、五七、五四六

三 瀨 郡		八 女 郡		佐 賀 縣		佐 賀 市		佐 賀 郡	
昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和八年	昭和九年
一五、四九九、九八五	一五、〇一九、三三三	一九、五〇四、四三六	二〇、四八七、七三三	二四、八〇五、九一六	六、五四〇、一九六	六、七五一、六七七	七、六八七、五九七	九、二四五、五六二	一〇、〇五五、一七一
五〇、七二六	六九、九九九	七六、三四二	二二、三二八	二八、二六六	八三、三八八	三六六、五四二	一、〇六〇、三三七	一、四三八、四七九	一、六三三、四三七
六、三六〇、四三三	八、五五五、〇八〇	八、〇八〇、四七七	八、八九三、六七五	一〇、五〇八、一〇六	七、二一九、三八九	七、八三七、二二五	八、〇五五、三六三	八、七〇一、八二五	八、九三六、一六九
一六一、〇六二	一六九、七〇五	一六二、六八〇	二三〇、九五六	二四二、九八五	二〇九、一六六	二一八、六〇〇	二二一、五〇八	九一、二〇一	一〇三、三五五
三〇一、〇七五	二三八、三〇四	二五三、八二二	三〇七、五八	三九二、四〇〇	二八四、三九九	二九二、六六七	二九七、四二二	三二七、七三五	四〇六、九九三
六九二	八九三	七〇六	八二二	二八、五〇〇	一、〇七七、一三〇	一、二二二、八八〇	一、三九八、八八二	一、八六九、九九六	一、八三三、〇四七
三三、一〇〇、五九四	二四、〇四二、二四	二八、〇七八、三三三	二九、九三三、六七二	三五、九七七、五三三	一、〇七三、三三〇	一、五三三、五二八	一、六、五〇〇、五二二	二一、六六四、七七	三三、九三三、七三
一五、九五九、三〇六	一四、九三四、七九九	一四、九三三、七九九	一四、九三三、七九九	一四、九三三、七九九	一四、九三三、七九九	一四、九三三、七九九	一四、九三三、七九九	一四、九三三、七九九	一四、九三三、七九九

神 埼 郡		三 養 基 郡		大 分 縣		日 田 郡		總 計	
昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和八年	昭和九年
二、九四六、一一一	一、〇八五、一八八	一、三六五、二七七	一、五三六、五二四	一、七六五、三〇七	二、一三九、一三九	六、四四〇、二九六	六、七三一、八五四	七、七〇〇、一四三	八、一〇九、六二七
三二、六三四	二四、五三七	二二、三九八	二二、四七七	二二、九七五	二九、九五三	四、四四〇	九、九一四	一三、八六一	三三、二一〇
一四、九八八、一一一	四、三五八、九六〇	五、三三七、〇九一	四、六八八、八二四	五、二四四、四八六	六、七九三、七五〇	七、八三三、二四一	八、九三〇、六〇九	四、九二二、七二二	五、七三〇、一九三
一〇、六九二、七六六	一三、四九六	一三、二八二	一九〇、八七七	三四、一八七	三四、八五〇	三四、〇七九	二七、一八一	二二、一四八	二二、九四九
四一八、一七五	一〇四、三二二	一三三、七六八	一三三、九四三	一三三、五三三	一三三、五三三	一三三、五三三	一三三、五三三	一三三、五三三	一三三、五三三
五一、三八五	五三、六七	七八、〇七	九八、四九	二九、六四〇	二九、六四〇	二九、六四〇	二九、六四〇	二九、六四〇	二九、六四〇
一九、四三四、七三三	五、六三九、二九	六、九五、三三	六、四九三、三〇〇	七、九九、三〇〇	九、三三三、二四	一四、五〇九、一七三	一四、七〇一、三三	一九、七〇一、三三	一九、七〇一、三三
一五、四八八、六〇一	一四、九四七、三五三	一四、九四七、三五三	一四、九四七、三五三	一四、九四七、三五三	一四、九四七、三五三	一四、九四七、三五三	一四、九四七、三五三	一四、九四七、三五三	一四、九四七、三五三

昭和十七年	一七九、九六七、二七四	一九、四九〇、五五〇	九〇、四〇〇、一六三	六、九七〇、三三九	五、三三九、三六六	五、五二二、六六三	三、五七三、七七八
昭和十七年	二五四、六六六、三五六	二七、六三三、三三九	一〇七、五〇〇、四九六	七、七四六、三三〇	六、四七四、〇七七	六、二八八、六八八	四、〇〇三、三九八

第二章 博多港貿易の概要

博多港外國貿易は第三章に内國貿易は第四章に詳述し植物検査貨物、博多港より内外主要港灣に至る距離、小蒸汽船、發動船、舢舨の數、博多港關係運送業者、漁船並漁獲物等の大體は第五章以下に述ぶることとしたるも博多港船貨物の概括は左の通りである。

第一節 船 舶

昭和八年	外國貿易船	三八隻	一一三、五三三噸	昭和十一年	外國貿易船	九三隻	一七六、六〇一噸
	内航船	六、〇九四隻	一、〇一二、一四四噸		内航船	六、一四一隻	一、四二一、四一八噸
	(内發動船)	一、七三七隻	八〇、九四七噸		(内發動船)	二、九〇三隻	一六〇、七二一噸
昭和九年	外國貿易船	六、一三二隻	一一二、五七七噸	昭和十二年	外國貿易船	六、二三四隻	一一五、九八〇噸
	内航船	四三隻	九八、五三七噸		内航船	七七隻	一三七、九七五噸
	(内發動船)	三、〇一四隻	一一〇、〇六一噸		(内發動船)	三、一一一隻	一六四、六〇二噸
昭和十年	外國貿易船	六、四八〇隻	一一三、二〇、四三九噸	昭和十三年	外國貿易船	六、三〇二隻	一一四、二八、五二六噸
	内航船	七三隻	一六五、二五五噸		内航船	一〇〇隻	一一九、八〇三噸
	(内發動船)	六、一七四隻	一、三七四、五八八噸		(内發動船)	六、一六二隻	九九六、八六一噸
		二、八五七隻	一四九、八九四噸			三、七四九隻	一八九、八四〇噸

右の如く博多港入港船舶は昭和八年以來六千隻臺にして外國貿易船は隻數噸數共昭和十年以降遂に増加してゐる。

第二節 貨 物

昭和八年	輸出	二〇、八二三噸	二、一二〇、七〇五圓	昭和十一年	輸出	三五、一四七噸	五、〇二八、二〇三圓
	移入	一、〇〇九、四四一噸	二〇、八七五、二四七圓		移入	一、四四一、二八八噸	三一、一七〇、九七七圓
	計	一、〇三〇、二六四噸	二二、九九五、九五二圓		計	一、四七六、四三五噸	三六、一九九、一八〇圓
昭和九年	輸出	一八二、五一九噸	一九、八一七、九六二圓	昭和十二年	輸出	二二八、八五七噸	二〇、七九〇、一三一圓
	移入	二四六、二九九噸	二二、四二〇、五七九圓		移入	三〇三、六二八噸	二五、二三三、八三四圓
	計	一、二七六、五六三噸	四六、四一六、五三一圓		計	一、七八〇、〇六三噸	六一、四三三、〇一四圓
昭和十年	輸出	二五、五一二噸	二、一八五、八九四圓	昭和十三年	輸出	四六、二五六噸	六、九七五、七〇七圓
	移入	一、一四六、五七二噸	二二、五九一、〇二〇圓		移入	一、五五五、八〇四噸	三四、八六八、三七四圓
	計	一、二七二、〇八四噸	二二、七七六、九一四圓		計	一、六〇二、〇五六噸	四一、八四四、〇八一圓
昭和十一年	輸出	七二、八〇四噸	三、六二七、八四〇圓		移入	六七、八五三噸	四、七八七、六六四圓
	移入	二一九、三八九噸	二〇、二八八、六九〇圓		計	二六五、一〇五噸	二五、八八一、六九九圓
	計	二九二、一九三噸	二二、九一六、五三〇圓		計	三三二、九五八噸	三〇、六六九、三六三圓
昭和十二年	輸出	一、四六四、二七七噸	四九、六九三、四四四圓		計	一九三五、〇一四噸	七二、五一三、四四四圓
	移入	三一、二八九噸	三、八八六、〇二五圓		移入	一、五六〇、七五四噸	八、五五五、四八五圓
	計	一、四九五、五六六噸	五三、五七九、四六九圓		計	一、六八六、〇七一噸	五〇、六三三、七六三圓
昭和十三年	輸出	一、四〇四、一五九噸	二五、九一〇、三八四圓		移入	五七、四八七噸	三、三三三、五五〇圓
	移入	一、四三五、四四八噸	二九、七九六、四〇九圓		計	二八七、三四七噸	三一、九一九、七九八圓
	計	二、八三九、六〇六噸	五五、七〇六、七九三圓				

計 二九二、二二八噸 二三、九六三、六四四圓
 合計 一、七二七、六七六噸 五三、七六〇、〇五三圓
 右の如く貨物は昭和十三年輸移出入合計二、〇三〇、九〇五噸、八五、八六八、一一一圓にして、昭和十二年に比すれば九五、八九一噸、一三、三五四、六六七圓、昭和十一年に比すれば二五〇、八四二噸、二四、四三五、〇九七圓、昭和十年に比すれば三〇三、三一九噸三三、一〇八、〇五八圓、昭和九年に比すれば五六六、六二八噸、三六、一七四、六六七圓、昭和八年に比すれば七五四、三四二噸三九、四五一、五八〇圓の増加を示して居る。
 更に輸移出、輸移入の比を見れば昭和十三年に於ては噸量に於て輸移出八・三輸移入一・七の割合となり、價額に於ては輸移出五・九、輸移入四・一の割合となつて居る。輸移出の噸量の多きは石炭の如き巨大重量貨物大部を占めて居る爲である。

第三章 博多港外國貿易

第一節 船舶

一、入港外國貿易船隻數及噸數表 (登簿噸數)

年度別	隻	數	噸	平均噸數
昭和九年	四三隻	七三	九八、五三七噸	二、二九一・五六噸
昭和十年	七三	九三	一六五、二五五噸	二、二六三・七八噸
昭和十一年	九三	一七六、六〇一噸	一、八九八・九四噸	一、八九八・九四噸
昭和十二年	七七	一三七、九七五噸	一、七九一・八八噸	一、七九一・八八噸
昭和十三年	一〇〇	一二九、八〇三噸	一、二九八・〇〇噸	一、二九八・〇〇噸

二、入港外國貿易船國籍別隻數及噸數表 (登簿噸數)

國籍別	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
日本	四八、四七八噸	七八、二七八噸	七一、〇七〇噸	五五、三五二噸	六〇、四〇二噸
滿洲				一、〇四九噸	
英吉利	一一、九九八噸	三二、二七三噸	四〇、四四二噸	三三、八九六噸	三四、三二一噸
諸威	三三、七二二噸	二七、〇四八噸	五三、二〇七噸	四二、〇八三噸	二五、四三二噸
中華民國					六、四三八噸
其他	四、三三九噸	二七、六五六噸	一一、八八二噸	六、六四四噸	三、二一〇噸
合計	九八、五三七噸	一六五、二五五噸	一七六、六〇一噸	一三七、九七五噸	一二九、八〇三噸

三、定期船各線別基點、終點、寄港地入港回数及噸級表 (昭和十三年)

線名	寄港地	航海度數	使用船舶噸數	經營者
博多、天津線	門司、博多、天津	月二回	千五百噸級	大連汽船株式會社
大阪、大連線	大阪、神戸、門司、博多、大連	月三回乃至五回	二千噸級	同
大連、營口線	大阪、神戸、門司、博多、大連、營口	月四回乃至五回	千噸級以上二千噸級	岡崎汽船株式會社
但往航のみ博多港寄港				

四、入港船舶、碇泊時間の最長、最短、平均

博多港入港外國貿易船は前掲の外不定期にして、ライジングサン石油會社揚鐵油積載船多數あり、従つて其の碇泊時間も比較的長く、例へばセルマ號七二時間、セリー號一一九時間等あり。尙發動機帆船に相當長きものもあるも、短かきもの五、六時間にして、其の平均は二五時間前後である。

第二節 貨物

一、貿易額表

輸出入別	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
輸出	二、一八五、八九四 <small>円</small>	三、八八六、〇二五 <small>円</small>	五、〇二八、二〇三 <small>円</small>	六、九七五、七〇七 <small>円</small>	八、五五五、四八五 <small>円</small>
輸入	三、六二七、八四〇	四、一一七、六七九	四、四四三、七〇三	四、七八七、六六四	三、三一三、五五〇
合計	五、八一三、七三四	八、〇〇三、七〇四	九、四七一、九〇六	一一、七六三、三七一	一一、八六九、〇三五
出入超過	▲一、四四一、九四六	▲二三一、六五四	五八四、五〇〇	二、一八八、〇四三	五、二四一、九三五

二、國別輸出貿易額表

國別	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
滿洲國	三三四、四九八 <small>円</small>	八二四、三九七 <small>円</small>	一、三二八、八八五 <small>円</small>	二、三〇七、〇二七 <small>円</small>	四、五五三、六二七 <small>円</small>
關東州	一、七五二、九〇二	二、九三〇、一六八	三、五九三、九二四	四、六三七、一四七	二、七二八、二八五
香港	六八、三六〇				
海峽殖民地	三、五〇〇	四八、七二〇	三八、五〇〇	二五、二〇〇	三六、〇三六
中華民國		二、七五二	五〇、四六八	二、六二八	一、二三七、五三七
北部		三三二	二七、五一六	三三〇	一、二三五、二二〇
中部		二、四三〇	二二、九五二	二、三〇八	二、三一七
南部					
比律賓	二六、六三四	八二、七四〇	一六、四二六	三、七〇五	
其他	二、一八五、八九四	三、八八六、〇二五	五、〇二八、二〇三	六、九七五、七〇七	八、五五五、四八五
合計					

三、國別輸入貿易額表

國別	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
滿洲國	三五二、二四三	四九六、八七八	五五三、六二一	四七一、八〇一	四七八、七七七
關東州	五、一五、八九〇	五三六、二七六	三一五、八一三	三一六、三五八	九九、二七九
中華民國	一一、三四四	五八八	二、九三四		二五五
北 部	一一、三四四	五八八			
中 部					
南 部			二、九三四		二五五
ボルネオ	二二二、四一〇	二六七、六四八			九二、五〇三
露領亞細亞	七、一四、二〇五	一、五四九、三八五	三、二一六、九六三	三、八四三、八一九	二、五八九、三〇三
暹 羅		二〇、〇二九	四七、三〇〇	四四、一三二	三、九三八
英 吉 利	五六三	一、六二五	三五九	三八四	二〇、〇八九
獨 逸	二八、五三九	一六、八一八	二二、〇一七	二二、〇七七	四八
和 蘭					
北米合衆國	一三八、六九四	二八八、五六二	二八三、六九六	八六、四六七	二九、三五七
希 臘					
保 稅 工 場	二、六三四、九五二	九三九、八七〇		一、五五四	
其 他					

合 計	三、六二七、八四〇	四、一一七、六七九	四、四四三、七〇三	四、七八七、六六四	三、三一三、五五〇
-----	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------

四、重要品輸出額表

品名	單位	昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
		數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格
小麥	百斤	四五、七四	三〇〇、二六九	二九、〇〇	一九九、四四四	一七、三〇八	一五二、八二五	八、〇〇三	九四、五九五	一六四、一九九	二、三四、二九九
菜 子	百斤					五、七八〇	四六、二五七	七、七四九	八六、七〇七	一三、二九五	一、五五、〇三六
醬 油	石					一、四九八	三六、二八八	九九九	三〇、三五二	一、三五四	四、六三三
罐詰食料品	石					五、五九六	九三、七二四	七、七二五	一八四、〇二七	二、〇二四	二七九、九九五
麥 酒	石					三、六一一	一四七、六六二	一、〇一〇	四三、〇〇〇	三、二七三	一、八、七五〇
植 物 油	百斤	二、一〇六	八九、八〇〇	四、三三九	九五、〇七九	三、六一一	一四七、六六二	一、〇一〇	四三、〇〇〇	三、二七三	一、八、七五〇
礦 油	百斤					四八〇	一四、一六〇	一、五七七	四三、八五〇	三五八	八、六〇六
藥 材	百斤					一、八八九	二六、三四八	三六四	四二、四八三		
打 綿	千箇						四四、六八二		六五、九六二		
麻 袋	百斤					二、九九九	一一、七五三	一、八三四	一〇一、六九五	一八三	二、六六三
打 袋	千箇					一一〇	三、二〇八	七五	二、五七五	二六	一〇、六二二
綿 袋	千箇					一一一	一〇、七三五	一六五	一五、七九五	六六	九、三四九
メリヤス製品	打					二四、七三三	二四、八〇七	一四、八五八	二〇、二二七		
足袋(ゴム底)	打	一八、二五	一六、〇八六	一三、七〇七	八四、〇〇〇	四五、〇四六	三三七、五二二	一四、六六二	一、一三、八四〇	七九、八七六	六五、二二九
同 其 他	打			一四、三三	四、七七一			三〇	一、四九八		

品名	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
其他の礦油	二、四〇九、三五一	二、四六〇、二二三	二、六四一、七七八	五、三八八	—
砂糖	—	—	—	—	—
木方	三、五〇九	七、六五	五、六四四	—	—
ドロマイト及マグネサイト	—	—	—	—	—
飼料	九五、〇三六	七〇、五八三	三、四九、九八一	二〇、五〇〇	七、八五六
豆	三、四、六九〇	三三、一九五	一〇五、〇〇四	九、〇三三	六、一六
穀類	五、八三〇	四、八四七	九、九八九	二七、〇五九	一三、一〇五
其他	—	—	—	—	—
合計	三、六二七、八四〇	四、一七六、七九九	四、四四三、七〇三	四、七六七、六六四	三、三三三、五五〇

六、主要國別輸出重要品表

品名	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
滿洲國	三三四、四九八	八二四、三九七	一、三二八、八八五	二、三〇七、〇二七	四、五五三、六二七
麥酒	—	—	—	—	—
小麥粉	八四、五〇八	九一、二三三	五、五二〇	六三、九一四	七九八、八八五
罐詰詰食料品	—	—	—	—	—
打綿	二一、七一九	五〇、二九五	一七、三六六	七五、八九八	一三二、九〇二
履物類	一〇三、一〇四	四八六、二八三	八八四、八六三	一、一九二、五三〇	一、四二四、四七四

品名	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
足袋	一、一〇九	一六、二九四	一四九、三五九	四一六、四八九	四五五、三二二
紙類	—	—	九、四五九	五六、三六一	一六四、二五九
硝子及同製品	—	—	—	—	—
珐瑯鐵器	二六、六六五	七、三四〇	二〇、八一七	一三、八八二	一二四、八四七
ゴムタイヤ及チューブ	—	—	—	—	—
其他の鐵製品	三、七五八	一四、五一	一〇、六九〇	一四、九〇六	一一五、五二九
機械類	六七、三五九	一〇三、〇三九	三六、八八一	五〇、三九一	二五四、〇九八
木材	—	—	三五九	一一、二七一	三〇五、三七四
其他	二六、二八六	五五、〇〇三	一二七、三一三	三〇一、七〇四	七五六、九三七
關東州	一、七五二、九〇二	二、九三〇、一六八	三、五九三、九二四	四、六三七、一四七	二、七二八、二八五
麥酒	—	—	—	—	—
小麥粉	二一五、七八一	一〇八、一八二	一四七、二九五	三〇、六八一	六八三、一三〇
罐詰詰食料品	—	—	—	—	—
足袋	一〇六、九一三	五七、二九九	一八八、一五三	一〇八、一二九	一二九、六三三
履物類	七八四、六七六	一、八六二、七〇六	二、一五〇、〇一六	二、四五三、二二一	一五四、六七五
紙類	九九、八五二	二七六、〇二一	二九二、七四一	二七七、二一四	一五四、七〇四
石炭	—	—	—	—	—
珐瑯鐵器	二五、三〇九	六、三三一	一、八九八	七、一八〇一	九六、〇四八
其他の鐵製品	二二、八四五	三八、五六九	一三、三〇八	三、四六三	—

品名	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
滿洲國	三五二,二四三	四九六,八七八	五五三,六二一	四七一,八〇一	四七八,七七七
高粱	四八		三一,一七七	六,六一八	
大豆	一八〇,八一四	二六二,四四二	二三六,二七四	二四〇,九〇〇	四一三,八〇八
小豆	一一〇,四四九	一二八,〇九七	一三〇,〇七三	一〇〇,八一	
綠豆	一一,五六四		八,三九七	三,六〇九	
荳蔻	二九,五一	六,四八〇			
荳蔻子	一八,六三三	九二,三〇八	一三七,八七二	一五,三六〇	一一,八一七
荳蔻料				四三〇	四,三七五
荳蔻精				七九,五五九	四三,四八三
其他	二二四	七,五五一	九,八二八	一〇四,五〇三	四,二九四
關東	五一五,八九〇	五三六,二七六	三一五,八一三	三一六,三五八	九九,二七九
高粱			一二,七二〇		

七、主要國別輸入重要品表

品名	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
木材					一九二,八〇七
其他					八三,七六五

品名	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
硝子及同製品					五,七一二
機械類	一四一,六〇五	一二六,九〇一	八九,七九四	六一,九七〇	三六,二六〇
ゴムタイヤ及 チニール			一一一,〇四三	三六一,一一七	二四〇,四一六
其他	三五五,九二一	四五四,一五九	七一〇,七二五	一一〇七,二〇四	三二三,九三三
木材			三四,六五八	一二八,三九二	三三三,九二五
香港	六八,三六〇				
石炭	六八,三六〇				
海峽殖民地	三,五〇〇	四八,七二〇	三八,五〇〇	二五,二〇〇	三六,〇三六
再輸出品	三,五〇〇	二二,六二〇	三八,五〇〇	二五,二〇〇	
其他		二六,一〇〇			
中華民國		二,七五二	五〇,四六八		一,二三七,五三七
麥酒			六,三一二		九三,五〇〇
小麥粉			一,五一〇		七四二,二七四
罐詰詰食料品			一二,六一四		一七,四六〇
足袋					一〇,二九八
履物類					五五,〇一八
紙類					二二,八四二
硝子及同製品					九八二
機械類					一七,五九一

品名	仕出地		計	消費地
	滿洲國關東州	英領印度領		
碎米	五、〇七	七九	三、九三八	福岡市
豆類	三三	七〇〇	四、九六九	福岡市
飼料	一、五〇〇	七五	一、〇三三	福岡、佐賀兩縣
豆精	一、五〇〇	七五	四、〇〇六	福岡、佐賀、長崎
其他			五、二五三	福岡、早良、筑紫、糟屋、糸島
計	一、五〇〇	七五	五、八五五	

一一、船積貨物積出別噸量表

場所別	昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	噸數	比率	噸數	比率	噸數	比率	噸數	比率	噸數	比率
市設上屋扱	五四	五	一一五	一	三	一	一〇、五〇四	〇	一〇、五〇六	一
船積	二五、四八八	九五	三、三三三	九〇	三、六二五	九	三、八〇九	七	二〇、一九九	一六
其他					一三三	一	五、七五三	一一	二七、二七三	二
計	二五、五三三	一〇〇	三、六一七	一〇〇	三、八五四	一〇〇	五、〇七六	一〇〇	二七、五七六	一〇〇

一二、船卸貨物引取別噸量表

場所別	昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	噸數	比率	噸數	比率	噸數	比率	噸數	比率	噸數	比率
市設上屋扱	一五、五九八	二二	一三、四三三	一六	一三、〇八三	一六	一一、五七七	一七	七、五二七	二一
保稅工場扱	四五、七三三	六二	五〇、八五九	六七	五六、五六一	七〇	五三、五〇五	八〇	四七、八二二	八三
船揚扱	九、九四〇	一五	七、四三三	一〇	四、三四六	五	二、三五七	三	一、七八一	三
其他	一、五三三	二	四、六五五	七	六、一九〇	八	三、六八	三	三、七九	三
本船扱	七二、八〇四	一〇〇	七五、三九〇	一〇〇	八〇、三三三	一〇〇	六七、八五三	一〇〇	五七、四六七	一〇〇
計	二五、五三三	一〇〇	三、六一七	一〇〇	三、八五四	一〇〇	五、〇七六	一〇〇	二七、五七六	一〇〇

一三、積卸に要する時間並に噸當り積卸諸掛費

内國貿易第二節貨物、九を参照

第四章 博多港内國貿易

第一節 船舶

一、入港内航船隻數及噸數表

年	汽船		帆船		帆船		計
	船數	登簿噸數	噸數	登簿噸數	噸數	登簿噸數	
昭和九年	二、六四五	一、〇八、七三六	三、〇一四	一三〇、〇六一	七二九	九三、〇六六	六、四三七
昭和十年	二、八六七	一、一八、五六六	二、八五七	一四九、八九四	四二二	四二、七三八	六、七四一
昭和十一年	二、六六三	一、二〇〇、六三五	二、九〇三	一六〇、七三一	五七五	六〇、〇七三	六、四一四
昭和十二年	二、四三三	一、〇三三、八三三	三、一一一	一六四、六〇三	六九一	九三、一三六	六、三五一
昭和十三年	一、八三五	七、七三、二九九	三、七四九	一八九、八四〇	五七八	七九、七三三	六、一六二
							九九六、八六一

備考 漁船入港隻数を除く

(一〇石を一噸に換算す)

二、入港内航船定期、不定期別隻數及噸數表

昭和十三年

定期船(五百噸以上) 三〇四隻 一九〇、一六七噸(登簿噸數)
 其他の船舶 五、八五八隻 八〇六、六九四噸(同)

三、定期船各線別基點、終點、寄港地、入港回數及噸數表

線名	往航寄港地	復航寄港地	航度	使用船舶噸級	經營者	備考
新義州大阪線 又八 仁川大阪線	新義州、鎮南浦、仁川、 群山、木浦、釜山、博多、 關門、神戸	神戸、廣島、關門、博多、 釜山、木浦、郡山、仁川、 鎮南浦	月往二 復一	二千噸	朝鮮郵船株式會社	福岡縣及市命令 航路(博多港寄 港に關し)
釜山浦塩線	雄基、羅津、清津、城津、 興南、元山、釜山、博多、 下關、神戸	神戸、廣島、關門、博多、 羅津、雄基	月往二 復無	同	同	同
雄基大阪線	羅津、清津、城津、興南、 元山、釜山、博多、下關、 神戸	神戸、廣島、關門、博多、 清津、羅津	月往二 復二	一千噸級	同	同
朝鮮長崎線	鎮南浦、仁川、博多、長 崎、三角、鹿兒島	鹿兒島、三角、長崎、博 多、釜山、木浦、郡山、仁 川、鎮南浦	月往三 復二	二千噸級	同	同
博多釜山線	比田勝	比田勝	隔日	一千噸級以 下五百噸級	九州郵船株式會社	同
博多嚴原線	苜邊、郷之浦、勝本の内 一港	苜邊、郷之浦、勝本の内 一港	毎日	五百噸級	九州郵船株式會社	同
大阪營口線	神戸、關門、博多、大連	大連、門司	月往六 復無	二千噸級	岡崎汽船株式會社	
高雄清津線	雄基、清津、城津、興南、 釜山、博多、長崎、鹿兒 島、基隆、高雄	基隆、鹿兒島、長崎、博 多、釜山、清津、雄基、城 津	月往一 復無	三千噸級	大阪商船株式會社	
橫濱高雄線	芝浦、名古屋、大阪、神戸 門司、博多、長崎、鹿兒 島、基隆、高雄	直航	月往二 復無	四千噸級乃 至五千噸級	同	船の關係上現 在の處殆んど不 定期
橫濱大連線 (準定期)	芝浦、横濱、名古屋、大 阪、神戸、門司、博多、大 連	直航	月往二 復無	三千噸級	同	同
大阪三池線	神戸、今治、三ツヶ濱、 下關、博多、唐津、呼子、 伊万里、佐世保、長崎、 三角、島原、三池	三池、長崎、呼子、博多、 下關、神戸	月七	五百噸級乃 至七百噸級	合名ニヶ崎汽船部 會社	
博多五島線	呼子、平戸、大島、宇久	宇久、平戸、大島、呼 子	毎日	二百噸級	野母商船株式會社	
博多對馬線	嚴原、鷺知	鷺知、嚴原	月二〇	百噸以下	岡崎回漕店	

博多下關線	直航	直航	月四	百噸以下	五福運輸株式會社
博多宮浦線	殘島	殘島	日二	同	北崎汽船部
博多相島線	玄海島	玄海島	日一	同	同
博多志賀島線	西戸崎	西戸崎	日六	同	志賀島汽船部

四、入港船舶碇泊時間の最長、最短、平均

博多港入港内航船中定期船にありては概ね其の碇泊時間短かく不定期汽船にありては比較的長く例へば昭和十一年入港の榮江丸一六時間、錦江丸一五時間等の如きがあるも其平均は八時間前後である。

五、入港定期船、船用炭補給の有無及船用品積込關係

博多港に於ては石炭の供給容易なる爲、入港定期船の殆んど全部は船用炭の補給をなす。只だ朝鮮郵船の大連線は、撫順炭を大連にて補給する。尙昭和十三年船用炭の補給高は、四六、四〇一噸である。(外國船はなし)次に船用品として積込まるものは、食料品の水、鮮魚、肉類、白米、果物、乾物等、船具のロープ、帆布、パツキング、ペイント、機械油等にして、其の數量も相當なるもの、如くである。

第二節 貨物

一、貿易噸量表

移出 入別	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
-------	------	------	-------	-------	-------

移出	一、一四六、五七五噸	一、四〇四、一五九噸	一、四四一、二八八噸	一、五五五、八八四噸	一、五六〇、七五四噸
移入	二九、三九九噸	二二六、八三八噸	三三八、八五七噸	二六五、一〇五噸	二八七、三四七噸
計	一、三六五、九六六噸	一、六三〇、九九七噸	一、六七〇、一四五噸	一、八二〇、九八九噸	一、八四八、一〇一噸

二、貿易額表

移出 入別	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
移出	三三、五九一、〇〇〇円	二五、九一〇、三六四円	三二、一七〇、九七七円	三四、八六八、三七四円	四二、〇七九、二七八円
移入	三〇、三八八、六九〇円	一九、八四五、九六五円	二〇、七九〇、一三二円	二五、八八一、六九九円	三二、九一九、七九八円
計	四三、八七九、七九〇円	四五、七五六、三三九円	五二、九六一、一〇八円	六〇、七五〇、〇七三円	七三、九九九、〇七六円

三、特殊貨物別移出噸量價額表

品名	昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
石炭	一、〇三三、三三三噸	一、〇三三、三三三円	一、二六六、一四二噸	一、二六六、一四二円	一、二九九、六〇〇噸	一、二九九、六〇〇円	一、三六九、五五三噸	一、三六九、五五三円	一、二七〇、五九八噸	一、二七〇、五九八円
木材	九、三三三噸	四〇、七三三円	一四、〇九〇噸	三八、八八一円	一八、四四四噸	六六七、五四六円	一六、一九三噸	八九八、八五二円	六五、八〇〇噸	四、一〇〇、二九〇円
鮮魚	三、二九七噸	九、六二二円	一五噸	九、二八五円	七三噸	四五一、八七七円	一三九噸	一六、六八〇円	一四三噸	三〇、七六〇円
油類	三、六〇八、〇〇八噸	三、六〇八、〇〇八円	二六、三二二噸	一八六、四三四二円	二四、三三六噸	二、七二四、三三五円	一九、四九九噸	二、五八五、九〇六円	三三、九三三噸	二、三三三、七〇〇円
雜貨	七、六〇七、六〇七噸	九、三三九、三三七円	一〇、一五〇、五〇一噸	一、三三五、四六七円	九、八三五、一〇〇噸	八、三九九、〇四九円	一五、〇三三噸	一、〇八三、一七三円	二〇、二九二噸	二、四九五、五四八円

計	一、一四六、七三三、五九〇、〇〇〇	一、四〇四、五九三、九一〇、三八三	一、四四四、二六八、三二一、七〇〇	一、五五五、〇四三、四六八、三七四	一、五六〇、七五四、〇七九、二七八
---	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------

四、特殊貨物別移入噸量、價額表

品名	昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
石炭	三三、六八一	一、四二四、九三三	四五、六五四	二、二二五、八〇四	三八、六五五	一、九八一、二〇四	一一、九五〇	九〇三、三三五	一三、〇四八	九五九、六八〇
木材	四一、四七三	五、〇九九、九七七	三二、〇二六	五、四二六、六九四	三三、〇三五	六、二四九、八三三	四三、七八〇	七、四〇三、六四四	四三、六八七	九、五五六、六五〇
鮮魚介類	八、六五三	六〇〇、二七六	三〇、八四三	八四六、五四四	二〇、六八四	一、二五六、六六四	三三、八一三	一、五八一、五四〇	二四、五七九	二、一〇〇、三三〇
油類	一三五、五八三	一、三三三、六三二	一〇九、六六二	一、三五八、九三三	一三七、四五二	一、六〇四、四五〇	一八五、五六三	二、五九三、二九〇	二〇六、一〇三	二、九三三、二三八
雜貨	二二九、三九九	二、八六、六〇〇	二二六、八三二	二、八四五、九六五	二三八、八五三	三、〇七〇、一三二	二六五、一〇五	三、五八八、六九九	二八七、三四七	三、九九九、七九八
計	二二九、三九九	二、八六、六〇〇	二二六、八三二	二、八四五、九六五	二三八、八五三	三、〇七〇、一三二	二六五、一〇五	三、五八八、六九九	二八七、三四七	三、九九九、七九八

備考 昭和九年の雜貨中には砂利五千噸分の數量價額を含む。

五、定期、不定期船別噸量、價額表

船別及年別	移		出		移		入	
	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額
昭和九年	六〇、二七三	五、七九三、二二一			二六、一八六	二、五七七、五九五		
昭和十年	七五、七四七	八、〇〇一、九三四			二五、七五九	二、七四三、四〇九		

定期船	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額
定期船	八四、一九七	九、六三四、一六六	三三、一六〇	三、五三七、七〇七	三、五三七、七〇七	三、五三七、七〇七
昭和十二年	六二、一五五	九、七二三、一三九	四九、六四九	四、四三三、六四三	四、四三三、六四三	四、四三三、六四三
昭和十三年	七〇、五六九	九、三三七、六六〇	三〇、〇七二	三、三五一、八九一	三、三五一、八九一	三、三五一、八九一
昭和九年	一、〇八六、二〇〇	一七、七九七、八〇九	一九三、三〇三	一七、七一一、二九五	一七、七一一、二九五	一七、七一一、二九五
昭和十年	一、三三八、四三三	一七、三〇八、四五〇	一九一、〇七九	一七、一〇三、五五六	一七、一〇三、五五六	一七、一〇三、五五六
昭和十一年	一、三三七、〇九二	一七、五三六、八一	一九五、六九七	一七、二五三、四三四	一七、二五三、四三四	一七、二五三、四三四
昭和十二年	一、四九四、六四九	一七、四四五、三三三	二二五、四五六	二一、四五六、〇五六	二一、四五六、〇五六	二一、四五六、〇五六
昭和十三年	一、四九〇、一八五	一七、四七四、六一八	二二七、二七六	二一、四五六、〇五六	二一、四五六、〇五六	二一、四五六、〇五六
其他の船						
昭和十一年						
昭和十二年						
昭和十三年						

六、船積貨物品種別噸量、價額表

品種	昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額
牛馬	三	一、〇〇〇	一八	一、〇〇〇	一六	一、〇〇〇	五	一〇、八〇〇	一	—
其他の動物	一六〇	三、九〇八	一七	三五、四〇〇	六	八五八	—	—	一六	四、三六六
植物	九	六、三六〇	一四九	九、六八五	二五二	一六、三三五	四	二六〇	九	九〇〇
米	三五	五、九一九	三三八	六、二四四	二二六	四、〇〇〇	三六八	七、三、六三〇	一三三	三、四七、一五〇
麥	八七	七、九三七	六四七	五、八五四	五八七	六、五、八三三	一〇八	二、〇、九六六	一四一	一、七、〇七〇
其他の穀類	七	八四七	—	—	三五五	三、八、五三六	一、〇六六	一、六八、五八七	一〇三	一、九三、一六〇

製	食	水	漬	鯨	獸	罐	煉	菓	糖	砂	清	麥	洋	燒	和	酢	醬	味
造	料				詰		子				涼							
煙				鳥	食						飲							
草	品	物	肉	肉	料	乳	類	密	糖	料	酒	酒	酎	酒				油
五三五	四四三	二七、一七〇	一七八	九七	三三三	二六	八二七	一六八	三六	二、三六三	三六	二、三六三	二九九	三八九	一〇二			
四九、七五〇	一〇、〇〇〇	一、三、八六二	二八、八三三	二五、四七〇	五九、二八四	一五、七五九	一九四、二二一	五、二六〇	四、八七六	三、八、五三三	二、一四七	三、八、五三三	六、一、五二二	三九、八八七	五、四三〇			
四九三	四七八	三、三三〇	三三〇	二七	三八三	三三	五五三	三二七	六七	二、一四七	〇七	三三三	四〇三	四〇三	九四			
四六三、八〇〇	一〇八、五〇五	二、一、三四四	三六、四六八	六、九〇〇	九二、二五	一六、六〇〇	一、四、四〇〇	九五、二〇〇	八、一八	三、〇、三六八	一、四、〇〇〇	一、八、二九	六、六、六九九	三六、七〇八	五、一七〇			
六三	三六五	四、五、五〇〇	二〇九	三六	八二七	一八	六六	九一	三九四	一一一	二、四、三六八	一、八、二九	四九七	五、七、六	一四三			
五九七、六〇〇	七八、七九七	二、七、三〇〇	一、三、九五九	五、四〇〇	一、七、三、九六六	九、二〇〇	一、四、四、七〇	五、四、六〇〇	一一七、九三〇	一、一、七、九三〇	二、四、三、五〇	三、四、三、一	二、四、三、三〇	五、三、二〇一	七、九、八五			
四四五	二、三、三六	五、一、五、四四	五〇	一〇	六〇九	一〇、四	一、〇、四	一、四、六	一、一、七、三〇	二、二、七、三〇	六	六、四	三、〇、四、八五	二、九、三	三、七			
四三七、二〇〇	二、九、五、一五六	三、〇、九、〇八四	四、〇〇〇	一、六〇〇	一、五、六、一〇三	一、一、一、一〇	二、四、四、六三九	八、七、六〇〇	四、一、七〇〇	一、八、八、五〇	一、八、八、五〇	六、二、七、五八〇	三、〇、四、八五	一、〇〇〇	三、五、六、六六	二、七、七、五		
四八〇	二、五、八、五	五、九、一、五六	六、四〇〇	五	八〇一	一、一、一、一〇	二、八、六、一	一、三、八	一、一、五	一、一、五	一、一、五	九、四、三、七	三、〇、四、八五	一、〇〇〇	二、八、六	五、三		
四七五、二〇〇	四〇、一、八二〇	三、五、四、九三六	六、四〇〇	九〇〇	二、三、三、五四〇	一、一、一、一〇	七、四、一、三三	八、二、八〇〇	三、四、五、〇〇	三、四、五、〇〇	一、一、五〇〇	一、一、五〇〇	四、三、九、〇〇	一、〇〇〇	二、九、〇、五九	四、三、〇		

果	甘	蔬	乾	海	鹽	鮮	海	昆	食	茶	其	澱	米	小	菜	其	小	大
實	藷	菜	物	物	乾	魚	介	草	布	鹽	其	粉	粉	粉	子	他	豆	豆
	薯	類	(鯨節を含む)	産	魚	魚	魚	魚	魚	魚	の	粉	粉	粉	子	の	豆	豆
四二五	八五九	一四五	四	一九五	二四	二四	一四	一四	四二一	一五	二、六六一		二、五、一一	二、五、一一	二、五、一一	六〇	九〇	
二八、六、三	三、八、六、四三	一、三、二、四九	二、二、六六	七九、一九二	九、六、二	五、八、五七	五、八、五七	五、八、五七	二、四、六、五	五、二、六、五	四〇〇、八、二五		三、八、二、六五〇	三、八、二、六五〇	三、七、五、〇	一、四、一、七、五	七、九、六、八	
四七二	九、九、七	一、八、九	三二	一、三、六	一、五	四	四	四	四、五〇	一、三	九三		三、七、一〇	三、七、一〇	六	五、五、八	二、九、二	
三、一、五〇七	四、四、三、三	一、四、一、七五	七、七、五〇	五、七、一、九八	九、二、八、五	二、〇、八、七	二、〇、八、七	二、〇、八、七	二、〇、七、〇〇	四、五、五、三	一、五、五、五三		五、五、六、五〇〇	五、五、六、五〇〇	三、六、〇	六、七、〇、八〇	三、一、三、五〇	
五六二	六三二	三、三、四	四二	五、四	七、三	三、九	七	七	六	五	五		二、六、七、二	二、六、七、二	四、九、七	一、一、六	二、七、三	
三七、七、八六	三、一、一、六八	二、三、七、六〇	一〇、二、五〇	一、五、一、七、四	四、五、一、八七	八、九、三、〇	八、九、三、〇	八、九、三、〇	二、七、六	一、七、九、〇一	一、八、〇〇		四、〇、七、四〇	四、〇、七、四〇	七、一、九、二八	二、〇、八、〇	三、三、七、六〇	
三五二	二〇〇	一、三、三	四七	七	一、三、九	一、一、六、八〇	一、一、六、八〇	一、一、六、八〇	五	七	三三		四、四、七、〇〇	四、四、七、〇〇	四、五、〇	八、八	一、七、九	
二六、〇、三三	一、六、七、〇〇	九、九、七、五	二、一、七、五〇	一、一、一、〇	一、一、六、八〇	一、一、六、八〇	一、一、六、八〇	一、一、六、八〇	一、七、五、五	八、四、〇	五、七、五〇		一、四、〇、八、〇三	一、四、〇、八、〇三	一、三、六、八〇	六、七、五、〇〇	二、一、四、八〇	
三六六	四八三	八三一	一、四、六	九	一、四、三	一、四、三	一、四、三	一、四、三	三、六、七	一、一、一	五、四		一、五、一、六	一、五、一、六	五、二	五、二	一、九	
三三、〇、九	一九、二、二五	七、三、九、八五	一、一、二、〇〇	一、一、四、〇〇	二〇、七、六〇	二〇、七、六〇	二〇、七、六〇	二〇、七、六〇	一、八、五、〇	三、五、四〇	七、〇、三〇		三、三、〇、五〇	三、三、〇、五〇	七、八、一、五〇	二、五、五、〇〇	二、四、五、七〇	



洋紙	和紙	及其他附屬品	靴履	其他衣類及同附屬品	足袋	帽子	其他の布帛製品	漁網	麻織物、麻製品	絹及綿製品	毛織物	其他	織物(綿)	其他	苧麻	綿絲	製綿	棉花
三九二	一三四	一二五	一一一	一一一	九、五〇二	一七	三五一	八	一四七	二	一〇五	二五三	七〇	二八	七九九	一四三	一四三	一四三
三、六二〇	三、八〇六	六、四〇七	六、〇五三	二、四三三	二、四三三	一〇、六九五	一、五八七	七、五八〇	三、八二六	一、二〇〇	六、九二八	一、八七〇	一、八七〇	一、八七〇	一、八七〇	一、八七〇	二、四三〇	二、四三〇
五九	一五〇	一六〇	五七	一〇、八二〇	三、一五八	四六	四〇八	三	八三	三	三	四九〇	二七	二七	二七	五、〇三三	六六六	六六六
一、〇六一	三、九七四	八、八〇〇	三、九二〇	三、一五八	三、一五八	三、一五八	三、一五八	三、一五八	一、六二四	三、一五八	三、一五八	三、一五八	三、一五八	三、一五八	三、一五八	九、五九三	一〇〇、二〇〇	一〇〇、二〇〇
三六	九四	一〇一	二、二六四	六、一七二	六、一七二	六、一七二	六、一七二	六、一七二	九六	一三	一〇	九三	一三七	五	五	三、一六	三、一六	三、一六
〇四二、〇	三、五〇〇	五、一八五	五、四三〇	七、四九一	一、六四一	三、八二五	九七、一五〇	六三、一〇〇	二〇、一〇〇	一、五〇五	二、五〇〇	六九、一八四	九、八六四	三、八六四	三、八六四	三、八六四	六〇、七二八	六〇、七二八
一〇	一九	七	一、五五五	一、六四一	一、六四一	一、六四一	一、六四一	一、六四一	一〇六	一六四	一六四	八二	一	一	一	二、一三四	二、一三四	二、一三四
〇〇六、六	三、三〇三	一、九六〇	一、三九六	一、三九六	一、三九六	一、三九六	一、三九六	一、三九六	七、八〇〇	二、一五二	四、三六五	五九、〇六七	三、一八八	三、一八八	三、一八八	四、六二〇	四、六二〇	四、六二〇
一一	一五五	一一三	二	一、三九六	一、三九六	一、三九六	一、三九六	一、三九六	七、七三〇	一、一〇	一、一〇	八七	六	六	六	一、六七七	一、六七七	一、六七七
三、一八〇	四、八二〇	三、六〇〇	一、四〇〇	五、五二〇	五、五二〇	五、五二〇	五、五二〇	五、五二〇	九、九〇〇	三、七〇〇	五、五〇〇	六、四〇〇	一、八七〇	一、八七〇	一、八七〇	三、七〇〇	三、七〇〇	三、七〇〇

塗料及其他	染料	藥品	樟腦	酒類	蠟燭	獸油	其他	鯨油	植物油	茶子	機油	重油	輕油	揮發油	石油	鑛油	皮革	皮革
三一	一五	一、二九五	二七	五	九三	五五九	一、二九七	一、四六五	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七
六、〇〇八	四、八〇〇	五七、六二二	九、四八三	三〇〇	五、五〇六	一、九〇〇	一、二九七	二、三、九二六	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七	二、九四七
七四	一四	一、一八四	一三	五	一八一	三二七	一、〇三七	八、四六一	八、四六一	八、四六一	八、四六一	八、四六一	八、四六一	八、四六一	八、四六一	八、四六一	八、四六一	八、四六一
一五、二四〇	四、一〇〇	五三〇、五九七	四、五七六	三八〇	一九、五三三	五三、〇七〇	九、〇三三	三三、六〇〇	九、九七五	九、九七五	九、九七五	九、九七五	九、九七五	九、九七五	九、九七五	九、九七五	九、九七五	九、九七五
三二九	三	九〇二	二七六	二六	二二	一	一、〇五九	六、一八五	八、九二〇	六、四六六	六、四六六	六、四六六	六、四六六	六、四六六	六、四六六	六、四六六	六、四六六	六、四六六
二五、二〇八	六、四〇〇	二七、〇六六	一〇七、〇〇〇	二〇、七二〇	七、三九三	一五〇	二、九五六	三、八八四	一、二四六	七、七五九	七、七五九	七、七五九	七、七五九	七、七五九	七、七五九	七、七五九	七、七五九	七、七五九
三〇三	八	五三七	一七九	一六	一	一五	一、〇八五	二、五八三	一〇、六七八	四、五三三	四、五三三	四、五三三	四、五三三	四、五三三	四、五三三	四、五三三	四、五三三	四、五三三
二九、三〇〇	一、七〇〇	一、三〇、〇五五	一四、一〇〇	一〇、六二〇	一〇、六二〇	二、二二〇	一、三九三	一〇、六五八	一、六〇一	五、三二四	五、三二四	五、三二四	五、三二四	五、三二四	五、三二四	五、三二四	五、三二四	五、三二四
三六一	九	七九	一三	一三	一三	一三	八七六	八、六六四	八、一七〇	二、九三八	二、九三八	二、九三八	二、九三八	二、九三八	二、九三八	二、九三八	二、九三八	二、九三八
三、八二〇	三、二五〇	二、九四〇	一〇、六六〇	一、一〇〇	一、一〇〇	一、一〇〇	二、七八〇	三、四七、四〇〇	一、三三五、五〇〇	四、一三〇	四、一三〇	四、一三〇	四、一三〇	四、一三〇	四、一三〇	四、一三〇	四、一三〇	四、一三〇

七、船卸貨物品種別噸量價額表

護 謨 及 同 製 品	漆 其 他 的 蘭 製 品	藥 製 品	石 化 粧 品 及 小 間 物	文 房 具	燐 寸 具	布 海 苔	電 氣 用 品	爆 發 物	農 具	船 具	玩 具	引 越 荷 具	雜 貨	其 他
三三	六九	一五三	一	九三	一七			三四九			一一〇		三、五四三	
一四六、五三三	二七、〇三〇	三三、一九九	一〇〇	二八、六五〇	二、〇八〇			五六、一七			一三、六七三		一、〇〇九、九五〇	
三三五	一九	二二〇	一九	一一三	二四			一七一			一三三		三、九五〇	
一八、九五〇	六、四五〇	三三、九一九	四、七五〇	三三、六〇〇	二、一〇一			三四、一四〇			三、二五〇		七〇三、二四四	
四三三	三三	五七三	八七	一一八	四七			二二二			三三		三、三九八	
一七三、三四〇	六、九六〇	四八、八八七	七三、六五〇	三七、八〇〇	五、六四〇			四四、七六三			七六、一五〇		七九、一八七	
七、〇〇〇	一〇	六三八	一一〇	一、四四三	九七			二七五			一五八		二、九六四	
一、九七六、〇三七	二、一〇〇	九〇、九三三	五三、八〇〇	二四、一五〇	二四、一五〇			七三、二〇〇			六九、三〇〇		三七四、八九四	
八、五九九	九	八九	九六	一、一九三	八〇			二四、七〇			一七二		七、四二二	
二七五、五五〇	二、二五〇	一六〇、二七〇	四七、〇四〇	二六、一〇〇	二八、一五〇			一〇八、一五〇			八六、〇〇〇		七、二二二	

ス レ ー ト 煙 突	硝 子 板	空 瓶	其 他 的 硝 子 製 品	硝 子 壩	自 動 車	硝 子 屑	自 轉 車	其 他 的 車 輛	車 輛 部 分 品	時 計	樂 器	度 量 衡 器	機 械 類	肥 料 及 飼 料	木 材	薪 炭 及 其 他 的 燃 料	木 製 品	竹 材 及 籐 製 品
一九	三二	三二	三二	二四	五〇	二四	五〇	二四	九三	二五	八〇四	一、一三六	九、三三二	二、一〇八	四二	一六	二六	
三、五五五	二二、九五五	三、六〇〇	一八、八八二	三、六〇〇	一、八八二	三、六〇〇	一、八八二	三、六〇〇	四、八七五	三、七、九八〇	四、八七五	二、五〇、一四九	八、五、三三〇	四〇、一、七三三	九、一、四四六	七、五、五二二	二、六	
三三	二〇一	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	五	二	二	五	九六六	一、二、四四	六二六	三	三	
八、五二〇	一四、〇八八	四、六五〇	一四、〇八八	四、六五〇	一四、〇八八	四、六五〇	一四、〇八八	四、六五〇	一、六三五	一、〇〇〇	四、八三〇	一〇、六、九〇〇	六〇、〇、六九〇	三、八、八、八二	五、七、七六	二、八、一、四	六〇	
六五	六〇〇	三、五九〇	三、五九〇	三、五九〇	三、五九〇	三、五九〇	三、五九〇	三、五九〇	八〇七	一、九六六	一、九六六	一、九六六	一、九六六	一、八、四、四四	三、四、九	五、四、八	三、三、五〇〇	
三、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	三、三、二四	一〇、九、九〇	一〇、九、九〇	一〇、九、九〇	一〇、九、九〇	六、六、七、五四六	二、八、六、三	九、九、三〇	三、三、五〇〇	
三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	四	四	四	四	四	一、六、一、九二	五、四	三、六、六	八	
一、八六〇	二、〇八三	二、〇八三	二、〇八三	二、〇八三	二、〇八三	二、〇八三	二、〇八三	二、〇八三	三、五、二二	一、〇、〇〇	一、〇、〇〇	一、〇、〇〇	一、〇、〇〇	八、九、八、八二	六、三、六	四、三、五〇〇	一、七、六	
三五	八〇	四、五九四	一、八八	六〇〇	二、二〇	六、七、六八〇	二、二〇	六、七、六八〇	一、九、〇〇〇	三、九	三、九	三、九	三、九	七、五、三、三	六、八	四、〇	二、七、五	
二、四、五〇	四、五九四	六、六、六七	三、〇〇〇	一、二、八〇	四、二、九三〇	一、六、五〇〇	一、六、五〇〇	一、六、五〇〇	一、〇〇〇	二	二	二	二	四、六、六、四二〇	九、六〇	五、七、五三〇	六、八、七五	

酒	藥	染	塗	繭	棉	製	綿	其	織	其	毛	麻	漁	其	肌	帽	足	其他
精	品	料	料	花	花	絲	絲	他	(綿)	他	織	織	網	品	衣	子	袋	類
100	69	157	150	70	1,360	205	205	174	740	246	244	78	3	3	537	54	104	
10,970	47,800	44,616	11,100	2,000	2,000	4,500	2,000	2,000	53,800	17,975	3,090	10,937	3,240	3,240	3,950	2,904	100,737	
977	505	401	87	9	9	75	75	11	88	11	11	27	24	17	435	63	3	
51,722	101,000	86,950	13,910	5,500	1,000	6,800	1,000	15,110	63,600	2,340	2,340	2,340	16,350	3,000	26,400	2,000	10,000	
27	459	384	10	1	1	33	33	7	77	36	149	103	46	20	44	9	11	
1,512,120	513,438	550,000	1,600	1,000	1,000	59,400	1,000	6,480	474,153	78,280	189,000	8,580	46,000	117,500	55,100	6,875		
37	100	77	7	5	5	101	101	22	73	4	4	5	5	10	40	30		
196,200	688,600	90,000	13,500	105,000	105,000	15,750	15,750	74,100	512,560	1,000	80,000	5,000	28,800	4,000	33,000	3,000	30,000	
407	1,976	310	1,171	625	625	477	477	359	811	35	35	29	3	3	353	62	36,600	
356,200	738,300	101,100	2,776,000	1,562,500	1,562,500	219,150	219,150	177,000	648,800	65,000	65,000	3,610			282,000			

四五

樟	蠟	其	植	菜	機	重	輕	揮	石	獸	皮	皮	食	鳥	濟	鯨	獸	織
腦	燭	他	油	油	油	油	油	油	油	骨	品	革	品	卵	物	肉	肉	(詰
及	蠟	物	性	子	械	發	發	製	製	料	料	料	料	料	料	料	料	詰
二	135	12	27	10	1,064	1,064	1,064	1,064	6,050	29	48	294	8	33	1,210	243	詰	
1,700	47,750	1,910	9,240	2,500	1,484	1,484	1,484	1,484	483,996	37,700	200	37,730	1,840	1,254	25,939	69,000	(詰	
1	1	2	2	2	2	2	2	2	4,633	61	183	183	11	30	1,046	416	詰	
1	1	1	1	1	1	1	1	1	3,500	3,450	4,550	4,550	2,760	1,500	15,690	1,046	詰	
2	2	4	6	1	1,159	1,159	1,159	1,159	6,214	77	94	489	10	38	193,920	489	詰	
1,000	7,000	6,000	1,690	94,933	350,953	350,953	350,953	350,953	744,700	5,487	46,000	209,676	2,300	2,514	106,310	106,310	詰	
1	25	11	1	1	1,933	1,933	1,933	1,933	5,933	10	44	44	157	157	850	850	詰	
8,800	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	71,960	12,000	85,266	85,266	205,500	205,500	192,620	192,620	詰	
3	3	3	3	3	3	3	3	3	7,676	13	356	356	45	45	3	3	詰	
1,100	270,000	270,000	270,000	270,000	270,000	270,000	270,000	270,000	1,074,740	16,800	72,850	72,850	310,000	310,000	4,400	4,400	詰	

四五

護謨及同製品	一四三	四六、二六〇	一九九	六三、〇〇〇	二四八	六、七〇〇	七	三、七六〇	二六七	一八、一〇〇
コルク及同製品	一六九	六〇、七五〇	二二九	七〇、六五〇	九〇	一三、五〇〇	一〇〇	二五、〇〇〇	一〇九	一〇九
漆器	五	一、二〇〇	一〇	一、八六〇	二五	五、〇〇〇	一四〇	一四、〇〇〇	一〇九	三、七〇〇
タイル	二〇	三二、二〇〇	一八	四五、五〇〇	四〇	三、二〇〇	一一〇	二、二〇〇	一五七	一、〇八〇
其他の蘭製品	二〇	三二、二〇〇	一八	四五、五〇〇	四〇	三、二〇〇	一一〇	二、二〇〇	一五七	一、〇八〇
葯製	二〇	三二、二〇〇	一八	四五、五〇〇	四〇	三、二〇〇	一一〇	二、二〇〇	一五七	一、〇八〇
化粧及小間物	一六〇	七、一五〇	二八七	一七、三〇〇	二七	六、七〇〇	六七八	五九六、六四〇	六五〇	六五〇、〇〇〇
文房具	一六〇	七、一五〇	二八七	一七、三〇〇	二七	六、七〇〇	六七八	五九六、六四〇	六五〇	六五〇、〇〇〇
佛香	一六〇	七、一五〇	二八七	一七、三〇〇	二七	六、七〇〇	六七八	五九六、六四〇	六五〇	六五〇、〇〇〇
線香	一六〇	七、一五〇	二八七	一七、三〇〇	二七	六、七〇〇	六七八	五九六、六四〇	六五〇	六五〇、〇〇〇
電氣用品	六二	三六、六五〇	三六〇	一、二六、〇〇〇	二四	一四八、五九三	二四六	一七三、二〇〇	三四〇	二七、〇〇〇
農具	六二	三六、六五〇	三六〇	一、二六、〇〇〇	二四	一四八、五九三	二四六	一七三、二〇〇	三四〇	二七、〇〇〇
船具	二七	五三、五三〇	一五六	三九、〇〇〇	一五三	三九、七八〇	一四七	五八、八〇〇	一五七	七五、三六〇
玩具	二七	五三、五三〇	一五六	三九、〇〇〇	一五三	三九、七八〇	一四七	五八、八〇〇	一五七	七五、三六〇
引越	二七	五三、五三〇	一五六	三九、〇〇〇	一五三	三九、七八〇	一四七	五八、八〇〇	一五七	七五、三六〇
雜貨	四、〇九九	一、四七五、四九四	五、七三三	一、二四三、六五五	一、八三九	四九三、八二六	一、七二六	二九三、七九四	一、〇九〇	一、八、六〇〇
其他	四、〇九九	一、四七五、四九四	五、七三三	一、二四三、六五五	一、八三九	四九三、八二六	一、七二六	二九三、七九四	一、〇九〇	一、八、六〇〇

珐瑯磁器	二、九二二	一〇九、六七一	三、二六九	四三、六四〇	一七二	三、四〇〇	一	二六八	一三三	二六、九五〇
陶磁器類	二、九二二	一〇九、六七一	三、二六九	四三、六四〇	一七二	三、四〇〇	一	二六八	一三三	二六、九五〇
煉瓦	二、九二二	一〇九、六七一	三、二六九	四三、六四〇	一七二	三、四〇〇	一	二六八	一三三	二六、九五〇
洋瓦	二、九二二	一〇九、六七一	三、二六九	四三、六四〇	一七二	三、四〇〇	一	二六八	一三三	二六、九五〇
硝子板	二、〇九九	三三、九九〇	八二五	一一、一五〇	五九	八〇、〇〇〇	八四	一〇一、六五八	一、五七九	一一、五八〇
其他の硝子製品	二、〇九九	三三、九九〇	八二五	一一、一五〇	五九	八〇、〇〇〇	八四	一〇一、六五八	一、五七九	一一、五八〇
自動車	六四	三六、〇三三	七八	三五、一〇〇	四〇	一八、〇〇〇	二〇	九、〇〇〇	二四三	一三、六五〇
自轉車	六四	三六、〇三三	七八	三五、一〇〇	四〇	一八、〇〇〇	二〇	九、〇〇〇	二四三	一三、六五〇
自轉車	六四	三六、〇三三	七八	三五、一〇〇	四〇	一八、〇〇〇	二〇	九、〇〇〇	二四三	一三、六五〇
車輛部分	一八三	六三、九二八	二八八	一九、五四三	二二	一三三、三九七	一一〇	七三、〇〇〇	一〇〇	七〇、〇〇〇
時計	四九	二六、三五〇	九〇	七三、一〇〇	四六	二七、六〇〇	四	二、〇〇〇	三	一九、〇〇〇
樂器	一、四〇二	五六、一四〇	一七二	六八、九〇〇	四四	一八、四八〇	五	二、二五〇	八	四、〇〇〇
度量衡器	三七	三〇、四〇〇	三六	三三、三〇〇	四〇	一八、〇〇〇	二八	一四、〇〇〇	一五	九、〇〇〇
機械類	四三	二五、三六〇	二七〇	一四、六〇〇	二四	一七三、三〇〇	一三	一四八、三三三	一三四	一七四、一〇〇
肥料及飼料	一五、四〇七	四九、二六四	四九四	一五、二六三	七六八	三五、六四八	二、三三八	一四四、二八三	二、三三七	一五九、二九〇
木炭及其他の燃料	三三、六八二	一、四四、九九三	四、五、六五四	二、二、三、八〇四	三、六、六五三	一、六、六二〇	一、三、九五〇	九〇三、三三五	一三、五九七	九三、六三〇
木材	九、〇一六	一四四、二七三	七、三五六	一三、三八五	九、四四三	一四九、四九九	一五、九七四	二、一三、一三三	一七、四〇〇	二五三、二六〇
薪炭	九、〇一六	一四四、二七三	七、三五六	一三、三八五	九、四四三	一四九、四九九	一五、九七四	二、一三、一三三	一七、四〇〇	二五三、二六〇
木製	六〇九	一一、九〇〇	六〇四	九九、八九〇	五二六	八五、六九〇	四九六	六三、五六	五二	七八、四七〇
竹材及籐製品	五六	一一、三三〇	五二	一三、八三九	五二六	八五、六九〇	四九六	六三、五六	五二	七八、四七〇

八、船積貨物仕向地別噸量價額表

(昭和十三年)

(價額五萬圓以上のもの掲記)

五〇

品種	船積		仕向地	品種	船卸	
	噸數	價額			噸數	價額
朝鮮米	七九	一八、五〇〇	對馬	白米	二六七	五八、七四〇
糯米	二九二	六七、六〇〇	釜山	朝鮮米	二、一四九	二、一八、三一一
雜穀	七〇〇	一六、〇〇〇	嚴原	蓬萊米	四六九	九三、八〇〇
罐詰食料	二九九	六六、九〇〇	仁川	其他の海産	一、〇六三	三六、四〇〇
水	五八、八五四	三五三、二四〇	朝鮮	同	三六七	八八、〇八〇
其他の食料	一、四九	一七二、五〇〇	同	同	四〇四	六八、六八〇
品	九一〇	一三六、五〇〇	釜山	蔬菜	一七四	六九、六〇〇
同	四七七	七一、五五〇	對馬	麥酒	三、〇一〇	五七三、八〇〇
同	三二四	三〇、八六〇	壹岐	麥酒	一、〇五〇	一九九、五〇〇
煙草	一五七	一五、四三〇	長崎	其他の洋酒	七	六〇、〇〇〇
石	八二八	一一五、九一〇	對馬	清凉飲料水	四、六一〇	六九、五〇〇
同	七三五	一〇二、九〇〇	佐世保	砂糖	一九〇	五七、〇〇〇
同	五三三	七四、四八〇	五島	煉乳	二〇九	一〇四、五〇〇
揮發油	四、四九六	六七四、〇〇〇	對馬	罐詰食料	五九二	一七七、六〇〇
同	一、八一四	二七二、一〇〇	佐世保	鯨肉	一、六〇〇	三三〇、〇〇〇

同	七九三	一一八、九五〇	沖繩	其他の食料	二七五	五五、〇〇〇	大阪
機械油	二、八八八	五七五、四四〇	五島、壹岐、對馬	揮發油	六三〇	九四、五〇〇	同
小麥粉	五、五八八	三三三、五二〇	仁川	大麥	一、一〇〇	一四三、〇〇〇	同
小麥粉	六三〇	一三六、〇〇〇	川	大麥	八八一	一〇五、七〇〇	山
同	二五五	五、一〇〇〇	壹岐	同	六三三	七四、七〇〇	山
同	五四六	五四、六〇〇	釜山	同	六〇三	七三、五〇〇	山
清酒	五三四	二六七、〇〇〇	對馬	大豆	五、五一〇	七二六、三〇〇	釜山
同	一七二	八九、四四〇	壹岐	同	五九三	七七、〇〇〇	成津
同	一三〇	五三、〇〇〇	嚴原	同	三九一	五〇、八〇〇	清津
麥酒	四、二二〇	八〇、八〇〇	大阪	小豆	三〇七	五三、一九〇	釜山
麥酒	二、七二一	五二六、九九〇	門司	澱粉	四九〇	一二七、四〇〇	神浦
同	九三三	一七七、六五〇	長崎	食塩	三、六九三	一八四、六五〇	門司
同	三三〇	六二、七〇〇	鹿兒	同	一、四四一	五七、一〇〇	西浦
同	三三九	六四、四一〇	下關	鮮魚	二九、三四三	六、四五五、四〇〇	朝鮮
水飴	一、四八一	三八五、〇六〇	釜山	同	一、三八三〇	一、三八三、〇〇〇	東支那
同	三〇〇	七八、〇〇〇	仁川	其他の海産	二四三	八九、九一〇	北村
同	二二七	五九、〇一〇	基隆	其他の海産	一、三一一	四五五、七四〇	壹岐
重油	一、三二五	五三、六〇〇	唐津	機械油	九三四	三二、四一〇	下關
茶子油	六六〇	二二、二〇〇	神戶	重油	九、九七〇	三九八、八〇〇	門司

次に貨物の噸當り諸掛費を見るに、石炭に就ては大正十二年十二月一日の申合せありたるも、其後其の履行殆んどなく現在貨物に就き何等の規定も無く、各店各様にして歸一する處無きも、大體次の如きものである。

石炭 港内 九〇錢位
港外 一、一五錢位
木材 同 一、三〇錢位
雜貨 同 一、二〇錢より二圓の間

尙博多海運株式會社の定むるものを掲記すれば左の如くである。

輸出入重要品上屋(倉庫)より本船間諸掛費率表
イ、輸出品

品名	單位	搬構出賃内	貯積賃	貯賃	人船夫賃側	人船夫賃内	計	貨噸當金リ
雜品	一立方尺	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	一、〇〇
砂糖	百斤袋	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	一、〇〇
木材	一噸(容積)	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	一、〇〇
金物	同(重量)	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	一、〇〇
軌條	同(ク)	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	一、〇〇
石材	同(ク)	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	一、〇〇
石油	同	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	一、〇〇
麥粉	袋	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	一、〇〇
棉	一立方尺	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	一、〇〇
雜貨	同	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	一、〇〇

ロ、輸出品

品名	單位	荷船役賃内	荷船役賃側	貯賃	水切賃	計	貨噸當銀リ
礦油	噸	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	一、〇〇
セメント	袋	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	一、〇〇
肥料	袋	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	一、〇〇
米	俵	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	一、〇〇
麥	同	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	一、〇〇
大豆	同	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇	一、〇〇
醬油	四斗樽	〇、〇一	〇、〇一	〇、〇一	〇、〇一	〇、〇一	一、〇〇
石炭	噸	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	一、一〇
肥料	二打函	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	一、一〇
大豆	同	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	一、一〇
麥	同	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	一、一〇
米	同	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	一、一〇
大豆	同	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	一、一〇
糖	噸	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	一、一〇
麥	四斗入一噸	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	一、一〇
小砂	噸	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	一、一〇
礦油	噸	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	一、一〇

品名	単位	数量	金額
棉花	同	一、五	一、五五
油粕	同	一、五	一、五五
大豆	同	一、五	一、五五
飼料肥	六斗八	一、〇七	一、四八
木材	噸當り	一、三	一、三〇
鮮魚	同	一、五	一、七〇
織物	同	一、五	一、七〇
鐵物	同	一、五	一、五五
計			一、五五

五八

第三節 乘降船客調

年別	乗込人員	上陸人員	合計
昭和九年	三九、八〇七	四五、九六三	八五、七七〇
昭和十年	四一、六〇九	四四、一七八	八五、七八七
昭和十一年	四三、八四五	四五、七七四	八九、六一九
昭和十二年	四四、九五三	四七、〇二七	九一、九八〇
昭和十三年	四四、二五七	四七、五〇四	九一、七六一
計			四三四

第五章 植物検査貨物

(昭和十三年)

一、輸移入植物検査表

種別	数量	金額
イ、税關本署	一、三七五疋	一、二五〇圓
ロ、福岡第一飛行場	計	四六圓
計	一、二九六圓	一、二九六圓

二、仕出地別輸移入植物検査表

輸移入	植物部分	数量	金額
(一) 輸入	イ、税關本署	一六二本	一一圓
	満洲國植物部分	八八本	二圓
	口、福岡第一飛行場	一〇個	三圓
	満洲國植物部分	四疋	二圓
	關東州種子	二〇個	九〇圓
	關東州種子	七〇九本	一三圓
	中華民國觀賞植物	三三〇本	六圓
	植物部分	七〇個	六二圓
	球根類	三〇疋	
	生果實		
(二) 移入	イ、税關本署	一本	七四圓
	臺灣觀賞植物	一六九本	一、三七七疋
	朝鮮觀賞植物	二、二五〇個	二、九二七個
	朝鮮球根類	二〇三疋	九本
	南洋群島觀賞植物	二〇疋	
	口、福岡第一飛行場	一〇〇本	
	朝鮮植物部分	五疋	
	朝鮮種子	一、七二一個	
	生果實		
	計		五九

第六章 博多港より内外主要港灣に至る距離

六〇

別府	釜山	伏木	馬山	馬公	新島	宇品	石垣	糸崎	嚴原	伊萬里	安平	芦邊	熱田	青森	内國
一四〇	二二	四八	一三	八六	五二	一七	六八	一八	六七	五九	八三	三六	四九	七三	三三
呼子	雄基	門司	群山	吳山	基隆	釜石(經後水道)	唐津	勝本	鹿兒島	岡山	大阪	大泊	小樽	三角	三池
三〇	五四	六〇	三六	一八	六九	八三	三〇	四〇	二九	二四	三〇	九一	七九	一七	三三
多度津	仁川	清津	清津	清水	佐世保	境野浦	元山	高知	神戶	麗水	木浦	若津	羅津	橫須賀	橫濱
三三	四八	五〇	四三	三三	九八	二六	四二	三六	三〇	一五	二六	五六	五八	五九	六三
管口	浦鹽斯德	吳淞	厦門	安東	外那	那霸	長崎	徳山	東京	敦賀	鎮南浦	鎮海	銚子	淡水	高雄
七二	五八	四八	八七	六〇	五〇	二七	一七	一〇	六五	三四	五八	二八	六五	七一	八九
七二	五八	四八	八七	六〇	五〇	二七	一七	一〇	六五	三四	五八	二八	六五	七一	八九

第七章 博多港に於て現在利用せらるゝ小蒸汽船、發動船及舢船等の數

上海	廣東	漢口
五〇〇	一三三	一〇五
秦皇島	シヤトル(經門司橫濱)	シヤトル(經長崎)
六八五	二、五六	四、八六
芝罘	太沽	大連
五九	七三	五三
香港	福州	青島
一一三	七六	五三〇

△小蒸汽船 所有者 隻數 總噸數
 志賀島汽船部 二隻 六〇噸
 三井物産株式會社 二隻 四七噸
 西川歌之助回漕店 一隻 四五噸
 博多灣運輸株式會社 一隻 二三噸

△發船 其の船數の調査したる結果は、現在利用せられてゐる隻數は約一〇隻である。その外に砂船二四隻、魚船一七隻等がある。

△舢船 昭和八年には六二隻五、二〇五噸、昭和九年には七七隻六、五六八噸、昭和十年八五隻七、一一〇噸、昭和十一年末現在九四隻八、二二八噸(西戸崎一五隻、一、四〇〇噸を含む)となつてゐる。昭和十三年九六隻八、四七八噸。

第八章 博多港關係運送業者

六一

朝鮮郵船株式會社代理店	株式會社 北商	滿鮮運輸株式會社汽船	山九運輸株式會社出張所
日本郵船株式會社取扱店	株式會社 博多商船組	日下部汽船專屬取扱	中村組
朝鮮汽船株式會社取扱店	株式會社 博多商船組	ヒリツビン木材會社取扱	田淵汽船博多出張所
日本通運株式會社第一加盟店	株式會社 博多商船組	自船取扱	五福運輸株式會社
大阪商船株式會社代理店	株式會社 博多商船組	發動船取扱	井筒屋商店(鶴丸商店代理店)
九州郵船株式會社代理店	株式會社 博多商船組	發動機船、帆船取扱	岡崎 回漕店
岡崎汽船株式會社代理店	株式會社 博多商船組	〃	西川 回漕店
野母商船株式會社代理店	株式會社 博多商船組	〃	木村 回漕店
長崎合同運送株式會社代理店	株式會社 博多商船組	〃	山下 回漕店
尼崎汽船部代理店	博多海運株式會社	〃	對博商會
汽船取扱	博多 共同組	〃	平上 回漕店
〃	長井運輸合資會社	〃	北島 回漕店
〃	博多灣運輸株式會社	〃	其他 二十數店

第九章 通漁船並にその漁獲物

既往五年の通漁船の隻數、噸數は左の通りで、年々増加の趨勢にある。

昭和九年	七、四六八隻	二二一、〇七〇噸
昭和十年	七、五八五隻	一九九、四九八噸
昭和十一年	八、〇二〇隻	二〇九、四五二噸

昭和十二年 九、一三〇隻 二六五、四一二噸
昭和十三年 八、九五三隻 二五二、八三〇噸

次に之が漁獲物は第四章第二節四項に述べたるが如く、

昭和九年	四一、四七三噸	五、〇八九、九〇七圓
昭和十年	三一、〇二六噸	五、四二六、六九四圓
昭和十一年	三二、〇三五噸	六、二四九、八一三圓
昭和十二年	四三、七八〇噸	七、四〇三、六四四圓
昭和十三年	四三、六一八噸	七、九五六、六五〇圓

にして、逐年増加しつつあり。尙ほこの外に箱崎等の漁業者が手舟に依りて港内に釣したものの相當の量に達すべし。

第二編 博多港背域の主要外國貿易關係會社工場商店 第一章 總說

博多港背域内に於ける外國貿易關係會社工場商店等の原料、製品等の大體は第二章以下の通りにして背域内に屬するもの原料三十八萬餘噸七千四百萬圓、製品五十二萬餘噸一億四千餘萬圓、原料製品の總高約九十萬噸二億一千餘萬圓で其の生産高の福岡、久留米、佐賀、日田の地方別は左の如くである。

工業別	福岡地方			久留米地方			佐賀地方			日田地方		
	噸	千圓	百圓	噸	千圓	百圓	噸	千圓	百圓	噸	千圓	百圓
護謨	一〇、四〇三	四六、二〇二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
紡績織糸綿	四、七一五	八、三八五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
製粉	三、五四〇	一一、二四五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
鐵工、機械	六、〇七二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
博多名産	五、三〇九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
紙、板	二、四六五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
木竹	七二九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
清酒	一三、六九五	九、三九三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
其他	四六、九二八	八五、六七五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一〇、四〇三	四六、二〇二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

尚背域外に屬するも鐵道關係により多少博多港利用の關係を有するものは第六章にあるが如く大牟田地方原料九十九萬噸四千六百餘萬圓、製品八十七萬噸八千二百餘萬圓、計約百八十六萬噸一億二千八百萬圓で、熊本地方は原料三十一萬噸

八百萬圓、製品三十五萬噸三千五百萬圓、計約六十六萬噸四千三百萬圓である。

第二章 福岡市及其附近

福岡市及其附近會社工場商店は紡績製綿工業四、鐵工諸機械工業一二、製粉工業一、護謨工業一、食料品工業三、麥酒工業一、製紙食器工業一、博多名産工業四、清酒工業三、製油工業二、大豆工業一計三二である。之が原料九萬一千噸二千萬圓、製品十八萬噸四千六百萬圓（製品の噸量が原料の噸量より大なるは荷造後の容積増大したるによる）にして左記の通り原料は噸量に於て鐵工諸機械工業、製粉工業、食料品工業の順で價額に於て護謨工業、紡績製綿工業の順である。製品は噸量に於て麥酒工業、鐵工諸機械工業、護謨工業、食料品工業の順で、價額に於ては麥酒工業、護謨工業、鐵工諸機械工業、博多名産工業、紡績製綿工業の順である。而して原料は其の約三割二分が外地産にして、外地産は門司―汽車約八割四分、博多港直入一割、阪神（門司、若松）―博多港揚六分である。製品はその四割三分が外地行にして、外地行は博多港積約四割七分、門司港積約三割八分残り一割五分汽車―阪神積及鐵路朝鮮行である。

工業種別	原料		製品	
	噸	千圓	噸	千圓
紡績製綿工業	三、六〇四	三、四八五	一〇、〇五八	四、七一五
鐵工諸機械工業	二五、八一九	二、八六四	三九、〇一八	六、〇七二
製粉工業	二〇、五七四	三、二八一	一五、六三八	三、五四〇
護謨工業	七、一九七	三、七六四	三三、六二三	一〇、四〇三
食料品工業	一四、四五六	一、七一七	一六、五六〇	二、四二七
麥酒工業	三、八二八	六〇七	四八、七一七	一〇、六二二
製紙容器工業	四、五五八	一、五一八	五、六五三	二、四六五
博多名産工業	五、一九八	二、〇六九	三、二一八	五、三〇九
製油工業	二、八〇四	三二一	二、六七二	三四六
清酒工業	二、二〇六	一八九	三、八一五	七二九
計	一〇、四〇三	四六、二〇二	一〇、四〇三	六五

大豆工業	一、二〇〇	二四〇	一、一八〇	三〇〇
計	九一、四四四	二〇、〇五五	一八〇、一五二	四六、九二八

六六

第三章 久留米及其附近

久留米市及其附近會社工場商店は護謨工業三、製粉工業三、紡績織糸工業五、製紙工業三、製糖工業一、硝子工業一、生蠟工業二、漆器工業一、花菴工業(組合)一、製茶工業(組合)一、罐詰工業一(内容一六ヶ所)清酒工業一〇、精油工業一、織物工業(シデ紐)一計三四にして之が原料十七萬三千噸、四千七百四十七萬圓、製品二十四萬噸、八千五百六十九萬圓にして左記の通り原料は噸量に於て製粉工業、護謨工業、製糖工業、紡績工業の順で價額に於ては護謨工業、製粉工業、紡績工業、製糖工業の順である。製品は噸量に於て護謨工業、製粉工業、製糖工業の順で價額に於ては護謨工業、製粉工業、紡績工業、製糖工業の順である。而して原料の内ゴム、棉花、原糖は外地産にして、原糖は大牟田港より棉花は門司港より、ゴムは門司港又は神戸港若松港より供給を受く。製品は其の約三割五分が外地行にして、外地行は門司港積約四割五分、博多港積約四割四分にして、その他一割強が若松、神戸、長崎、佐世保等の積込である。

工業種別	原料	製品
護謨工業	二三、三九一	二一、二七三
製粉工業	七〇、〇〇〇	一〇、九五一
紡績工業	一一、八五四	六、〇三九
製紙工業	三、〇〇〇	一五〇
製糖工業	一五、六九四	二、八七二
硝子工業	四、五〇〇	六四
生蠟工業	二、〇〇〇	五〇〇
漆器工業	二四〇	一一〇

紙工業(組合)	五、〇〇〇	二五〇	一〇、〇〇〇	一、三〇〇
花菴工業(組合)	五、〇〇〇	一、三〇〇	七、〇〇〇	二、四〇〇
製茶工業(組合)	三、三〇〇	三二〇	三、〇〇〇	七二〇
魚貝罐詰工業	二〇、七〇〇	二、三九二	一〇、八七二	三、三一二
清酒工業	八、三〇〇	九〇六	一六、七六五	三、八七四
精油工業	八五〇	二六〇	九〇〇	二七八
織物業(シデ紐)	五〇	七五	一四九	一六三
計	一七三、八七九	四七、四七二	二四三、三五三	八五、六七五

第四章 佐賀地方

佐賀地方は戸上電気製作所の外板紙、製紙工場三及飼料工場一あり。戸上電気製作所は未發表である。之に酒造業三を加ふれば、原料製品の數量、價額の推定左記の通りにして原料は外地産はその約一割五分にして輸移入港は門司を第一とし三角、神戸、長崎の順とし、他は鐵道及附近より供給を受く、製品は外地行その一割五分位にして、門司港九、博多港一の割合を以て輸移出せられ、内地消費は鐵道輸送大部であらう。

原料	三四、〇〇〇噸	一、七〇〇、〇〇〇圓
製品	二一、〇〇〇噸	四、〇〇〇、〇〇〇圓

第五章 日田地方

日田地方の生産品は木竹及之が製品大部を占め、製品の大部は福博に、丸太類の大部は大川に出て加工又はその儘需要地に供給せられてゐる。調査したる個所は日田木竹商組合外三ヶ所でその製品の合計は左の通りで木材の外漆器類、日本

六七

丸、酒類の外地行が多少ある。

製 品

八五、〇〇〇噸

五、〇〇〇、〇〇〇圓

第六章 大牟田、熊本地方

第一節 大牟田地方

當地方の鑛業、工業は殆んど三井の企業に係り幾多の港灣施設整備し、近代的化學工業は驚異的發達をなしつつある。主なる會社、工場は三井鑛山三池製鍊所、同三池染料工業所、電氣化學工業工場及鐘淵紡績工場であるが多くの軍需品工場で、其の原料製品の詳細は述べ難きも既往の實蹟より凡そ左の如くなるべく、而して其の原料は染料工業所の外國に仰ぐ工業鹽などを阪神、門司の諸港より、鐘紡の外棉を門司港より輸入する外、殆ど大部は悉く汽車又は現地受給若は三池港より輸入し、製品八十七萬餘噸のうち滿鮮、臺灣、南洋、獨逸行僅々一萬噸内外が門司、博多兩港より輸出せらるゝの外、大部分は總て汽車又は三池港若は大牟田港より輸送せらるゝ現況と見らる。

原 料
製 品

九九八、〇〇〇噸
八七五、六八九噸

四六、九五七、〇〇〇圓
八一、八〇四、〇〇〇圓

第二節 熊本縣地方

熊本縣地方は電力、用水に恵まれ、肥料製紙の諸工業は全國屈指の一である。主なる工場は日本化學工業鏡工場、日本窒素水俣工場、王子製紙の八代及坂本の諸工場で其の原料製品の合計(王子製紙は前年分計上)は左の如く、而して原料は王子製紙の一部汽車を利用するの外、三十一萬噸は總て三角港及臨港より輸入せられ、製品は鮮滿(支那)臺灣行の僅々二萬餘噸が門司港より輸出せらるゝの外、三十三萬噸は製紙は汽車、肥料類は臨港にて夫々輸送せらる。而して汽車輸送の阪神以東行の大部は豊肥線によりて大分に出で海路をとりつゝあるは注目に値する。

原 料
製 品

三一〇、〇〇〇噸
三五〇、〇〇〇噸

八、〇〇〇、〇〇〇圓
三五、〇〇〇、〇〇〇圓

第三編 福岡市近郊町村産業經濟事情

第一章 近郊町村の範圍、面積、戸口

博多港は修築工事の完成、關門海峡隧道の開通及産業再編成に伴ふ經濟機構の變革等により、東亞建設に重大なる役割を演ずべき道程にあり。而して之に處すべき要諦は港灣施設工業地帯の充實、主要航路の開設、航空港の擴大等の外近郊町村の産業經濟諸事情を東亞建設に順應すべく綜合統一して大福岡を建設するにあるは論を俟たない。本編近郊町村は差當り市と共に東に博多港を抱擁する志賀島、和臼、香椎、多々良、箱崎の五ヶ町村、西に接して海に面する壹岐、今宿の兩村及陸部那珂、曰佐、春日、岩戸、田隈、志免の六町村及港頭殘島村の十四ヶ町村即ち市と最も密接なる關係を有する最少範圍とす。數字は昭和十三年中又は同年末のものである。

第一節 近郊町村の面積

近郊町村の面積は合計九方里六合にして、岩戸村の一方里二合を最大として春日村の九合一勺、和臼の八合五勺、今宿の七合八勺、香椎の七合一勺、多々良、志賀島、曰佐の各七合などに次ぎ、最小は殘島の二合三勺で箱崎の四合、壹岐の五合なども小の部に屬する。

現在福岡市は東西四里九町、南北三里四町で假りに是等町村を加ふれば東西五里二五町南北五里十八町となり、福岡市の面積は五方里七合四勺にして近郊町村九方里六合の六割に當り、合計十五方里三合四勺となる。

第二節 近郊町村の業種別戸口並土地反別

近郊町村の業種別戸數、人口は總戸數一萬六千五百六十二人にして、農家の四千三百二十五戸を第一とし、工業の二千八百六戸、商業の二千六百五十戸、鑛業の二千二百八十七戸、水産業の五百九十戸の順である。

戸數の半以上農家なるは春日、岩戸、田隈、壹岐の四村にして、多々良、曰佐、今宿の三村も農家を主とす。商家の割合は箱崎を第一とし香椎之に次ぎ、水産は殆ど志賀島、箱崎、和臼、殘島の四町村に限られ、工業は那珂村卓絶し、鑛業は志免町を第一とす。

人口は八萬九千五百八十六人にして志免の一萬八千八十人を筆頭とし、箱崎の一萬六千二百三十九人、那珂の一萬一千四百七十五人之に次ぎ、以下志賀島、多々良、田隈、春日、壹岐、和臼、曰佐、香椎などの順である。

次に近郊町村の土地反別は一萬一千九百二十五町歩にして、田四千五百二十三町を第一とし、山林四千五百五町、畑千二百五十二町、原野千二百二十二町、宅地四百七十町の順である。(福岡市は田一、五五四町、畑四三〇町、宅地一一七町山林一、八一五町、原野二四七町、其の他を合せて六、二六八町)

田は春日村の五四二町、多々良村の五二八町、壹岐村の五一五町が目立つて多く。

畑は志賀島村最も多く、春日、香椎兩村之に次ぐ。

山林、原野は岩戸村を第一とし、志賀島、多々良、春日、香椎、今宿などの諸村も多い。

宅地十萬坪以上は那珂、志免、箱崎、多々良、春日、志賀島、田隈の七町村にして、一戸當宅地坪數は九六坪にして福岡市の六二坪より廣く、春日村の一六八坪、壹岐村の一六〇坪、岩戸村の一五八坪、香椎村の一五二坪など頗る廣大なるに反し箱崎、志免兩町の如きは五一坪にして福岡市より少く、場末、田園、鑛山街などの居宅事情を如實に示してゐる。

第二章 近郊町村の産業經濟事情

第一節 近郊町村の産業

近郊十四ヶ町村の産業別生産額は左表の通り四千有餘萬圓にして工産の三千萬圓頭抜けて多く、農産、鑛産之に次ぐ。農産は壹岐村を第一とし、田隈、多々良、那珂、春日の諸村の順で何れも米を第一とし、茶種、麥、蔬菜などが重要なものである。畜産は鶏卵を主とし、牛乳、養豚などである。

林産は岩戸村の木竹材の外見るべきものなし。
 水産は箱崎町及志賀島村が鮮魚供給地である。
 工産は那珂村の二千三百四十三萬圓その過半を占め、日佐村、箱崎町之に次ぐ。
 鑛産は志免町大部である。

福岡市の生産額は農産三百三十五萬圓、畜産百二十四萬圓、林産四萬五千圓、水産四百八十二萬圓、工産八千四百八十九萬圓、鑛産四百二十七萬圓、計九千八百六十一萬圓で、近郊町村を合すれば總生産額一億四千萬圓となり、その大宗工産は一億一千五百六十八萬圓となる。

近郊町村年生産額

町村名	農産	畜産	林産	水産	工産	鑛産	計
箱崎町	二六八、五三三	六八、四一九	—	三三八、五二九	二七、二四四	—	三、二六六、六〇五
多々良村	四八四、一九九	一一、四九四	—	三四三	四、〇〇九	—	八〇〇、七三〇
香椎村	二〇八、六八八	三三七	—	—	四七、三三九	—	三、七五、三五四
和白村	二五、一一二	三五、九六〇	—	六、七三三	四、五、〇〇〇	—	四、〇、七四三
志賀島村	二二五、九〇〇	一、五〇〇	—	一、六八〇	四、八、二〇〇	—	一、〇、九〇、九〇〇
那珂村	四七七、七〇九	三八、一九〇	—	九、二〇〇	二、四、三、一〇五	—	三、九、九、二〇〇
日佐村	三五〇、九〇〇	一八、一八〇	—	—	三、四、二、一〇一	—	三、七、九、二〇一
春日村	四六一、五八八	六五、二三三	—	—	—	—	五、二、六、八〇一
岩戸村	四二八、六五五	—	—	一、〇一一	二、二、二、〇〇	—	四、八、七、五〇一
田隈村	六〇三、〇〇六	六五、八〇〇	—	—	一、〇、二、〇〇	—	七、七、一、一五六

残島村	四九、〇五八	三、九四六	—	—	—	—	七、七、七、九三
壹岐村	六三一、三〇〇	四、四七五	—	—	一、七、一〇	—	六、六、一、四八五
今宿村	三三四、六八九	—	—	—	五、五、八〇〇	—	三、〇、三、四八九
志免町	三三四、九七五	四九、一八四	—	—	三、一、八、二五〇	—	四、三、七、〇九八
計	四、九〇〇、四三九	三六三、七〇八	八九、二〇九	五〇七、三三二	三〇、七、八、三五九	四、一、九、四、九〇四	四〇、八、四、三、九六〇

尙町村別に生産の大体を見るに。

箱崎町 農産は米の四、六四〇石、園藝の五萬圓が主なるもので、畜産は牛乳、水産は鮮魚の外蠣、淺利などの養殖あり、工産は器具機械を主とし、綿織物、清酒、セメント製品、飲料品などである。

多々良村 農産は米一、六一八石、麥一、二二二石、茶種三、八七一石などで、畜産は鶏卵、豚、林産は杭木、工産は瓦土管、煉瓦、鑛産は石炭である。

香椎村 農産は米四、三二〇石、麥七、二二石、茶種一、四六五石などで、林産は杭木、工産は酒、菓子、醤油、鑛産は砂利である。

和白村 農産は米四、四二六石、麥三、九一石、茶種一、五五三石、蔬菜類六萬圓が主なるもので、畜産は鶏卵、水産加工品に味醂干あり、鑛産は石炭である。

志賀島村 農産は米一、〇〇〇石、麥八、五〇石、特産枇杷は二萬五千圓である。林産は用材で、水産は鮮魚、工産はライジグサン石油の製罐が主で鑛産は石炭である。

那珂村 農産は米九、九三一石、麥一、一二六石、園藝農産物六萬六千圓、茶種五萬五千圓などが主なるものである。畜産は養雞、水産は川漁、工産は鐵製品、麥酒、飴、植物油、製函などである。

日佐村 農産は米七、二五七石、茶種一、八三二石、麥一、一七一石が主なるもので、畜産は養雞、養豚、工産は麥粉、菓子、アイスクリームである。

春日村 農産は米一〇、二一〇石、麥一、六〇〇石、菜種二、二七八石が主で、畜産は牛乳、卵、豚である。
岩戸村 農産は米七、二四五石、麥二、一二八石、園藝農産物が主で、林産は杭木、竹、工産は竹細工、鑛産は砂利、花崗石などである。

田隈村 農産は米一二、九三六石、麥二、三四五石、菜種八萬圓、蔬菜三萬八千圓が主なるもので副業の吹蓆、繩など約三萬圓あり、畜産は牛、豚、工産は産業組合の茶種油、鑛産は石材である。

残島村 農産は米三九五石、麥二二七石、蔬菜類三萬圓で、畜産は養鶏、林産は木竹材、木炭、水産は鮮魚である。
壹岐村 農産は米一二、八六〇石、麥五、六九二石、菜種三、三五二石、園藝食物一萬五千圓が主なるもので、林産は用材である。

今宿村 農産は米四、二六九石、麥一、〇二八石、園藝食物四萬圓などで、工産は清酒、鑛産は碎石である。
志免町 農産は米七、三三三石、麥一、二八五石、菜種二、二四二石、蔬菜四萬三千圓が主なるもので、畜産は養鶏、養豚である。工産は雷管、煉瓦、瓦土管、醬油で、鑛産は石炭である。

第二節 近郊町村出入物資の概要

大工場原料、生産品及石炭を除きたる近郊町村出入物資の概要を見るに、流出三百四十九萬圓に對し流入五百九萬圓にして、約百六十萬圓の大なる入超を示し、工場、鑛山に依存程度の極めて緊密なるを觀るべく、從て町村の過半は入超にして志免町六十七萬圓、志賀島村五十一萬圓、箱崎町四十三萬圓、那珂村二十萬圓の入超を示し、出超の町村は壹岐村の十二萬圓を第一とし、田隈十萬圓、多々良九萬圓、香椎六萬圓などである。

一、町村外流出物資

流出物資は三百四十九萬圓である。大部は福岡へ仕向けられ、其の七割弱二百四十二萬圓は農産にして、工産五十三萬圓、水産三十九萬圓、畜産八萬九千圓、林産三萬六千圓、鑛産一萬六千圓である。而して工産中今宿、香椎兩町村は清酒を主とし、岩戸村は竹細工類、田隈村は産業組合の茶種油である。

二、町村外より流入物資

町村外より町村内に流入するものは五百九萬圓にして、大部福岡市の仕出又は仲繼である。

日用雜貨百五十八萬圓を第一とし、米百三十六萬圓、被服八十八萬圓、酒醬油、魚肉類六十九萬圓、肥料三十七萬圓、農具類十九萬圓である。而して米を仕入る、は志免、箱崎兩町の外志賀島、那珂、殘島の三村で大部縣内産なるも肥後米なども相當量あるが如し。

第三節 近郊町村内の主なる會社、工場並炭坑

一、近郊町村内の主なる會社工場

箱崎町	昭和鐵工株式會社	中村酒造工場	小川織布工場
	船越硝子工場	徳永化學研究所	鳩飲料合資會社ラムネ工場
	戸次染工場	三帆屋合名會社	清水染織工場
	戸次織物工場	辰巳屋酒造工場	三益煉炭合資會社工場
	上村幸商店煉炭工場	福壽鐵工所	日本ゼニスパイプ株式會社
	丸エベニヤ工場	合資會社大日本農機製作所	宮石鐵工所
	九州蠶種株式會社	福岡バス株式會社修理工場	粕屋牛乳株式會社
	エタニットパイプ工場(計畫中のもの)		榎本鐵工所(計畫中のもの)
多々良村			長農具製作合資會社
香椎村	東邦電力株式會社	九州採炭株式會社	
博多	博多灣鐵道汽船會社	杉屋酒造合資會社	
和白村			
和	日本航空會社福岡支所	三和鐵工所(近く開業)	



渡邊鐵工所飛行機試驗所(敷地建設中)

新宮炭坑林鑛業所

志賀島村

博多灣鐵道汽船株式會社西戸崎工場 西戸崎炭坑株式會社

博多灣運輸株式會社

ライデングサン石油株式會社西戸崎油槽所

海軍飛行場(目下工事中)

那珂村

塩屋炭坑 土地四、五萬坪買収の模様

渡邊

鐵工所 大日本麥酒株式會社

日本硝子會社

前田精密機素工場

能勢製作所

東洋空氣製作所

針本鐵工所

加藤製函工場

安久製函工場

波多江合金鑄物工場

九州可鐵鑄鐵工場

竹下製油工場

谷口ポルト工場

參松製飴株式會社福岡工場

福岡ウエス株式會社

筑紫機械工業所

日佐村

森永製菓株式會社福岡工場

本德製粉株式會社福岡工場

北海道酪農販賣利用組合聯合會福岡出張所

春日村

渡邊鐵工所工場擴張中

今宿村

福岡縣碎石工場

志免町

株式會社多々良製作所(目下建設中) 合資會社奥田商會工場

海軍燃料廠採炭部本坑

深坂炭坑株式會社龜山鑛業所

日産化學工業株式會社粕屋炭坑

寺島鑛業所

(岩戸村、田隈村、殘島村、豊岐村には工場なし)

二、近郊町村内の主なる炭坑

多々良村

九州採炭株式會社

和白村

新宮炭坑林鑛業所

志賀島村

西戸崎炭坑株式會社(大嶽にあり志賀島に對する海岸に積込棧橋を施行し昭和十四年二月竣工、來年度より七十萬圓産額の見込)

志免町

塩屋炭坑(目下計畫中)

志免町

海軍燃料廠採炭部

志免町

寺島鑛業所

志免町

深坂炭坑株式會社龜山鑛業所

志免町

日産化學株式會社粕屋炭坑

志免町

志免町

志免町

第三章 大福岡市建設に對する參考

近郊町村の産業經濟事情の大要以上述べたる通にして、大福岡建設はこれらあらゆる經濟活動、實生活の諸現象を向上助長綜合統一して或は國策港の造成となり、或は都市計畫の擴張となり、或は商工地帯の創設、住宅觀光地域の指定となり、以て之が達成を期すべきである。箱崎町と福岡市との境界は箱崎宮筋向ひの二號國道へりに文久元年辛酉九月再建の「從是東表粕屋」の石標により纔に認知せらるゝも、兩地域は犬牙錯綜町家櫛比し、九州帝國大學は兩地域に跨り、全く同一經濟圏内にあるの現狀にして、兩地の合併の如きは速急實現の要あるは言を俟たない。關係地域別の概要左の如くである。

一、志賀島村、和白村、香椎村、多々良村、箱崎町

博多港は「残島北端より志賀島滿切に引きたる一線及姪濱小口鼻より残島南端に引きたる一線」を以て港域とする。即ち、博多港は西に残島横はり、南北兩水道より深く灣入し標記五ヶ町村と福岡市とによりて抱擁されたる港灣である。明治時代杉山茂丸氏は志賀島、和白地先に楯形式の博多大築港の計畫を樹て、大正時代中村精七郎氏は箱崎地先に亦大築港を計畫し工事に着手（博多灣築港會社によりて箱崎地先に二十二萬坪の埋立竣功）したる歴史を有する。博多港の港灣修築の諸問題は今後共五ヶ町村に緊密なる關聯を有し、陸上も亦接壤して離るべからざる關係にある。

若し國策港として出現の曉は港構成の大部分はこの方面を相すべく、また開港々則、海港檢疫法を博多港に施行するとせば檢疫所、信號所などはこの地方に設置せらるゝと見らるゝ。箱崎地先の埋立地二十二萬坪（本年昭和鐵工會社工場移轉）香椎縣營埋立地二十五萬坪、多々良の埋立地十萬坪は何れも大工業地帯として理想的にして用水は地下水、伏流水によるの外多々良川を引用ダムを作れば可なるべく、水深の關係に於て西戸崎地方は大造船所建設に申分なし。拓け行く航空路は躍進日本のシンボルであり、更に香椎宮、筥崎宮、志賀海神社の三宮幣社ましまし。白砂青松數十軒、古來大陸の興亡に最も關係深く史蹟名勝天下に名あり、海の中道は縣道中央を走り志賀島は海濱一周道路拓け、眞に惠まれたる觀光地である。亦同時に多々良、香椎、和白地方は立花山の翠巒を背景として將來住宅地として最も適當にして景趣に富んでゐる。

二、那珂村、日佐村、春日村

那珂村は東西及西の大半、即ち三面福岡市に隣接し、日佐村は東は那珂村西は福岡市に連り、何れも那珂川に依存して日本麥酒、木徳製粉、渡邊鐵工所、などの大工場があり、市内比惠、堅粕と共に大工業地帯を造成してゐる。春日村亦擴がり行く工業地帯の一端を擔ひ、春日原遊園地はこの地にあり、なだらなる松林豊かにして郊外行樂地としてまた郊外住宅地として好適地である。

尙竹下、雜餉隈兩驛は那珂村にある。

三、岩戸村、田隈村

岩戸村は北は油山支脈丘陵となりて福岡市老司、屋形原、柏原に接し、東は那珂川を以て安德村と境す。田隈村は東は景勝西油山となりて福岡市に接し、西は室見川を以て壹岐、金武兩村に境す。兩村の地勢は方位は反對なるも何れも丘

陵部は福岡市に接し、平坦部は清冽なる川邊に臨んでゐる。大福岡市民の健康の糧は將來大油山を中心として收得せらるべく期待せらるゝ。

四、壹岐村、今宿村

壹岐、今宿兩村は北は博多灣に臨みて生の松原などの白砂青松地となり、南方遙かに背振の靈峰を仰いで金武村、怡土村に接す。東方の箱崎、多々良、香椎の諸町村に對し福岡市の西方接壤地域となつてゐる。生の瀧、青木公園などの景勝地を有する海濱近き丘陵綠樹地帯は六十萬坪を超へ風光明媚、將來住宅地（別莊）帯として恰好である。

五、殘島村

殘島は周圍二里餘南濱崎より東岸中腹を縫ふて北部丘陵の頂上に達する勾配緩かな櫻樹街道がある。頂上はなだらかに拓けて廣大なる畑地を形成す。灣内一望の下にあつまり風光絶佳である。鮮魚は早朝博多市場に送り、島内消費魚肉は博多より購ふ。若し博多港に家畜檢疫規則を施行するとせば、本島北部丘陵地帯は地勢稍高きに失するも、家畜檢疫所として有力なる候補地の一であらう。

六、志免町

志免町は昭和十四年四月十七日町制を施行せられたる新興鑛山街である。町勢は宇美町と共通する点多く、福岡市との交渉は消費物資の依存にあるも、現に工事中なる多々良製作所完成の曉は福岡市と關聯する所大なるに至るべし。之を要するに箱崎町、那珂村は元より其の他の近郊町村も殆ど福岡市の經濟圏内にあり、遠からず近郊町村の大部分は市に合併せらるべき必然的運命にありと見らるゝ。而して近郊町村に對しては行政關係の外電話系統の統一、商工機關などの連衡が急務中の急務である。

第四編 臺灣經濟資源の概観

第一章 土地、戸口

臺灣は日本列島の最南端に位し、臺灣本島、澎湖列島及其の他の附屬島嶼より成り、東經一九度一分より二二度六分、北緯二一度四十分より二五度三十分の間にある。本島の形状は木の葉を伏せたが如く、北回歸線は略々其の中央を横斷し南臺灣五分の二は熱帯で、北部五分の三は亞熱帯に屬する。島の中央部に一萬三千尺の新高山を始め一萬尺以上の高山四十八雲表に聳え土地峻峻を極むるも、東部山脈と中央山脈との間には縦谷平野をつくり、また中央山系の西斜面は廣大なる大平野である。

第一節 土地

總面積は三五、九六一方呎にして、帝國全版圖の五分三厘を占め、九州より稍小さく樺太と伯仲し、朝鮮の約六分の一に當る。而して本島は行政上五州及三廳に區劃せられ、總面積の約五割五分が普通行政區域(平地と稱す)にして他は所謂蕃地である。州廳別の面積を示せば左の如くである。

州廳別面積 (一甲は約一町)

州廳別	平地	蕃地	計	百分比
臺南州	二九六、四〇七・七六 ^甲	一七七、二六五・二九 ^甲	四七三、六七三・〇五 ^甲	一二・七八
高雄州	二八二、六一六・二五	一八八、五五九・四二	四七一、一七五・六七	一二・七一
新竹州	三七〇、八五一・六〇	三九〇、三四一・三六	七六一、一九二・九六	二〇・五三

州廳別	戸數	人口	人口百分比
臺南州	五一四、八四九・六〇	四四、一一一・七〇	一五・〇八
高雄州	二九五、一五五・三三	二九四、七七八・一五	一五・九一
臺東廳	一三一、二一六・一一	二三一、二一一・九六	九・七七
花蓮廳	一三七、七四七・九〇	三三九、四六五・〇二	一二・八七
澎湖廳	一三、〇七九・九〇	一三、〇七九・九〇	〇・三五
澎湖廳計	二、〇四一、九二四・四五	三、七〇七、六五七・三五	一〇〇・〇〇

第二節 戸口

昭和十二年末戸口は九十六萬八千五百十九戸、五百六十萬九千四十二人にして、州廳別左の如くである。

州廳別戸口

州廳別	戸數	人口	人口百分比
臺北州	二二一、七五五 ^戸	一、一〇一、八九八	二〇
新竹州	一一一、〇三五	七六六、四一五	一四
臺中州	二〇二、四九七	一、二五一、五一三	二三
臺南州	二四一、一〇二	一、四二二、八一四	二五
高雄州	一四二、五二一	七九五、七三五	一四
臺東廳	一三、五二五	七七、八四二	一
花蓮廳	二四、六五七	一二四、〇六四	二

一一、四二七
計 九六八、五一九

六八、七六一
五、六〇九、〇四二

一〇〇
一

即ち臺灣の人口は福岡縣の二倍弱でその内地人は二十九萬九千二百八人である。本島人は漢人系と、平埔族及高砂族とに分れ、漢人は更に其の出産地に依つて閩族（福建省の泉州、漳州及其附近）と粵族（廣東省の潮州、惠州及其附近）に大別することが出来る。閩族は本島總人口の七割六分を占め、粵族は同一割四分に當る。高砂族及平埔族は過去に於ける臺灣の主人公といふべきもので、平埔族は又平地蕃といはれ、これまで山地に住んでゐたものが所謂高砂族であつて全島を通じて高砂族は十五萬四千二百五十五人である。

第二章 産 業

臺灣は南北に中央山脈縦貫し長大なる分水嶺となり、東部は急峻なる傾斜となりて平地少く、西部は緩かにして廣潤なる沃野に富んでゐる。氣候は温帯、熱帯の兩帶に亘り一般に温潤で酷暑の時期長く嚴寒を知らず。樹木は四時常緑にして落葉を見ること少く、従つて温帯、熱帯に亘る各種の農作物に適し本島西部の沃野を一大農産地たらしめたのである。而して、本島工業は島産原料の加工精製の外、地理的に恵まれたるを利用し東亞建設の爲に將來の隆盛を期せんとしつゝある。昭和十二年に於ける生産高は八億三千七百萬圓にして各種別生産額左の如し。

農 産	四〇二、九九五、八一五圓	林 産	一六、六六四、五九〇圓
工 産	三六〇、一四七、二四六圓	水 産	二一、三八二、四〇七圓
其 他	三六二、二三三、一五四圓	計	八三七、四一三、二二二圓

第一節 農 業

昭和十二年末現在本島農業人口は二百八十八萬四百十人にして、總人口五百六十萬餘人に對し五割一分に當る。（農戶

は朝鮮七割三、臺灣四割五、内地四割三、樺太一割八である）この割合は北部に於て疎に南部に至るに従つて漸次密である。

一戸當平均反別は内地より大にして二甲弱である。

普通作物は米を第一とし甘藷、生食用甘蔗、大豆その他にして二億三千八百萬圓で農産の五割九分を占め、特用作物は甘蔗を第一とし茶、落花生、煙草、黃麻、キャッサバ、棉等にして八千五百餘萬圓で農産の二割一分強である。而してバナナ、パイナップル、ボンカンなどの果實類は千五百九十五萬圓、大根、其の他の蔬菜類は千四百六十二萬圓にして、農産の三分七厘及三分六厘を示してゐる。

備考、農家一戸當生産額は九四二圓九五である。

米 作付面積 六七八、〇八一甲 生産高 九、二二三、一二七石 二〇八、七五八、〇六五圓

蓬萊米過半を占め、蓬萊米は第一期作多く、その他は第二期作多し、而して總計に於て第一期作は第二期作より稍少し生産額は臺中州を第一とし、新竹州、臺南州、臺北州、高雄州、花蓮港廳、臺東廳の順である。

甘藷 作付面積 一四三、三〇七甲 生産高 二九四、九九七萬斤 一六、六五五、九五九圓

米、甘蔗に次で第三位にあり、食糧、飼料の外澱粉原料、酒精原料として用ひらる。酒精原料としての切乾甘藷は主として内地關西地方の焼酒工場に於て消費せらる。生産額は臺南州を第一とし、臺中州、新竹州、高雄州、臺北州等の順である。

甘蔗 收穫面積 一二四、五五五甲 生産高 一、四二七、一八七萬斤 六四、二七六、九〇五圓

生産額は臺南州を第一として其半を占め臺中州、高雄州、兩州之に亞ぐ。甘蔗の搾殻は現在燃料として重要であり、パルプの原料として重要視せらる。

茶 栽培面積 四五、八七八甲 生産高 二、二五五萬斤 一〇、二八五、五三五圓

生産は新竹州を第一とし臺北州之に亞ぐ。

落花生 作付面積 三二、四四一甲 生産高 六二七、七〇〇石 四、〇六四、六五八圓

落花生は甘蔗や甘藷の輪作、果樹園の間作等にも栽培さるゝも、大部分は河川の沿岸や地味瘠薄なる砂質地等の不良耕

地を利用してゐる。従つて臺南州の如き地方に最も多く作付面積、生産高共に全島の四割を占めてゐる。澎湖廳、臺中州之に亞ぐ。

黃麻 作付面積 五、二二七甲 生産高 一、五三七萬斤 一、四九二、七三七圓

芋麻 作付面積 一、九四八甲 生産高 二、三二萬斤 八五二、八五二圓

産地別に見れば臺北州最も多く總生産額の四割を占め、次は新竹州の二割五分で、以下高雄州、臺南州の順である。

バナ、栽培面積 二一、八九一甲 生産高 三六、四三一萬斤 八、一三二、五四六圓

臺中、臺南、高雄の三州最も多く、臺中州以下は主として山地栽培である。

パイナップル(パイナップル)栽培面積 八、八六七甲 生産高 一〇、七七九萬個 三、一一四、八五三圓

臺中州最も多く高雄、臺南兩州之に亞ぐ。

柑橘類 栽培面積 五、〇七〇甲 生産高 五、四八七萬斤 二、三六二、九五八圓

栽培品種たるボンカン、桶柑、雪柑、斗柚、文旦、白柚等は何れも風味卓絶し、他の追隨を許さぬ優良品である。新竹州最も多く、臺北、臺中兩州之に亞ぐ。

蔬菜類 作付面積 四三、七七九甲 生産高 一四、六二一、一〇九圓

主要なるものは、大根、薑、里芋、葱、韭、胡、甘藍、大芥菜、松菜、芹菜、越瓜、胡瓜、西瓜、茄子、芙蓉豆など二十餘種で、之等の地方的分布は大体に於て普遍的である。生産期間は内地に比し一般に非常に長期である。その生産を季節的に見れば冬季に多く夏季に少い。

畜産

豚 飼育 一、八四九、一九五頭 屠殺 一、一八九、三四二頭 牛 同 三五八、四四二頭 生産 一六六、四四七頭

飼育種類別にすれば、水牛 二八二、一〇一頭、黄牛 六三、四八六頭、印度牛 五七六頭、洋牛 一一、七七三頭である

水牛は熱帯特有の家畜で其の頭数は畜牛總数の四分の三以上を占む。

家禽、鶏 飼養 七、〇七二、五三四羽、鶯 同 一、九五七、五五八羽、鸚 同 四〇一、五〇三羽、

七面鳥 同 二九、九九二羽

第二節 林業

本島の林野は面積二百四十九萬甲にして全島の七割に相當する廣大なる地域を占め、其の位置は水平的には熱帯、亞熱帯とに跨つてゐるが中央山脈の高山峻嶺が起伏重疊する爲之を垂直的に見れば土地の高さに従ひ熱帯より、暖、温、寒帯の各森林植物地帯に亘り、從て其の包藏する樹木も極めて多種多様に有用材木のみにも三百種を超へてゐる。

今日に於ける自然林中最も大なるものは、(一)北部に鹿場大山、宜蘭濁水溪流域、棲蘭山の針葉樹林、油羅山、阿玉山の潤葉樹林があり、(二)中部には西面に阿里山より新高山の西北面に連る針葉樹の大森林之に對する檜大山の森林、又八仙山の森林と相對し大雪山の森林、(三)東部に丹大山より能高山に至る中央山脈の東方即ち馬太鞍溪、マリバン溪、チトカン溪木瓜溪流域の大森林があり、(四)南部には大武山より恒春半島の脊梁を爲す中央山脈一帯の潤葉樹がある。地方別の樹種別森林面積は左の如くである。

州	針葉樹林		潤葉樹木		針潤混淆林		竹		計	
	平地	蕃地	平地	蕃地	平地	蕃地	平地	蕃地	平地	蕃地
臺北州	10,130	45,919	127,666	96,190	10,810	23,170	3,898	114	163,663	165,993
新竹州	4,282	7,524	55,666	15,900	8,084	10,621	4,733	87	73,757	173,483
臺中州	1,814	3,975	79,170	168,047	5,192	66,107	16,399	490	103,495	267,599
臺南州	2,648	1,380	79,593	27,635	1,942	75	18,476	20	103,659	29,800
高雄州	—	10,720	55,137	12,100	—	41,333	2,795	605	57,993	22,007
臺東廳	76	9,493	50,615	193,478	138	2,723	714	—	51,543	22,733
花蓮港廳	—	39,943	74,125	98,715	864	86,019	277	513	75,266	23,190

澎湖廳	19,110	147,943	53,340	90,665	77,030	240,567	47,101	2,549	625,683	1,291,334
合計	19,110	147,943	53,340	90,665	77,030	240,567	47,101	2,549	625,683	1,291,334

次に森林見込蓄積は無慮七億四千萬石にして最近一ヶ年用材生産は九十七萬石である。その地方別左の如し。

州	森林見込蓄積			用材生産		
	針葉樹	闊葉樹	計	針葉樹	闊葉樹	計
臺北州	3,003,929	59,071,491	89,145,420	1,633,249	2,633,405	4,266,654
新竹州	36,103,035	69,464,490	105,669,525	14,279	72,393	86,672
臺中州	89,200,033	84,860,987	174,061,020	242,143	42,105	284,247
臺南州	6,936,384	20,533,987	27,470,371	97,437	10,393	107,830
高雄州	3,240,834	85,839,069	111,079,903	3	18,234	18,235
臺東廳	14,525,000	80,400,910	95,005,910	613	4,243	4,856
花蓮港廳	53,789,000	89,779,506	143,568,506	43,149	5,334	48,483
澎湖廳	—	1,680	1,680	559,889	—	559,889
合計	256,808,145	490,056,156	746,864,301	559,889	42,626	602,515

尙官營、斫伐事業に阿里山、八仙山、大平山の三がある。

阿里山 阿里山事業區は臺南州嘉義斗六兩郡下に跨り清水溪、八掌溪、曾文溪及楠梓溪の上流一帯を占むる要存置國有林野にして、所謂阿里山森林及阿里山森林鐵道沿線並に其隣接地より成り面積三一、八六四陌海拔一五〇米より二、九〇〇

米の間にあり。東區の森林は垂直的に熱帶、暖帶、溫帶の三帯に亘り、天然材木の種類極めて豊富である。二千米の邊より紅檜を散見し、更に向上するに従ひ扁柏を混生するに至る。此の附近阿里山の精髓といふべきもので一箇年の標準素材生産材積四一、八〇〇立方米である。

八仙山 八仙山事業區は新竹州大湖郡下大安溪上流域、臺中州東勢郡下大甲溪流域、及能高郡下北港溪右岸の一部を占め總面積八四、九七一陌、標高四五五米より三、九三〇米の間にあり、三千米以上の峻峰十六座、地勢極めて急峻、暖帶林下部より寒帶林に亘り松林楓林で、一年當標準素材生産材積約二二、〇〇〇立方米である。

太平山 太平山事業區は臺北州羅東蘇澳兩郡下新竹州竹東大溪兩郡下即ち二州四郡に跨り、宜蘭濁水流域の上中部大南澳北溪流域、大濁水溪流域中モヘン、プシヨワン兩溪流域及おがん溪の上流域並同支流たけじん溪右岸一帯を占むる國有林野六五、五八五陌である。海拔三〇〇米より三、二〇〇米の間に位置し、くす、かし、たぶ、しひを主林木とする暖帶闊葉樹林より、ひのき、べにひを主林木とする溫帶林に入り、更にとどまつ、とうひの寒帶林に及ぶ一大森林にして有用針葉樹蓄積の豊富なる全島第一位である。一箇年當標準素材生産材積は三八、五〇〇立方米である。

第三節 鑛業

領臺當時は産出額僅かに三八〇萬圓にすぎなかつたが、今や三千六百餘萬圓に達し、昭和十二年末六九五鑛區、面積二一、一六五萬坪其主要なるものは石炭で一、五〇〇萬圓を算する。最近臺灣の石油及揮發油が著しく關心を持たれ、また夕ロコ峽金山發見など非常時局の折柄臺灣が國家に貢獻する新たな部門を拓いて來たものと云へよう。

鑛種	鑛種別	最近年産額	
		金	銀
金	金	四、四五一、三四三	二、三七、五三四
銀	銀	七、二一三、七一〇	二、七〇七、八三二
銅	銅	三〇八、〇四〇	七二七、〇二二
砂	砂	—	—
鐵	鐵	—	—
錫	錫	—	—
鉛	鉛	—	—
鋅	鋅	—	—
鉬	鉬	—	—
其他	其他	—	—

銀	一八、九四七	石	一五、〇一四、三九二
銅	八九六、九六〇	硫	九九、四一四
金	二、一九九、五四五	原	一、八三三、六九七
		油	
		其	
		の	
		他	
		炭	

第四節 糖 業

今日の臺灣糖業は昭和十四年期に於て生産高實に二千三百萬擔といふ驚異的記録を作り、地理的に恵まれたる瓜哇、布哇等其昔糖業先進國として臺灣が學んだ國々に優るとも劣らざる地位に迄立至つた。最近人口の増加、國力の増大に對しても何等の不安を與ふることなきのみならず、滿支の需要に對しても其の供給の責を果し、新東亞建設に寄與すると共に一方「アルコール」、「パルプ」等の國策事業を兼營し、益々堅實なる發達をなしてゐる。

臺灣糖業の地位 領臺當時本島糖業は僅かに七十八萬擔程度の産糖であつたが、當局の糖業政策確立以來克く酷熱惡疫と戦ひ官民一致の不撓不斷の努力は領臺後四十年餘にして三十倍の生産を擧ぐるに至つた。

農業部門たる甘蔗農業の位置は前に述べたるが如く臺灣農業の大宗である稻作農業に亞ぐ重要地位を占め、本島に於ける全農家約四十萬戸に對し蔗作農家は其の約三〇%の十二萬戸、總耕地面積八十八萬甲に對し甘蔗作付面積は其約十九%の十七萬甲、農業生産價額四億圓に對し其約十六%六千四百萬圓に達してゐる。

又工業部門は全く他産業に對し壓倒的優位にあつて、臺灣の代表産業たるの貫録を示し、總工産額三億六千萬圓に對し其の六〇%二億餘圓、輸出總額二億二千萬圓に對し其の八〇%一億七千萬圓は實に砂糖に依つて占有されてゐる。又事業界に於ても製糖會社の位置は斷然他を壓し、其拂込資本額は二億二千萬圓にして工業會社拂込資本額二億七千萬圓に對し八〇%を占めてゐる。而して製糖會社が年々耕作資金其の他の前貸金として蔗作農民に支出する金額は千數百萬圓に上りて農村金融を助け、一面農耕地を縱横に走る二千六百餘哩の私設鐵道は地方交通上重大なる役割を演じ、其の開發に貢獻する所極めて多大にして、臺灣經濟上に占むる糖業の位置は頗る重大にして「糖業の臺灣」と稱せらるゝも亦故あるかなと言はねばならない。

更に臺灣糖業の日本に於ける地位は日本總全産糖二千七百九十萬擔に對し八五%を領有してゐる。

事業經營 臺灣に於ける分密糖工場を經營する會社は九社で其の資本金二億九千萬圓、拂込資本額二億二千萬圓で内地外地を合せたる總投資は四億圓である。今回の滿洲事變、支那事變を契機とし我國の産業界は俄然活況となつた時、本島糖業も亦海外好況の波に乗り其の事業經營の基礎を鞏固となり、本島の開發に投資するは勿論無水アルコールやパルプ等の國策事業にも投資し、更に進んで滿支に於ける糖業をも經營し、圓ブロック内糖業は臺灣糖業を根幹として一元的に經營せんと努力中である。

附 帶 事 業

無水アルコールの生産 我國燃料國策に應じ其の生産の一部は國營とし、一部は製糖業者に担当せしむることとなり、昭和十三年度には五工場の竣工を見、目下建設中のもの六工場である。

ケーンパルプ工業 製糖工場の副産物であるバガスは、從來専ら製糖用燃料として消費せられてゐたが、バガスを原料とする「ケーンパルプ」の工業研究完成し、日糖系の臺灣パルプ工業は昭和十四年八月操業を開始し、塩水港パルプ工業は近く開始の運びとなり、年額四萬五千噸のパルプの生産をなし吾國パルプ自給の國策に協力せんとしてゐる。此外明治製糖、帝國製糖等何れも「ケーンパルプ」工業に参加の意嚮を有し、製紙パルプは謂ふ迄もなく人絹パルプの製造も企畫されつゝある。

新式製糖工場 左の通り九社四九工場である。

會社名	工場所在州	工場數
塩水港製糖會社	臺南州四、花蓮港廳二、臺中州一、	計
帝國製糖會社	臺中州三、新竹州三、	計
昭和製糖會社	臺北州一、臺南州一、新竹州一、臺中州一、	計
臺東製糖會社	臺東廳一、	計
		一 四 六 七

合資會社三五公司	臺中州一、	計	一
臺灣製糖會社	高雄州七、臺南州四、臺中州一、臺北州一、	計	一
新興製糖會社	高雄州一、	計	一
明治製糖會社	臺南州五、臺中州二	計	七
大日本製糖會社	臺南州六、臺中州三、 臺南州二〇、高雄州八、臺中州一二、新竹州四、臺北州二、花蓮港廳二、臺東廳一	計	九
計		計	四九

九〇

第五節 鳳梨罐詰工業

本島に於ける鳳梨罐詰工場は大正九年に於て其の數九、昭和九年には工場數六六、製造高三、七一一萬罐といふ驚異的の進展を示したが、工場の多くは舊式小工場にして工場經營者亦多く本島人にして、而も工場の地理的分布状態は鳳梨の主産地たる臺中州員林、彰化地方と高雄州鳳山、九曲堂地方に群立し企業形態も會社、公司、組合、個人經營等區々なりし爲め勢ひ原料争奪を惹起し經營困難を來したる結果、打つて一丸とする一大製造工業化が昭和九年早々より強調せられ、昭和十年七月臺灣合同鳳梨株式會社が設立せられ、茲に本島に於けるパイン産業の將來が確立されることとなつた。

パイン罐詰製造高表

年次	製造工場數	數	量	價	額
昭和十年	四〇		一、一九一、二六〇		七、八二八、二八二
昭和十一年	三〇		一、一一〇、四八九		六、九七六、〇〇五
昭和十二年	三一		一、二二〇、五七四		一一、五七四、八〇八

第六節 一般工業

本島は由來農林産物豊富なるを以つて、生産額著大なる製糖工業、或は製茶工業又は新興工業である鳳梨罐詰等何れも農産原料によつて今日の隆盛を見てゐる。其の他の工業も殆んど農産若くは此種に屬する原料の使用工業のみである。

紡織工業 紡織工業品の生産額は昭和十二年に五百三萬圓で總生産額の一%四にすぎない。衣服織物に於ては本島下級品は内地品に次第に壓迫せられ事業不振である。

黄麻工業 本島黄麻工業は工場生産、家庭生産に分れ工場生産は臺灣製麻株式會社及臺南製麻株式會社の二工場にして「ガンニー」袋生産である。本島「ガンニー」袋の昭和十一年の需要は二百萬袋七百六十一萬圓にして、昭和十二年の生産額は二百八十四萬圓で、尙大部は輸移入に俟つものである。

苧麻工業 臺灣纖維工業株式會社が最近苧麻糸 四四、〇〇〇玉（一玉一貫二百匁）價額七十萬圓を製造してゐる。

綿織物工業 臺北市及臺南市を中心として力織機を使用して生産す。昭和十二年の生産額は八十九萬圓である。

莫大小工業 本島は氣候風土の關係上、簡便で安價な衣服肌衣を必要とし、尙靴を履く習慣があるので靴下の使用多く現在の生産四十萬圓にして需要額の僅か十一%にすぎない。將來發達の可能性が多分に含まれてゐる。

機械器具及金屬品工業 其の大半は本島特産たる製糖用機械器具の製造及修理、鳳梨罐詰の製造を除けば未だ本島人常用の農具、鍋釜等を生産するに止まり新式機械及精密機械などの製作は内地に依託せねばならぬ現状である。最近年生産額千萬圓程度であらう。

窯業 本島窯業の生産總額を見るに昭和十二年八百八十二萬七千圓で、その約四十%即ち三百二十六萬圓は淺野セメント株式會社高雄工場の一工場生産に係るセメント之を占め、次は製造場四〇一、其の生産額三百二十二萬四千圓の煉瓦類三十八%である。煉瓦は其技術よく發達し手工によるの外機械製普通煉瓦の産出がある。他の陶磁器は其の生産數量極めて僅少、製品亦粗悪で、幼稚なるを免れない。

化學工業 化學工業に屬するものは肥料工業、製紙工業、板紙工業、バガス壓搾板工業、石鹼工業、皮革工業、油脂工業、染料工業、製藥工業、アルミニウム工業等である。

肥料工業 調合肥料、過磷酸石灰、大豆油粕等があり、昭和十二年九百萬圓程度の年産額で大部分は島外からの輸移入

に俟ちつゝある。最近基隆市に石灰窒素工場出現し島内の需要を充し島外へも搬出してゐる。
 製紙工業 竹材を原料とする粗唐紙の製造が主であつたが、最近バガス及萱を原料とする印刷紙工場の設置を見、パル
 プ原料の減少しつゝある折柄國家的に重大なる使命を有するものである。
 板紙、北部産蘆を利用す。六千噸前後の産額あり、島内消費を充足して尙南支南洋及内地に輸移出してゐる。
 石鹼工業 主として洗濯石鹼で其の産額百萬圓程度、需要額は二百七十八萬圓にして六十%以上を移入に仰ぐ状態であ
 る。

皮革、需要額は約八十萬圓にして生産額は三十萬圓程度にすぎない。
 油脂工業 落花生油、桐油、胡麻油、大豆油、菜子油、蓖麻子油等があるが、まだ島内の需要を充たすに足りない。
 飲食料工業 食品工業は製糖工業、茶工業、鳳梨罐詰工業の外その業種別、生産額は左の如くである。
 菓子類 五、〇六九、七四四圓 水 一、三九八、八〇二圓
 麵類 三、七五五、九六八圓 醬油 二、二八六、六八二圓
 穀粉 二、一二三、二九七圓 清涼飲料水 一、一五六、二〇九圓
 その他の工業
 帽子 三、七七六、七九〇圓 皮革製品 一、四七二、六〇一圓
 竹細工品 一、九八六、一九六圓 金銀紙 一、〇七八、四三八圓

第七節 水産

昭和十二年中に於ける水産總高は二千百三十八萬餘圓にして其の内譯左の如く、臺北州、高雄州、臺南州の順である。

臺北州	漁獲高	養殖高	製造高	計
	六、六一一、二七一	二六、九〇九	九九四、四七三	七、六三二、六五二

新竹州	五三二、八三九	一四一、一七四	九六、〇一五	七七〇、〇二八
臺中州	一六六、五一六	二九二、三八〇	七五、六九〇	五三四、五八六
臺南州	四七二、九七五	二、七九二、二四四	二四六、七九六	三、五一二、〇一五
高雄州	四、九四五、六四四	一、二八七、四五二	五〇四、六八七	六、七三七、七八三
臺東廳	四五四、六九九		一六二、七八七	六一七、四八六
花蓮港廳	二一一、二三五	四、九一九	一四二、八五二	三五九、〇〇六
澎湖廳	一、一一七、九二七	二一四	一〇〇、七〇九	一、二一八、八五〇
計	一四、五一三、一〇六	四、五四五、二九二	二、三二四、〇〇九	二一、三八二、四〇七

魚獲高は沿岸四二一萬餘圓、遠洋一、〇二九萬餘圓にして、珊瑚漁業五五萬圓あり。

第三章 運輸交通

第一節 鐵道

本島に於ける鐵道は昭和十三年末現在總延長官設鐵道八八二籽、營林所鐵道一六五籽三、私設鐵道二、六一九籽、合計
 三、六六六籽三にして外に手押臺車を運行する私設軌道八〇六籽あり、官設及私設鐵道は地勢上西部に偏して發達してゐ
 る。

一、官設鐵道

官設鐵道は本線及臺東線とし、その區間、籽數左の如く、而して宜蘭線中基隆—八堵間約三籽、縱貫線中基隆—竹南間

一二五杆七及臺南—高雄間四六杆五、合計一七五杆二は複線區間である。

縱貫線	基隆—高雄間	四〇六杆
淡水線	臺北—淡水間	二三杆
宜蘭線	基隆—蘇澳間	九九杆
平溪線	三貂嶺—菁桐坑間	一三杆
臺中線	竹南—王田間	九一杆
集々線	二水—外車埕間	三〇杆
潮州線	高雄—溪州間	四七杆
臺東線	花蓮港—臺東間	一七三杆

現在建設中の路線は溪州枋寮間及溪州東港間である。(昭和十五年度竣工の見込)

二、營林所鐵道

木材を搬出する爲めに營林所に於て建設された阿里山鐵道、羅東森林鐵道及八仙山鐵道で所謂運材専用線であつたが、地方民業助長の主旨から一般貨客の輸送に開放せられたもので、その利用も年々増加してゐる。

阿里山鐵道 幹線七一杆九(嘉義阿里山間) 中營業線は嘉義、竹崎間の十四杆二で其の他は専用線であるが、竹崎、阿里山間の五七杆七及支線たる阿里山、新高口間の一〇杆七も貨物運輸營業竝に一般旅客の便乗取扱をなしてゐる。尙其の他阿里山から岐れる塔山線及新高口から分岐する東埔線、水山線などの林内支線がある。

羅東森林鐵道 宜蘭線羅東驛から宜蘭濁水溪の右岸に沿ふて太平山の山脚土場に至る延長三七杆三の鐵道である。一般貨物の輸送をも取扱つてゐる。

八仙山鐵道 土牛—佳保臺間四五杆四の鐵道で内土牛、久良栖間三九杆は一般貨客の輸送を取扱つてゐる。

三、私設鐵道

臺灣に於ける私設鐵道二、六一九杆中營業鐵道の延長は五二二杆二(昭和十三年末現在)専用鐵道線路は二、〇九八杆二で

私設營業鐵道は官設鐵道の延長八八一杆七(營林所經營鐵道を除く)の五九%に當る。其の大部分は製糖事業に伴ひて發達せるものにして、即ち製糖會社が製糖原料輸送の爲に敷設したる専用鐵道を地方交通産業開發上兼て營業鐵道として一般公衆の利用に供するに至りたるものにして従つて内地、朝鮮に於ける一般私設營業鐵道に比し自ら其の本質を異にし政府の積極的經濟上の補助を俟たずして開業當初より獨立自營し來りたる爲め其の施設に於て多少の遜色あるを免れない。

第二節 港 灣

臺灣は略ぼ我が九州に匹敵するが、其の海岸線は延長千五百六十六杆で九州の八千六百六十二杆に比して格段に短く、従つて天然の良港は極めて少い。

現在に於ける全島の港灣分布の状態は北に内地、臺灣間聯絡の門戸をなす基隆港あり、南に農産物の搬出港たる高雄港がありて兩港共現代的設備を有する良港である。基隆、高雄の中間西部海岸に淡水、後龍、鹿港、東石、安平の五港あり淡水、安平の兩港は基隆、高雄と共に早くから開港せられ、時々汽船の入港を見るも他の三港は領臺後特別輸出入港として指定せられ専ら支那貿易に従事する戎克船の出入するのみである。東部海岸には最近(昭和十四年十月)開港として登場した花蓮港の外に沿岸定期船の寄港地として蘇澳、新港、臺東の諸港がある。又漁船の出漁又は避難に適するものには北に蘇澳、東に新港、南に海口の三港があり、三港共何れも國費を以つて改修せられた漁港である。

第三節 道 路

臺灣の道路は古來の習慣として富豪の特志經營に委ぬべきものと看做されて來た。領臺後軍隊の力を以つて南北縱貫道路の改修を企て明治二十九年三月延長四二八杆を開鑿したが、元より工事不完全であつた。その後或は國營を以つてし、或は保甲民の出役又は寄附、或は地方費によりて道路の改修を施行したが、近年國費を以つて重要道路を開鑿するに至つた。

大正元年以降國費を以つて開鑿又は改したる道路左の如く、而して主要橋梁は殆ど國費又は國費補助によりて之が建設をなしてゐる。

桃園(新竹州) 宜蘭(臺北州) 道 一一二二籽
 蘇澳(臺北州) 花蓮港道 一一一籽
 新化玉井道(臺南州) 二四籽
 縱貫道路(基隆—屏東) 四六一籽
 屏東臺東道(蕃子寮—呂家) 一三七籽
 楓港(高雄州) 呂家溪(臺東廳) 間 一〇六籽
 潮州楓港臺東間自動車道の開通は昭和十四年四月である。
 この道路は蘇澳花蓮港道と共に臺灣道路網の重要幹線の一にして交通上及び産業開發上に裨益すること多大である。
 尙目下工事中のものは左の二である。
 新店、礁溪(臺北州) 間 六五籽 昭和十七年竣工見込
 臺北、基隆間道路鋪裝 大 体 完 成

又内地の府縣道に相當する指定道路は主として地方費を以つて改修しつゝあるが、其の内重要道路線約一千四百十八籽を選定し國庫より工事費の三分の一乃至二分の一を補助してゐる。

第四節 河 川

本島の河川は概ね三千米以上の高峯に發し、河床に於て高度の勾配を有し、且その降雨も熱帶的にして七、八月の候豪雨一度到れば恰も盆を覆すが如く諸溪忽ち氾濫するも乾燥期には涸渴して点滴も留めないことがある。其の河流の多くは溪と稱せらるゝも偶然でない。従つて河川の運輸に利用されつゝあるは僅に淡水溪位にすぎない。

主なる河川濁水溪	四二里	下淡水溪	三九里七	曾文溪	三三里七	淡水溪	三八里一
大甲溪	三〇里	烏 溪	二八里六	大掌溪	二八里三	秀姑巒溪	二二里六
卑南大溪	二二里	大安溪	二〇里五				

第五節 航 空

昭和十一年一月から大日本航空株式會社の手によりて福岡、臺北間の内臺航空路が繋がれたのを始めとし、續いて臺北臺中、臺南を結ぶ島内西線、臺北、宜蘭、花蓮港を連ぬる島内東線が開かれ、昭和十三年四月一日より日發循環運行に迄進展して爆音躍進臺灣の溪谷に衍してゐる。

イ、内 臺 線 (毎日)	上り 臺北	六、三〇發	那 霸	九、〇〇着	福 岡	九、三〇發	福 岡	一、〇〇着	(大阪着)	四、〇〇
	下り (東京發)	七、〇〇	福 岡	一、〇、三〇着	那 霸	二、〇〇着	那 霸	二、三〇着	(東京着)	四、三〇
	下り (大阪發)	六、五〇	福 岡	一、〇、〇〇發	那 霸	二、〇〇發	臺 北	四、五〇着		
ロ、島 内 線	西廻 臺北	九、〇〇發	臺 中	九、三五着	臺 南	一〇、二五着	屏 東	一、二五着		
	花蓮港	二、五五着	臺 北	九、四五發	臺 南	一〇、三〇發	屏 東	一、三五着		
	馬 公	三、〇五發	臺 南	一、四〇着	臺 南	一〇、三〇發	屏 東	一、三五着		
	東廻 臺北	八、五〇發	宜 蘭	九、一〇着	花 蓮 港	九、五〇着				
	臺 東	一〇、四〇着	屏 東	一、五〇着	臺 南	一〇、〇〇發				
	臺 中	一〇、五〇發	臺 北	一、三五發		一、四五着				
		二、一〇着				一、三〇發				
		二、二〇發								

右の外偶數日に臺南 一〇、四〇發 あり

第五編 臺灣重要産業の管理、施設、專賣等の實際

第一章 臺灣米

第一節 米穀政策の變遷

臺灣に於ける米作は其の沿革古くして本島産業の大宗たるは何人も之を首肯する所で、最近臺灣經濟界の好況は臺灣米の増産と價格騰貴に基く移出金額の増大に負ふ所最も大なりと言はれ、之が消長は本島農家の經濟に直接影響するは勿論延ては臺灣の産業並に文化向上に影響する所大である。

領臺當初の生産高百五十七萬石、輸移出高三十三萬石にすぎなかつたのが、昭和十二年には生産高九百二十三萬石、輸移出高四百八十四萬石といふ隆盛を見るに至つた。然しながら昭和十一、二三年我國の米穀需給關係は漸く生産過剰の狀態となりたるが爲臺灣に於ても内地の米穀政策に順應し、米穀統制法の一部並に自治管理法を施行すると共に、統制施設を行ひ、増産獎勵事情の緩和をなしたるが爲、増産は從來の如く顯著ならず。然れども米穀政策は専ら内地の農村事情に立脚せる高米價政策なりしを以つて生産費の安き臺灣米は依然有利となり、特に支那事變下に於て米穀増産が望まると同時に本邦唯一の熱帯地域たる臺灣に甘藷、蓖麻、纖維作物等國家有用農産物の増産が要請さるゝ事切なるものあり。昭和十三年九月設けられたる臺灣重要産業調整委員會に於て研究の臺灣米移出管理等の具体化は臺灣米の歴史に一大紀元を劃すべく期待せらる。

臺灣米の改良増産諸政策實行に伴ひ埤圳と稱する人工的灌漑貯水地及水路の施設を獎勵し、明治三十七年には灌漑排水面積僅に十七萬余甲なりしものが、昭和十一年には五十萬甲、總耕地面積の五七%を占むるに至つた。かの有名なる嘉南大圳を見るに昭和五年竣工、工費四千七百餘萬圓（内國庫補助二千六百餘萬圓）にして約十四萬甲を灌漑し得るものである。

統制政策として貯藏獎勵せられ、昭和十一年米穀自治管理法施行せらるゝに及び同法による米穀統制組合などを設立せしめて統制米穀を貯藏する爲概百十萬石を收容し得る倉庫を建設せしむる方針の下に補助金及低利資金を融通しつゝありしが、概約四十四萬石を收容し得る倉庫を建設せしむるのみにて昭和十三年に至り中止した。昭和十二年十一月現在の組合狀況は左の如くである。

米穀統制組合	五四	所屬組合員數	一七二、七三六
地方米穀統制組合聯合會	五	所屬組合數	五二
米穀商統制組合	五	所屬組合員數	四五一

尙此の指導監督の爲昭和十一年總督府殖産局内に米穀課を新設し各州に出張所を設け、更に最近殖産局より獨立して米穀局創設せられて積極的に臺灣米の増産、需給等の施政をなすことゝなつた。（以下略）

第二節 耕作概要

耕作法 臺灣に於ては米は年二回収穫され、早きを第一期作、遅きを第二期作と稱す。

第一期作及第二期作（最も普通なり）第一期作及澁仔法（一名寄仔法）（第一期作第一、第二回除革の際稻株間に第二期作苗を挿秧す）

澁仔法（一名破仔法）（早熟性一期作用品種と晩熟性二期作用品種を混播す）

第一期作及其株出法（蓬萊米第一期作收穫後刈株より新芽を發生せしむ）。

米の種類及品種 臺灣米を分ちて水稻は蓬萊米在來、粳米、丸糯米、長糯米、陸稻は粳米、糯米の六種とす。蓬萊米は内地種米にして大正十五年時の總督の命名したるものである。在來米は丸糯米を除き小粒長形にして色澤、食味悪し。

苗代 選種は風選を行ひ最近は更に塩水選を行ふ。萌芽播は感冷なる中北部地方の第一期作に行はれ、其の他は主として浸水後直に播種す。主要米作地方は短冊方苗代多し。播種は坪當り七合六勺乃至一升四合で當局の獎勵するところは坪當り約四合本田一甲當り苗代面約一〇〇坪である。播種期は内地に比し氣候の關係上長期に亘つてゐる。

苗代期間は蓬萊種第一期作二十五日乃至四十日、第二期作十五日乃至二十五日、在來種第一期作五、六十日、第二期作

四、五日なるも長くなる傾向がある。

本 田 第一期作に於ては前年收穫後直ちに耕起、風化せしむるか、又は其の儘緑肥を栽培し挿秧前灌水、耕起、整理す第二期作に於ては南部地方は一期作後緑肥を栽培し得、以後第一期作の場合と同様なるも北部には緑肥栽培の日數無く第一期作が成熟期になるも排水せず、收穫後直に整地す。挿秧は一坪三十乃至六十株、普通四十株、一株十本平均である。肥料は第一期作に於ては多少の元肥をなすも第二期作は殆ど無肥料なり。除草は三回行ふことあるも普通二回である。

收 穫 收穫は一組五、六人にて直徑四、五尺の桶に割竹の棧を設け刈取りたる稻穂を之に打付け粒が桶に入り外部に飛散せぬ様に古麻布を桶に帆の如く立てたるものにして直ちに田に於て脱穀す。尙最近回轉脱穀機普通す。

之を地表を固めたる又はコンクリートを張りたる乾燥場にて直接地に播き散らす。此の爲に臺灣米の小石混入を生ず。尙小作料は一期、二期に分納するが、分納割合は第一期七割、第二期三割を普通とする。

第三節 取 引

年二回作の爲め出廻期は年二回なるも、其の一回の出廻期は比較的短かく、殊に第一期作は内地端境期に出廻るを以つて著しく短期間である。

在來米は島内消費にして移出の中心は蓬萊米と丸糯米である。第一期作は大部分蓬萊米、第二期作は蓬萊米と丸糯米とが移出せらるゝ。

生産者は籾摺を行はず、土壟間（籾摺業者）之を行ひ、土壟間は島内取引に於ても大なる役割をなしてゐる。

臺灣米の取引は島内取引と内臺間取引に二大別さる。

島内取引 内地農民が玄米生産の段階迄自ら支配しゐるに對し、臺灣農民は籾摺を自ら行はず、生産者又は地主は販賣籾を土壟間に直接、間接に賣渡すか、農業倉庫等をして委託販賣をなさしむ。之等は籾摺を行ひ、米穀検査を受けて移出業者に賣渡すか、更に精白されて一般島内消費者に渡る。

島内輸送は幹線は専ら鐵道によるも、其の運賃は内地に比し著しく高い。

島内取引に於て活躍する土壟間は古くより存し籾摺を業となす外に籾の買付、精米、包装、島内消費米の販賣、移出米

の受檢（受檢總量中約七五—八〇%は土壟間の受檢なり）、移出業者への賣渡等をなす。

土壟間は米の一時的保管設備を有するのみにして貯藏倉庫は殆どなく、又古くより産米に對する金融機關にして農民達は青田賣買或は依時行情と稱する籾の販賣を委託する事による金融を受けてゐる。（前者による金融の方が半以上である）最近の土壟間の分布状況左の如し。

	籾摺專業工場	籾摺兼精米工場	計	移出米を取扱ふ籾摺工場
臺 北 州	二七二	二一九	四九一	一三九
新 竹 州	一九四	四八〇	六七四	一三六
臺 中 州	二八〇	五一二	七九二	二一〇
臺 南 州	一一五	五五四	六六九	九六
高 雄 州	一四九	三九〇	五三九	一五一
臺 東 廳	五〇	八九	五〇	—
花 蓮 廳	—	—	八九	—
計	一、〇六〇	二、二四四	三、三〇四	七三二

尙專業精米業者は八五八軒なり。

近時土壟間と競争的立場にある農業倉庫が出現し、又農村經濟の好轉により青田賣買が減少せる爲、相當の打撃を受けしも、農民にとりては土壟間の方が金融を手輕にして呉れるし、庭渡して簡單に取引も出来るし、且つ多年の慣習でもあり、又近時土壟間の質も改善された爲、依然として取引上の第一位を確保してゐる。

内臺間取引 移出商は土壟間及農業倉庫等より玄米を買取り、内地の本支店或は代理店又は移入商に直接、間接に賣渡す移出商は昭和十三年末二十五軒存し、輸移出數量の約九四%を取扱ひ、最近農業倉庫、産業組合、或は土壟間が直接内地

と取引するものを生じたるも、其の數量は僅に六%に過ぎない。尙最近白米の内地移出を試るものあり、之が將來は臺灣米穀事情に大なる影響があるであらう。

臺灣に於ける移出商は以前は殆ど本島人のみであつたが、近時三井物産臺北支店、三菱商事臺北支店、加藤商會臺北支店、杉原産業株式會社等相次いで興り、總移出米の八三%は此の四大移出商により取扱はるゝに至る。群小移出商の追従を許さない。

移出商と土壟間との取引には現物と先物とあり、大部分は先物取引で受渡場所は基隆貨車渡し又は高雄倉渡しである。移出港に於ける荷役は移出商の指圖により運送店之行ひ、荷役賃は六十疋入袋當基隆七錢、高雄四錢(基隆より安きは倉渡にて買入るゝ爲なり)である。

移出商と内地移入商との取引にも現物と一、二、三ヶ月の先物取引あり、受渡場所は内地各港沖渡しである。内臺間の輸送は近海郵船、大阪商船、辰馬汽船の三社が殆ど全部を占め居り、協定運賃は基隆積阪神揚げ八十五錢、京濱揚げ八十八錢、高雄積は各二錢上りである。但し實際の運賃は之と相異なる。

内地に於ける臺灣米移入商の大部分たる二七五軒は七主要移入港に臺灣移入組合、協會等を組織し居り、更に此の上に全國臺灣米移入協會あり、相互間、對外的に活動して居る。

尙本協會は全國一圓を地區とする全國臺灣米移入商業組合を設立し、臺灣米移出管理等に順應せんとしつゝある。正米市場 臺灣には別に米穀取引所の設置なきも、正米市場として臺北に臺灣正米市場がある。昭和十三年末三十四名の組合員を有し、内地正米市場とは趣を異にし、清算取引を加味してゐる。取引の種類は直取引と延取引の二種で、直取引は契約成立より五日以内の期間に現品の授受を行ひ、延取引は毎月五日、二十日を受渡日とする三期建とし、受渡の最長期間は四十五日とし、此が清算機關として別に臺灣米穀代行會社を設置してゐる。

第四節 米穀検査

現在臺灣總督府米穀検査所を臺北に置き支所を基隆、新竹、臺中、嘉義、高雄に更に出張所を十ヶ所に設けてある。原則として本検査に合格したるものにあらずれば輸移出が出来ない。

銘柄及等級としては蓬萊米及丸糯玄米は各州廳米を夫々臺北米、新竹米、臺中米、臺南米、高雄米、東部米の六銘柄となし、各々一等より五等及等外の六階級とす。

第五節 米穀關係倉庫

昭和十三年十一月現在の倉庫状況を見るに。

官設倉庫 (基隆、高雄兩港岸壁倉庫)	棟數	坪數	收容力 (穀石)
米穀検査所指定倉庫 (除官設倉庫)	一五	一一、九四三	九二九、五八一
米穀統制組合倉庫	二二二	一五、二〇九	七三四、一九五
農業組合倉庫	一七〇	一五、八四〇	四四三、五二〇
農業組倉庫	二二四	一六、六八九	九六四、一六九
農業組合利用倉庫	三五	一、七八九	九一、六七八
其他運送業者、土壟間等の民間倉庫	八九六	五〇、四八二	一、七八六、八一〇
計	一、五五二	一一、九五二	四、九四九、九五三

官設倉庫は鐵道部上屋倉庫にして船積前の一時保管をなすものである。

米穀検査所指定倉庫は米穀検査を受くる場所として米穀検査所長の指定したる倉庫である。

元來臺灣農民は自ら糶摺を行はず、また貯藏設備もなく、土壟間の調製も粗雑なこと多かりし爲、大正十一年農業倉庫法を臺灣にも施行することとなり、之によりて生じたるものが農業倉庫である。農業倉庫は産米の保管、乾燥、糶摺、調製、受檢、販賣をなし又金融をもなし、土壟間と競争的立場にある。昭和七、八年來急激に増加し其の業績良好である。農業倉庫を集めて各州農業倉庫協會を設け設備検査等をなし、又共

同販賣機關として臺灣農倉米共同販賣所を有して居る。農業倉庫の經營主体は産業組合である。

第六節 米穀關係團體

農會 現在各州廳單位に八の農會あり、地方農政助長機關として農業指導獎勵の任に當つてゐる。内地に販賣轉旋所を設置したる農會もある。昭和十三年八月一日より臺灣農會令施行、臺灣全体を區域とする臺灣農會設立され、二級制の系統農會制である。

農會と密接なる關係ある郡、街、庄、字等を區域とする任意農業團體あり、其の數昭和十二年末三、八〇〇を超へ共同苗代、小作關係改善、水利施設等農事改良、農家經濟の向上に資してゐる。

産業組合 昭和十二年末組合數は四八一にして、一市街庄當り殆ど二組合に近く、産業組合が金融界に重要地位を占むること内地、朝鮮の比にあらず。最近迄信用組合が主なりしが、事業組合兼營に乗り出してゐる。本島の産業組合には聯合會の制度なく、現在總督府内に臺灣産業組合協會、各州廳に同支會設置せられ、産業組合の指導、獎勵、普及發達、連絡統制を圖つてゐる。

米倉(穀)利用組合 米穀商同業組合と同州下の土壘間を以つて組織されたるもので、各州名を冠し名稱は多少異にするも、主要搬出驛に移出米の検査指定倉庫を建設し、組合員の利用に充て又組合員の金融機關となり、更に麻袋共販組合より組合員の麻袋の共同購入をなしてゐる。

米穀移出商同業組合 移出商の同業組合である。

米穀運送業者のプール 移出商同業組合の基隆港に於ける指定運送店たる臺灣倉庫株式會社、臺灣運輸株式會社、日東商船株式會社、日本通運株式會社及株式會社丸一組の所謂五大運送店により組織せられたるもので、荷役賃、手数料、運賃等を協定し、各店の取扱數量に従ひ之を按分し利益を分配するものである。

製麻組合麻袋販賣所 (麻袋共販組合)各製麻會社(現在六)の臺灣に於ける「ガンニー袋」を共同販賣すると共に各會社の競争、價格の著しき變動などを防止せんとするものである。

産米改善協會及臺灣米穀検査協會 産米改善協會は各地方米穀検査所支所及出張所の區域を大体の單位とし、主として土

壘間を會員とするもので、胴割米の防止、石抜きの勵行等に努めてゐる。

臺灣米穀検査協會は正米市場組合、移出商同業組合、米穀商同業組合、各州農業倉庫協會を會員として居り、産米改善協會と同様な使命に任じつゝ、尙古袋又は吠の検査を行つてゐる。

第二章 特産物

第一節 砂糖

臺灣の糖業については既に述べたるが、糖業は昭和四年に至つて甫めて輸入糖を掃蕩し完全に自給自足の凱歌を擧げ、茲に臺灣糖業第一段階の使命を果した。而して其の第一段の使命を果して臺灣糖業は更に海外へ其の巨歩を踏み出したもので、爾來糖業の發展は駭々乎として已むことなく、昭和十四年期の産糖は實に二千三百萬擔といふ驚異的記録を作つたのである。之が爲に最近異常なる需要増加を示したる國內の需要に對し何等の不安なきのみならず、軍需は元より滿洲及支那の需要に對しても其の責を果し、新東亞の建設に寄與しつゝある現状である。

以上第二段の使命を果したる臺灣の糖業は其の第三段に向つて突進することゝなつた。昭和十四年十月三日公布せられたる臺灣糖業令も之が使命を遂行せしむるが爲に生れ出でたるもので、其の第一條に「本令は製糖業及甘蔗農業の健全なる發達、砂糖の供給の圓滑並に産業の調和的發達を圖ることを目的とす」と宣言したるが如く、臺灣糖業は産業の調和的發達をなすべく時局下に持つ大きな使命の一として「ガソリン」の代用燃料としての酒精の生産と、紙の原料たる「パルプ」の生産に献身的努力を拂ふことゝなつたのである。やがて第三段階の使命を完全に果すべく期待せらるゝ。

第二節 パナ

バナナは米、砂糖に次ぐ臺灣特有の産業である。貿易状況を見るに輸出高は明治四十二年に於て四百四十六萬斤、價額十五萬圓にすぎなかつたが、昭和十二年に於ては二億六千二百七十萬斤、價額千七百三十萬圓の多きに達し、價額に於

て實に百十數倍の増加を示してゐる。
中央研究所嘉義農事試驗支所に於ては早くより十數種のバナナ品種を輸入して品種の適否試験を行ひ、又高雄州農事試驗所に於ても臺灣在來種を用ひて肥料試驗等を行ひ、以つて優良品種の普及増殖栽培の改善に努めてゐる。其の他臺中州の青果同業組合及高雄州の青果同業組合に於ては、それ〴〵試驗園を設置して肥料其の他に關する試験を行ひ、一般栽培者の指導啓發に資してゐる。

第三節 パイン

パイン生果は總生産高の五割が罐詰原料として用ひられ、殘餘の五割は生食用として地元消費に充てらるゝ外、内地及對岸支那に生果の儘輸出さる。

本島在來種パインは果形小なるのみならず、纖維多く、且つ種子は深く果肉に埋没するを以て罐詰用として不適である。總督府は大正十四年度に於て始めて高雄州鳳山郡大樹庄に鳳梨種苗養成所を設置し、罐詰原料として好適せる布哇産及ポルネオ産優良種苗を輸入し、銳意養成繁殖に努め昭和二年度以降種苗配付をなし、昭和四年更に高雄州東港郡萬丹庄に、鳳梨種苗養成所を増設して圃場面積を七十甲となし、優良外國種の繁殖に努め昭和十二年迄に二百萬本以上の種苗配付を行ひ優良外國種の繁殖に努めてゐる。

在來種は特殊の芳香と黄金色の色澤とを有するが、罐詰原料に適せず、之に反し外國種は果形大きく纖維少く、且つ目淡く罐詰原料として適當であるが、一方芳香と色澤に乏しき缺点がある。故に彼此交配によつて採長補短本島獨得の新品種を育成し以つて我がパイン罐詰事業をして海外市場に独自の地歩を獲得せしむべく、中央研究所嘉義農事試驗支所に於て昭和二年度より銳意研究中である。

第四節 茶

現在の主産地たる臺北、新竹兩州に汎く栽培せらるゝ茶樹は對岸から移民が齎したものである。支那種系統中最も優良で現に當局に於て獎勵しつゝあるものは青心烏龍、大葉烏龍、硬枝紅心、青心大有の四種である。最近紅茶の發展著しき

ものあり、其の原料たるアッサム種及山茶の増殖を行つてゐる。

茶園の面積は四五、八八二甲、粗茶の生産高二千五百五十五萬斤、價額一千餘萬圓で、その主産地は北部地方にして大部は新竹州産である。

臺灣を歐米に紹介したるものは實に樟腦と烏龍茶である。茶は重要輸出品で其の額一千四百四十萬圓(移出は一四四萬圓)であり、烏龍茶は米國市場へ、包種茶は南洋及滿洲國へ、仕向けられてゐる。本島に於ける製茶業は日東殖産株式會社が廣大なる土地に大規模の工場を擁して大量生産を行つてゐる。その他地方の茶農家が機械を用ひて共同製茶を營んでゐるものもあるも、一般農家に於ては家内工業の域を脱しない。

從來の取引は産地農家は居ながらにしてその粗製茶を茶販人(仲買人)に賣却し、茶販人は之を製茶市場たる臺北市に輸送して再製茶館に賣渡すものであつたが、其間往々茶販人の乗ずる所となり、種々の弊害があつた爲、大正十二年より臺灣茶共同販賣所を設置せしめ、産地生産者より直接再製業者又は輸出商に販賣するの途を開いた。

現在施設としては、(一)種苗費補助、(二)製茶機貸付、(三)街庄技術員給補助、(四)模範茶園補助、(五)茶業傳習所、(六)取締検査(七)中央研究所平鎮茶業試驗支所、臺中州魚池紅茶試驗支所等の研究機關、(八)臺灣茶共同販賣所補助、(九)滿洲國向茶の指導(十)販路擴張施設などをなしてゐる。

第五節 柑橘類

臺灣の柑橘は風味卓絶し他の追随を許さぬ良品である。總督府に於ては夙に斯業の有望に着眼し銳意之が向上増産に努めた結果、現在に於ける栽培面積は五千甲、收穫高五千五百萬斤を算し臺灣青果中バナナ及パイン罐詰に次ぎ農家經濟上重要な地位を占むるに至つた。本島の柑橘類は從來内地に於てはバナナ荷受機關の所在地である門司、下關、長崎、神戸、大阪、京都、名古屋、金澤、横濱、東京、函館、小樽に移出され、その消費は主として表日本の大都市に限られてゐたが、臺灣の柑橘は値段高く一般消費に適せず、多くは上中流向の需要に止まりしこと及び再度の移出入植物検査を要するが爲、自然出荷數量に制限を受くることになり、多量の出荷がなかつた。然し毎年多少宛増加の傾向である。輸出は從來餘り振はなかつたが、滿洲國の建國に伴ひ、滿洲國への輸出は異常の發展を示し、今日に於ては内地移出を

凌駕してゐる状態である。大連、奉天、新京、天津、北京等は將來有望なる臺灣柑橘の市場である。現在の施設は、(一)柑橘改良増産獎勵、(二)士林、嘉義其の他各試験所に於ける試験研究などである。

第三章 臺灣の專賣事業

臺灣の專賣事業は阿片、食塩、樟腦、煙草、酒の五種で、その機關次の通りである。



第一節 阿片

製造 阿片烟膏の原料は未熟の罌粟の果殻に傷をつけ、これから滲出する液汁を採取し乾涸せしめたもので、世界の主要産地は印度、波斯、土耳其であるが、現在臺灣では波斯阿片を用ひてゐる。昭和十三年度の烟膏製造高は一萬五千餘担である。

販賣 阿片烟膏販賣の順序は先づ專賣局から各州廳に保管轉換し、州廳は之を元賣捌人に拂下げ、元賣捌人は更に之を小賣人に卸し、小賣人の手から吸食者に賣渡すのである。阿片烟膏の販賣數量は明治三十三年全島の阿片癮者調査完了の年には二十萬餘担であつたが、本島の阿片政策効を奏して逐年減少吸食者の數も著しく減じてゐる。

吸食 阿片の吸食は人道上正に世界的の大問題であるが、之を實際に適用して最も合理的に解決しつゝあるのが臺灣の阿片政策である。臺灣の阿片政策は(斷禁主義に基く)漸禁政策を採り全島の阿片癮者を精査して、既に痼疾となり、阿片吸食を措いては生命を全ふし得ない癮者に限り吸食を特許し、これ以外の者の吸食は之を嚴禁してゐる。

吸食の特許を受けたる者は鑑札と購買通帳とを所持し、通帳には醫師の証明に依る一日分の吸食量を記載し、三日分以上の烟膏は之を購買又は所持することを堅く禁じてゐる。昭和十三年末には吸食特許者一萬人に減じ、本島人口千人當二人に過ぎない。此の現状から推定すれば、全島に亘り阿片癮者の影を没するの日も遠くはあるまじく、國民保健上、人道に悦ぶべき現象である。

第二節 食塩

本島の産塩は天日塩、粉碎塩及煎熬塩の三種である。天日塩の製法は塩田に海水を入れ、直接天日に曝して水分を蒸發し、濃縮結晶せしむるのである。塩田は大蒸發池、小蒸發池、母液溜、結晶池等より成つてゐる。天日塩の生産地は中南部で産塩は政府に於て一定の補償金を以つて之を收納する。粉碎塩は天日塩を粉碎洗滌したるもので、直營の四工場で製造する。

煎熬塩は現在臺南市安平にある一工場で天日塩と略ぼ同様の方法で鹹水を採取し、直接火力を以つて煎塩してゐる。元來本島の塩業は島内の需要を充し、併せて内地の需給の調節を圖ることを主眼としたのであるが、事業は順調に發達して現在では島内、内地の需要を充した上、朝鮮、露領沿海州等への搬出をも見るに至り、更に進んで既設塩田の擴張により工業塩の生産に大進出を企圖してゐる。

島内の需要は近時年五千五六百萬担内外であるが、島外への搬出は年に依り消長が甚だしい。食塩の賣下價格は一般用と特別用の二つに分けてゐる。一般用は更に之を交通の便否、經濟狀態等に依つて六階級に分け、特別用塩も其の使途に應じて夫々七種に分けてゐる。一般用塩の賣捌機關は食塩元捌人及食塩小賣人の二階級になつてゐる。

第三節 樟腦

製造 樟腦―粗製樟腦の「原料」は「クスノキ」であつて本樟木、芳樟木の二種があり、是等を削つて木片となし腦灶に於て蒸溜して粗製樟腦及本樟油又は芳樟油を析出する。

此の製造小屋を腦寮と稱し、多くは蕃地に散在する。從來山許製腦は民業に委せられたが、昭和九年七月から政府の直營とした。而して粗製樟腦は臺北南門工場に於て昇華法に依り油水分及固形夾雜物を除去し改良乙種樟腦とし、現今當局より内外に配給し直に各種工業原料に用ひられる。

再製樟腦本樟油中には約五十%、芳樟油中には約三十六%の樟腦を含有してゐるから、前者は臺北南門工場及神戸の再製樟腦株式會社工場に於て、後者は臺北南門工場に於て各々之を分溜し、樟腦並各種油類を製出する。

斯くして得たる樟腦は即ち再製樟腦であつて粗製樟腦と共に改良乙種樟腦の原料に供せらる。而して再製樟腦株式會社に於て製出したる再製樟腦は凡て一定の補償金を交付し之を政府に收納し專賣局神戸出張所工場で改良乙種樟腦原料に供してゐる。

販賣 本島樟腦の販路は國內の外は主として米、英、佛、伊の諸國で、就中米國を以つて最大の顧客とする。「セルロイド」工業の勃興に伴ひ世界に於ける樟腦の需要は急速に増加し、最近一千万疋程度である。

本島は世界の需要に對し天然樟腦供給地として現在約その三割内外を供給してゐる。輓近合成樟腦の出現は相當脅威を受けたるも、天然樟腦に對する技術の改良其他に依る生産費の引下並に副産物の利用が擴大せられたので優に合成樟腦を壓倒してゐる。

副産物 本樟油を分溜するときは樟腦の外白油、赤油、藍色油等の副産物を抽出し、芳樟油よりはこの外芳油を得る。之等副産物は香料、防臭、驅蟲劑、テレビ油代用等に使せられ、就中芳油は約八十%の「リナロール」(香料)を含有し又赤油中には相當量の「サフルム」(香料)を含んでゐる。斯の如く多量に貴重なる香料原料を産出することは恐らく世界を通じて他に類がないであらう。

樟樹の造林 樟樹の造林は天然樟樹の後繼を作り、原料の補充を圖る必要上著々計畫實行大正十三年迄に約三萬二千ヘクタールの造林を遂行した。造林の方法は造林木を原料として伐採した跡地に伐採の翌年更に造林し以後年々伐採と造林とを併せ行ふ輪伐の方法に依つて永遠に原料の保續を圖らんとするものである。

第四節 煙草

耕作 煙草の耕作は政府の許可を必要とし、生産葉煙草は一定の賠償金を交付して、政府が之を收納することになつてゐる。現在耕作してゐる煙草の種類は黄色種、支那種、葉巻種の三種であつて、其の内最も多量を占めるものは黄色種である。昭和十三年度に於ける各種葉煙草の耕作地積は千六百五十五ヘクタール、收納數量は二百九十萬疋である。

黄色種は兩切煙草、支那種は臺灣刻煙草、葉巻種は葉巻の原料として使用され、黄色種と葉巻種は從來島外よりも輸入されてゐたので、自給計畫を樹て増産中の所偶々支那事變勃發以來原料葉は専ら島内産葉煙草を充てることとし、全島の耕地の擴張を行ひ現在では殆ど自給自足の域に達してゐる。

製造 現在製造してゐる煙草は葉巻、兩切、臺灣刻の三種である。

臺灣刻—本島特殊の刻煙草であつて、之が原料である葉煙草は從來支那より一部輸入されてゐたが、昭和八年以降は完全に島生産のみで製造してゐる。臺灣刻の種類は牡丹、白菊、水仙、玉蘭の四種の他に「タカサゴ」と稱する高砂族専用のものである。就中牡丹は最優良品で主として上流社會に其他は地方の慣習に依り需要の状況を異にしてゐる。

兩切—ヘロン、荒鷲、レッドジャスミン、隼、曙及軍隊専用煙草として「つはもの」の六種であつて、之を昭和十三年度製造數量より觀れば曙が七四%で最高位を占め、隼一二%で第二位、レッドジャスミン、荒鷲、ヘロン之に次ぐ、兩切煙草も亦「ラガサン」「日の出」と稱する高砂族専用のものである。

葉巻—現在製造してゐるのは「ニヒタカキストラ」「ツギタカ」「ニヒタカ」「ダイトン」「マボラス」「ノーコー」の六種類あつて、何れも品質技工共に優秀で外國製上級品に比して些の遜色なしといはれてゐる。

販賣 島内で販賣する製造煙草は上記各種の島内製造煙草の外に内地製口付紙巻の敷島、朝日、カメラヤ、兩切のチェリー、ほまれ、刻の水府、白梅、さつき、あやめ、桃山及び外國製葉巻八種、兩切紙巻六種、刻三種あるが、内地製煙草は内地專賣局より直接之を購入し、外國製は臨時貿易商を通じて輸入してゐる。

賣行の状況から言へば内地製造煙草は漸減しつつあるが、尙四割を占めてゐる。臺灣製造煙草は兩切が激増して、當局の煙草販賣状況の大勢に非常な影響を與へるに至つた。而して現在のところ外國製品の販賣高は微々たるものである。販賣機關としては賣捌人及小賣人の二級制を採つてゐる。

酒と共に專賣收入の大宗である。

第五節 酒

一一一

專賣の範圍 酒類の專賣は原則として酒類の製造並に販賣の全部に亘つて行はれてゐるが、只麥酒の製造、酒精の製造と之れ等の島外販賣に就ては例外を認めてゐる。酒類專賣令に言ふ酒類は酒精及酒精含有飲料にして、酒精分九十度未満のものといふのであるが、此の外に本島内で消費せらるゝ九十度以上の酒精も酒精令に據つて專賣となつてゐるので、揮發油混水用の無水アルコールも當然包含されてゐる。

製造 從來本島人の間に用ひられてゐた本島酒は一般に酒精の含有量多く、而も製酒の設備不完全で島民の保健衛生上寒心に堪へぬ点があつたが、專賣を施してからは常に設備を改良し、酒質の向上改善を圖り、島民の保健衛生に資し需給の關係を円滑ならしめた。一ヶ年の製造高は三十一萬頭内外で、米酒を筆頭に糖密酒、紅酒、清酒、藥酒等の順である。

販賣 販賣酒類には上記島内製造酒の外、内地及外國よりの購入酒がある。島内製造酒は概ね本島人向のもので、殊に米酒は其の代表的常用酒として販賣高最も多く、紅酒も亦高級酒とし、之に次いで多額である。購入酒は内地清酒、麥酒、葡萄酒、セリー、ウキスキー、ブランドー等多種多様で、その數量は年額十四萬頭、麥酒及内地清酒が大部分を占めて居り、直接製造元より購入するものと代理店、輸入商等を介して購入するものと二通りある。

尙昭和十年六月以來内地に移出せられたる島産支那酒は相當の成績を挙げつゝあり、酒專賣事業に於ける意義と輸入防遏といふ点に於て特筆に値するものがある。昭和八年七月麥酒專賣の爲め煙草を凌駕し、酒は專賣收入の第一位になつた販賣機關は煙草と同様賣捌人及小賣人の二級制を採つて居る。

第六編 輸移出入貿易の概要

第一章 開港と税關

本島の帝國税關は改隸の初め清國稅務司より引繼を受け明治二十八年六月十日に淡水、基隆、同月二十八、九日の兩日に安平、打狗（現在の高雄）を開港した。翌二十九年三月稅關官制發布、淡水、基隆、安平、臺南、打狗の五稅關を置き淡水稅關長は基隆を、安平稅關長は臺南と打狗を兼ねることとなつた。然るに臺南稅關は間もなく廢止せられた。其の後貿易の地理的状況により稅關所在地などに屢々變革あり、昭和九年基隆、高雄の二稅關となる。臺北、新竹、臺中の各州及花蓮港廳を管轄する基隆稅關には臺北、淡水、後龍、鹿港の四支署と十監視署があり、高雄稅關は本島南部の臺南、高雄の兩州及臺東、澎湖の兩廳を管轄區域として、東石、安平の二支署、十監視署となつた。而して昭和十四年十月開港となりたる花蓮港は監視署より支署に昇格した。

現在本島の開港場は淡水、基隆、安平、高雄の四港に新興花蓮港を加へて五港となり、特別輸出入港は後龍、鹿港、東石の三港である。

第二章 貿易

第一節 總貿易

改隸以來本島産業の開發に連れて貿易も長足の進歩を示してゐる。即ち明治三十年の本島貿易は輸移出額一千四百八十五萬七千圓輸入額一千六百三十八萬三千圓計三千二百二十四萬圓に過ぎなかつたものが、昭和十三年には輸移出額四億五千六百四十五萬四千圓、輸入額三億六千六百六十五萬九千圓計八億二千三百一十一萬三千圓にして、正に二十六倍の巨額

一一三

に達してゐる。その趨勢を摘録すれば左の如し。

年次	輸出及移出	輸入及移入	合計	指数
明治三十年	一四、八五六、八四八	一六、三三三、〇二〇	三一、二八九、八六八	100
同 四十一年	一七、三三六、一〇一	三〇、九七一、一三〇	五八、三四七、二三三	一八七
大正六年	一四、五七二、六八三	八、八四三、八七九	二三、四一六、五六三	七五二
同 十四年	二六、二二四、六五一	一八、三九五、三四〇	四四、九六〇、九九一	一、四三九
昭和元年	二五、四二五、〇七〇	一八、三二二、四五〇	四三、七四七、五二〇	一、三九三
同 二年	二四、六六六、二八四	一八、九四八、三三七	四三、六一四、六六一	一、三八八
同 四年	二七、八九三、二六六	二〇、九一〇、六八四	四八、八〇三、九五〇	一、五二六
同 五年	二四、四一、三〇四	一六、三三三、三二〇	四〇、七四四、六二四	一、三一一
同 六年	二二、〇七二、八六六	一五、六三三、一三三	三六、七〇五、九九九	一、一七三
同 七年	二四、〇七二、九八八	一六、四九七、七七〇	四〇、五七〇、七五八	一、二九七
同 八年	二四、八四三、三三九	一五、三三八、九三八	四〇、二三二、三二七	一、三九九
同 九年	三〇、九八、六六〇	二五、〇一一、七〇一	五五、九九九、三六一	一、六六八
同 十年	三五、〇七四、六七三	二六、三二、九七四	六一、四〇七、六四七	一、九四五
同 十一年	三六、九四八、九七八	二九、二六五、九四八	六六、二一四、八九六	二、一七八
同 十二年	四四、〇、一六九、九五五	三三、二二二、七四三	七七、二二二、七〇七	二、四四〇
同 十三年	四六、四三三、八三七	三六、六九一、九三	八三、一三三、〇二九	二、六三三

備考 本表には明治四十三年八月朝鮮合併後の滿十ヶ年間に於ける朝鮮移出入貿易を含まず。

本島の貿易は領臺後十數年間は殆ど入超であつたが、明治四十二年後は大正二年を例外として何れも出超を辿り、近年は出超額實に六千萬圓乃至九千五百萬圓を算してゐる。

以下最近の貿易状況を概説すれば、昭和四年に於て總額四億七千六百八十萬圓となりて一旦最高記録を作つたが、昭和五年、六年は内外財界の深刻な不況が波及し相踵いで減退した。併し翌七年下半年より本格的に更生した内地財界、殊に工業を中心とした産業界の好轉を反映し本島に於ける一般産業の収益を増加し、ことに農村購買力が擡頭した爲、肥料其の他企業材料等を首め、一般日常生活品の消費増大して輸移入貿易を助長することとなり、一方輸移出にありても如上島内産業の發展に増産を背景として内地の旺盛なる物資消化力に乗つて伸張を遂げた爲再び増勢に轉じ、九年に入つては總額五億圓臺を示現し、踵いで十年には六億圓臺に上り、十二年には七億を遙かに突破するの巨額を算するに至つた。

最もこの間輸出貿易のみは排日貨の續行に崇られ恢復が豫期した所よりも二年遅れ、九年には増勢に向ひ、十年には銀高で惠まれ、特に顯著なる進境振を示したが、十一年は其の反動で逆轉し、十二年は下半年支那事變の勃發に因つて打撃を蒙つた。昭和十三年は長期戦となつた爲、本島經濟も統制化せらるゝに至り、一部産業には多少不振を來したものでありたるも、輸出貿易も對滿關係の緊密によつて伸張を遂げ、移出貿易は砂糖の減産ありたるも、農村景氣の持續による購買力の堅調、時局産業の具体化に伴ひ、著しく増加して八億圓臺にはね上つて居る。而して昭和十四年は九月迄に於て物價高も伴ひ、輸移貿易は四億七千六百萬を算して前年一年分四億五千六百萬圓を突破するの激増振を示し、輸移入貿易に於ても二億九千六百萬圓にして、前年同期の二億七千萬圓を越へ、合計七億七千二百萬圓の巨額を示してゐる。

第二節 外國貿易

昭和十二年の輸出貿易は上期銀價の安定を英米財界の好況を要因とし、紅茶を筆頭に綿、絹布、芭蕉實等増勢を辿りつゝあつたが、下期初頭勃發せる支那事變の擴大によつて對支貿易杜絶に瀕し、且つ香港、南洋方面も排日氣運濃厚にして不振であつた。輸入貿易は主要品たる肥料、セメントが内地品移入に轉じ、ガンニ一囊、葉煙草は島内増産の爲め入減し上海の麩、福州の杉材等も不振であつた。昭和十三年は後半期に入りて支那占據地域の擴大、治安の安定等の爲め輸出貿

易は著しく増大し、昭和十四年に入りて更に拍車をかけ、重要輸出品は悉く激増し、輸入重要品中大豆、木材、麩、大豆粕なども著しく増加を示してゐる。

年次	輸 出	輸 入	計
昭和十年	三六、五四四、一九〇 <small>円</small>	四四、九七八、九〇九 <small>円</small>	八一、五二三、〇九九 <small>円</small>
昭和十一年	二九、〇五三、九八〇	四八、八五四、四一九	七七、九〇八、三九九
同十二年	二九、九一六、一〇九	四四、二二八、八一八	七四、一四四、九二七
同十三年	三六、三四九、九二三	三八、七〇九、一四二	七五、〇五九、〇六五
同十四年 (九月迄)	六〇、〇六二、八六七	三七、七七二、四二二	九七、八三五、二八九

第三節 最近の内地貿易

昭和十二年の移出は本島産業の二大支柱たる米、砂糖を初め芭蕉實、鳳梨罐詰、酒精、切乾薯、石炭等増産を告げたる一方新興工業亦順調なる發展を來し、之等は供給力の増大を以つて内地經濟界の好況に投じ盛況を呈した爲増進し、移入に於ては事變の影響と島民の消費節約の勵行等により多少不振のものありたるも本島産業の隆盛、物價昂騰等の爲伸長を示した。

昭和十三年の移出は一部農産品の減收、減産等ありたるも、物價昂騰も手傳ひて僅かに増加し、移入は農村景氣の持續による購買力の堅調、輸入制限に基く内地品への轉向、物價高による見越買、時局産業建設材料の入増等の爲著しく進展を示してゐる。

昭和十四年九月迄の移出は重要移出品の増加によりて著しく伸長し、移入にありては物價高等により僅かに増加を示してゐる。

年次	移 出	移 入	計
昭和十年	三一四、二〇〇、四八三 <small>円</small>	二一八、一四〇、八三七 <small>円</small>	五三二、三四一、三二〇 <small>円</small>
同十一年	三五八、八九四、九九八	二四三、八三一、五二九	六〇二、七二六、五二七
同十二年	四一〇、二五八、八八六	二七七、八九四、九二四	六八八、一五三、八一〇
同十三年	四二〇、一〇三、九一四	三二七、九五〇、〇五〇	七四八、〇五三、九六四
同十四年 (九月迄)	四一六、三一五、九六八	二五八、七五二、九五〇	六七五、〇六八、九一八

第四節 重要輸移出入品と港灣及その仕出仕向先

外國貿易 昭和十四年一月より九月迄の外國貿易を見るに、輸出 基隆半以上にして三千百萬圓、次が高雄の二千八百萬圓である。大部亞細亞洲にして中華民國、關東州、滿洲國の順である。

芭蕉實 三八七、二二三圓 高雄、基隆の順。

仕向地は中華民國最も多く、關東州、滿洲國之に次ぐ。

蜜 柑 五九二、五一四圓 殆ど基隆である。

關東州仕向大部である。

烏龍茶 一、九四二、五八五圓 全部基隆。

英國行大部である。

包種茶 三、八二一、二七〇圓 全部基隆。

關東州仕向大部である。

紅茶 二、七〇六、一四六圓 殆ど全部基隆。
 關東州、滿洲國仕向大部である。
 砂糖 二八、九九六、九〇五圓 高雄 二千三百萬圓、基隆 五百三十五萬圓。
 中華民國、關東州、滿洲國の順。
 鳳梨罐詰 四、九三〇、二九一圓 高雄 百九十萬圓、基隆 百萬圓。
 中華民國、關東州、滿洲國の順。
 羽毛 三二五、八三七圓 全部基隆。
 關東州、獨逸、中華民國、米國、香港の順。
 樟腦及樟腦油類 一、五五八、九八一圓 全部基隆。
 米國仕向大部にして獨逸、英國、佛國、伊太利などにも仕向けらる。
 其の他毛織物、絹織物、石炭などあり基隆を主とし、毛織物は主として滿洲國に仕向けられ、絹織物は關東州、石炭は中華民國が主である。
 輸入 高雄約三分の二の二千二百五十七萬圓、基隆三分の一の千三百四十萬圓である。
 大部亞細亞洲にして中華民國、關東州の順である。
 大豆 四、九四五、一三九圓 高雄 三百四十六萬圓、基隆 百四十八萬圓。
 全部滿洲國。
 塩魚 二九三、八七一圓 全部基隆。
 仕出地は殆ど全部蘇領亞細亞。
 葉煙草 二四一、三一三圓 全部基隆。
 全部中華民國産。
 黄麻 八九四、六四三圓 高雄大部。
 印度産である。

ガンニ一囊 五、〇一四、五〇〇圓 全部高雄。
 全部印度産。
 木材 八〇、四二九圓 高雄、基隆の順。
 米國、比律賓の順。
 包帯 四五二、三六五圓 基隆、高雄の順。
 中華民國産。
 麩 一、二五五、五九八圓 基隆大部。
 中華民國、關東州、滿洲國の順。
 硫酸アンモン(粗製) 一、一五六、五五四圓、高雄 八十五萬六千圓、基隆 二十九萬九千圓。
 滿洲國産最も多く、其の他は關東州出。
 大豆粕 一四、二二五、二六六圓、高雄、基隆の順。
 滿洲國産最も多く、其の他は關東州出である。
 内國貿易 昭和十四年一月より九月迄の内國貿易を見るに。
 移出 高雄半以上にして二億五千二百二十七萬圓、次が基隆の一億五千三百五十九萬圓であり、其の他の港灣は花蓮港 六百二十三萬圓、安平百八十五萬圓、臺東百九十二萬圓などである。
 仕向港は東京、大阪、神戸、門司、名古屋等の順である。
 米 九一、六七七、二九四圓、基隆 六千三百七十萬圓、高雄 二千七百九十六萬圓である。
 仕向地は東京を第一とし神戸、大阪、門司、名古屋、横濱、沖繩などの順である。
 切乾薯 七二四、九四三圓 全部高雄。
 東京、神戸、朝鮮の順。
 芭蕉實 一四、九六五、三六九圓、高雄 七百六十萬圓、基隆 六百八十五萬圓である。
 東京、門司、神戸、大阪の順である。

紅茶 一、八八八、〇三二圓 全部基隆。

神戶、清水、東京、大阪の順。

砂糖 二〇八、三〇三、五五〇圓、高雄 一億七千二百四十萬圓、基隆 二千七百九十六萬圓、花蓮港 六百二萬圓、臺東 百九十一萬圓である。

東京行六千七百萬圓にして頭抜けて多く、以下大阪、門司、名古屋、神戶などの順である。

糖蜜 一、二二二、四四七圓 高雄、基隆の順。

朝鮮最も多く、以下大阪、東京、横濱の順。

塩 九六九、六九八圓 大部安平。

北海道大部である。

鳳梨罐詰 八、一六三、五八〇圓 大部高雄である。

横濱最も多く、大阪、東京行などの順。

樟腦副産油及同加工油 一、一六九、八九〇圓 全部基隆。

殆ど全部神戶。

樟腦 三、四八六、七八五圓 全部基隆。

全部神戶。

帽子 二、六〇三、一五九圓 殆ど全部基隆。

殆ど全部神戶。

洋紙 四、五三二、〇四六圓 殆ど全部基隆。

神戶、大阪大部。

ウオールポルト 七三一、五七六圓 基隆、高雄の順。

神戶、大阪、東京の順。

石炭 三、七一八、七五四圓 殆ど基隆。

名古屋仕向最も多く、次は大阪、以下東京、沖繩、横濱などの順である。

木材 三、六〇五、三六三圓 基隆過半にして九十八萬圓、高雄 二十四萬圓、花蓮港 三萬圓。

主として東京、大阪仕向である。

移入 基隆六割以上を占め一億六千八百八十八萬圓、高雄七千六百三十八萬圓、淡水百六十二萬圓などである。

小麥 九七八、五二六圓 殆ど基隆。

鹿兒島仕向大部にして、門司、東京などより相當量あり。

小麥粉 四、七八一、八六七圓 過半基隆、次は高雄、安平。

名古屋最も多く、次は門司、大阪、東京、下關などである。

砂糖 三八九、八七四圓 殆ど基隆。

名古屋、門司最も多く、東京、門司、大阪などよりもあり。

塩魚及乾魚 六、三八七、一九三圓 殆ど基隆。

北海道最も多く、以下門司、神戶などの順である。

煉乳 一、四八四、三七六圓 基隆大部、次は高雄、安平。

北海道最も多く、次は神戶以下横濱、門司などである。

麥酒 四、五五一、六三六圓 基隆 二百七十五萬圓、高雄 百七十九萬圓。

神戶最も多く、次は名古屋以下大阪、門司などである。

紙巻煙草 三、八八六、二三〇圓 殆ど基隆。

殆ど鹿兒島仕出である。

綿絹、スフ織物 一四、〇一〇、五六一圓 大部基隆。

殆ど大阪、神戶仕出である。

毛織物 二、四六七、三二二圓 殆ど基隆。

殆ど大阪、神戶仕出である。

ガンニー囊 四、〇〇三、八〇四圓 過半高雄、次が基隆。
 神戸最も多く、東京、大阪、横濱、門司などである。
 セメント 一、二七七、〇八七圓 大部基隆、次は高雄。
 門司最も多し。
 自轉車、同部分品及附屬品 三、二七八、九三一圓 基隆最も多く、次は高雄、安平。
 殆ど大阪、神戸、次が東京、名古屋などである。
 木材 一三、五二〇、六六〇圓 基隆、高雄は何れも五百萬圓臺、次は淡水、安平。
 廣島最も多く、鹿児島、大阪、名古屋などに次ぐ。
 肥料 二四、八八〇、四四二圓 高雄 千五百八十七萬圓、基隆 九百萬圓。
 大阪最も多く、門司、三池、東京、神戸などに次ぐ。

第五節 最近年間臺灣入港船舶

昭和十三年臺灣入港船舶は外國貿易船一、二二二隻、登簿噸數三、一六〇、二二九噸、内航船二、〇〇九隻、登簿噸數四、九三二、三〇七噸、合計三、二四〇隻八、〇九二、四三六噸にして、左の如く基隆港最も多く、帆船出入は皆無である。

港	汽		船		小型汽船(百噸未満)		計	
	隻	噸	隻	噸	隻	噸	隻	噸
基隆	九〇四	二、五三三、六九二	二	一四六	九六	二、五三三、八三八	一〇、三五九	六五、九三三
淡水	八	一〇、三五九	二〇	五七三	三	九六	八	一〇、三五九
高雄	二九七	六五、三三九	二〇	五七三	三	九六	三	三、一六〇、二二九
計	一、二二二	三、一六〇、二二九	三	七一九	一三三	三、一六〇、二二九	三、一六〇、二二九	三、一六〇、二二九

内、航、船、

港	汽		船		小型汽船(百噸未満)		計	
	隻	噸	隻	噸	隻	噸	隻	噸
基隆	一、〇〇五	二、七〇一、二六五	五三	一、八四八	一、〇五八	二、七〇一、二六五	一、〇五八	二、七〇一、二六五
淡水	三〇	五四、九〇八	—	—	—	五四、九〇八	—	五四、九〇八
蘇澳	七	一〇、一八九	—	—	—	一〇、一八九	—	一〇、一八九
花蓮	二七	六五、三九六	—	—	—	六五、三九六	—	六五、三九六
高雄	四九五	一、一八三、三二二	三	七三二	五〇七	一、一八四、〇四三	一、一八四、〇四三	一、一八四、〇四三
安平	二六八	六八六、〇九七	—	—	—	六八六、〇九七	—	六八六、〇九七
馬公	三七	七八、五八一	—	—	—	七八、五八一	—	七八、五八一
其他	七四	一四九、九四三	一	三八	七五	一四九、九八〇	—	一四九、九八〇
計	一、九四三	四、九三九、六九〇	六六	二、六二七	二、〇〇九	四、九三三、〇七	二、〇〇九	四、九三三、〇七

第六節 最近年間貿易貨物噸量

昭和十三年臺灣貿易貨物噸量は外國貨物八九七、七六四噸、内國貨物五、四八四、五七一噸、計六、三八二、三三五噸である。
 外國貨物

港	出	入	計
基隆	二八三、四〇三	一七六、七九二	四六〇、一九五
淡水	八八〇	七、六七〇	八、五五〇
高雄	一四一、七七一	二七四、〇一七	四一五、七八八
安平	一三、二三一		一三、二三一
計	四三九、二八五	四五八、四七九	八九七、七六四

外國貿易噸量は基隆港、高雄港より稍多く大体に於て基隆は輸出港、高雄は輸入港である。

港	出	入	計
基隆	一、六四四、一三六	九八〇、五二五	二、六二四、六六一
淡水	二、六六七	五四、五八五	五四、五八五
蘇澳	三五、九三五	一四、三二五	一六、九九二
花蓮	一、五九三、七〇七	九二〇	三六、八五五
高雄	四六、七〇五	八七二、二〇九	二、四六五、九一六
安平	九、五九六	八二、八五九	一二九、五六四
臺東			九、五九六
計	三、四七五、五三七	二、〇〇九、〇三四	五、四八四、五七一

内國貿易噸量は基隆港、高雄港より十六萬噸多きも、基隆港より四十四萬噸の石炭を除けば、高雄港約二十萬噸多き計となる。而して外國貿易と反對に大体基隆港は移入貿易に高雄港は移出貿易にその重きをなしてゐる。

第三章 植物検査

農産物の健實なる發達をなす爲臺灣に於ても大正十二年以降輸出入植物取締法を施行し、嚴重なる検査を行ひ栽培植物に對する病菌害侵入を防止し、又内地朝鮮に移出する柑橘及西瓜の移出検査をも行ひ取引の安全を期し、以つて本島産業の保護助長に努めてゐる。

現在植物検査所は總督府殖産局に屬し、本所を臺北に置き基隆、新竹、員林、臺南、高雄に分所、臺中、新埔に派出所ありて検査及び取締に従事す。而して上述八ヶ所の内新竹、員林、臺中、新埔は主として移出検査を行ひ、他は輸移入検査をも同時に施行し、病菌害蟲藥劑其の他の調査研究は臺北に於て行はる。

第一節 輸移出入検査取締

世界各地より輸移入せらるゝ植物は其の種類三千餘種、昭和十二年度輸移入五十五萬五千捆、五百二十五萬圓に上つてゐる。

此等輸入検査は高雄分所に多く、移入検査は基隆分所主とす。其の他臺北本所臺南分所は開港場にあらざるも前者は淡水港、後者は安平港に近き關係上廻送せらるゝもの多く、何れも輸移入検査を行つてゐる。職員は常に出入港船舶に臨檢し、其の取締に當ると同時に多くの旅客の手荷物を検査し、又検査分所に於て申請の貨物の検査を施行し、郵便物は郵便

局に於て出張検査を行ふ。而して内臺間航空路の開始せらるゝに及び特に臺北本所に於て飛行機登載移入植物に對し、其の都度飛行場に出張検査を爲すことになつてゐる。

検査品中最も多きは種子類にして地下莖根之に次ぎ、接穂、接芽、挿木類は第三位である。其の仕出地は地理的狀態より南支、南洋を主とし、滿洲國、關東州、英領印度之に次ぎ、遠く歐羅巴、亞弗利加等より來るものもある。

第二節 輸出検査取締

輸出植物に對しては「輸入國政府ニ於テ其ノ輸入ニ就キ輸出國ノ検査証明ヲ必要トスルモノ」のみにつき検査を施行するが故に検査數量は比較的少し。此の検査は臺北本所、基隆、高雄、臺南の三分所に於て行はれてゐる。

第三節 移出検査取締

柑 橘 從來臺灣産柑橘類は内地に於て頗る珍重せられ、年々多數の移出ありたるも、大正三年内地に輸出入植物取締法施行以來、綿吹介殼蟲及び蜜柑小實蠅等寄着するの理由により、移入検査に合格せざれば陸揚不可能となり、不合格品は總て焼却處分せられ、臺灣斯業の發展に一大障礙を來したり。こゝに於て大正十年植物検査所の設立と共に農林省と協議決定、從來の個体検査を廢し、抜荷検査方法を實施することとなりたるも、更に大正十二年に至り内地移入検査はその主旨を徹底せんが爲再び個体検査方法の昔に歸りたり。現在の検査方法は先づ検査申請せられたる柑橘類は検査所倉庫に一定期間(文旦、斗柚は二十日、ボン柑、桶柑は十日)貯藏し、然る後二硫化炭素燻蒸を行ひ、個体検査により蜜柑小實蠅、黑星病其の他に依る被害果を除去し、而して之を合格品として申請者に交付す。昭和十一年度の検査申請數は著しく増大し千六十四萬顆、四十二萬圓に達してゐる。

柑橘移出検査は輸移入検査と異り、その生産期が大體一定し居るを以つて検査期間も亦定まる。即ち八、九月頃より南部臺灣に文旦先づ現れ、次いで斗柚の産出に入り、十一月よりボン柑の検査申請増加し來り、年末に至れば内地贈答品としての需要多く市場の活況により、全島各分所はボン柑の山を築く。斯くしてボン柑の申請は次年一月に至るまで繼續するも漸次減少し、之に代りて北部臺灣は桶柑、雪柑の出荷期に入るを以つて三月迄検査は見らるゝを常とする。

西瓜 臺灣産西瓜は肉眼検査を以つて被害果を除去し得る。他の検査品同様逐年増加し、昭和十一年度に於ては二十二萬四千顆、九萬六千圓で高雄最も多く、臺南、員林之に次ぐ。

第四節 内地移入禁止品

内地に於て臺灣産生果實及蔬菜類中左に掲ぐるものは、移入を禁止してゐる。

椪果(様仔)、枇杷、李、桃、蒲桃(香果)、蓮霧、(鞏霧)、蕃石榴(拔仔、那拔)、龍眼、荔枝、五敷子(楊桃)、胡瓜、甜瓜、南瓜、其他瓜類一切、蕃茄、菜豆、ささげ、やんばるなすび、蕃椒、甘藷等の生果實、甘蔗及種子、土壤の附着せる植物。

第四編 臺灣主要港灣の現状

臺灣の主要港灣は基隆、高雄、淡水、安平に新興花蓮港を加へたる五港である。昭和十三年臺灣全島の外國貿易七千五百萬圓、對内地貿易七億四千八百萬圓計八億二千三百萬圓中基隆港は四億三百萬圓、高雄港は三億八千四百萬圓にして、兩港にて全貿易額の九六%を占めてゐる。而して毎年十一月より翌年二月迄の四ヶ月は北部の雨期にして南部の雨期は六月から八月迄である。従て中部臺灣の物資は季節によりて北流して基隆へ、南流して高雄へ吞吐せらるゝ實情である。

第一章 基隆港

基隆港は臺灣北岸の中央基隆島の西方約二哩半の位置にありて東、西、南の三面は層巒に包圍せられ、港口は北々西に開き南西方に灣入す。現在内地臺灣間唯一の連絡地点にして、内地に對する大棧橋である。港灣設備は高雄港と並びて臺灣二大重要港灣の一である。

一、入港船舶隻數、噸數

第一節 船舶

區分	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
外國貿易船	一、四九二	二、八六八、三三三	一、二五六	二、九一三、二三三	九〇六	二、五三三、八八六
内臺貿易船	一、一五五	二、七九五、八九一	一、二一七	二、六七六、六四四	一、〇五八	二、〇〇三、一一三
計	二、六四七	五、六六四、二二三	二、二七五	五、六五〇、七三七	一、九六四	四、五三六、九九九

二、繫船岸壁繫留船と沖懸船との割合 (昭和十二年)

岸壁繫留船 三四・八
沖懸船 六五・二

三、定期船の各線船主別基点、終点、寄港地、入港回數並噸級 (昭和十三年)

所屬船主名	航路名	基点	終点	寄港地	名	入港回數	噸級
大阪商船	神戸—基隆	神戸	基隆	門司	〃	七四	一萬噸級
日本郵船	〃	〃	〃	〃	〃	五六	〃
大阪商船	東京—高雄	東京	高雄	横濱、名古屋、勝浦、大阪、神戸、廣島、門司、博多、長崎、三角、鹿兒島、基隆、馬基、天津、興隆、鹿兒島、長崎、博多、釜山、雄基、城津、興南	〃	一一九	四千噸級
〃	高雄—清津	高雄	清津	〃	〃	二四	二千噸級
〃	那覇—基隆	那覇	基隆	〃	〃	五四	〃
〃	基隆—香港	基隆	香港	西表、石垣、宮古	〃	二九	三千噸級
〃	廈門—基隆—上海	廈門	上海	基隆	〃	一一	〃
〃	基隆—廈門	基隆	廈門	基隆、大連	〃	三四	〃
〃	高雄—天津	高雄	天津	〃	〃	二六	〃
〃	高雄—上海	高雄	上海	〃	〃	六六	〃
南洋海運	南洋	横濱	上海	基隆	〃	二六	〃
大阪商船	比律賓	〃	〃	名古屋、大阪、神戸、釜山、門司、基隆、廈門、マニラ、セブ	〃	二二	五千噸級
〃	西貢—盤石	〃	〃	名古屋、大阪、神戸、門司、長崎、基隆、高雄、西貢	〃	三〇	五千噸級
〃	〃	〃	〃	名古屋、大阪、神戸、門司、基隆、海口、海防、西貢	〃	二二	六千噸級

大連汽船	大連—高雄	犬	高	基隆	六五	三千噸級
日本郵船	高雄—朝鮮	高	釜	基隆、大連、鎮南浦、仁川	二七	〃
〃	高雄—東京	〃	山	橫濱、名古屋、大阪、神戸、門司、基隆、安平	一九	五千噸級
〃	歐洲	橫	濱	名古屋、神戸、門司、上海、基隆、香港、新嘉坡	二一	一萬噸級
〃	歐洲	漢	京	ベナン、コロンボ、ジブラルタル、ロンドン		
〃	歐洲	ハン	ブル	リ、マルセイユ、シブラルタル、ロンドン		

備考 ※昭和十四年十月より東亞海運株式會社へ。

四、専用パースの大体

航路名	専用パース
基隆厦門線	第一岸壁
神戶基隆線 (内臺定期船)	第二、第三、岸壁
糖蜜船積船	第六岸壁
重油揚積船	第十三、第十四岸壁
大連高雄線	第十八岸壁
歐洲航路	第八番浮標

第二節 貨物

一、最近三ヶ年内外貿易貨物噸量價額

區分	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額
輸出	三五六、三二二	三三、一五八、二二九	二七二、二四〇	三三、八四九、六七三	二六三、四三三	二二、一八三、九五五

輸出入	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額
輸入	三三八、一五八	二二、七六三、九三六	三五三、八七三	一七、七〇一、〇〇八	一七六、七九三	一三、八八八、四三三
移出	五七四、三七九	四四、九四二、一五五	五三〇、一一三	四一、五五〇、七〇〇	四六〇、一九五	三五、〇七三、三五八
移入	一、八四、一〇〇	一、五八、四一、八二五	一、四三〇、六五三	一、六一、九〇、九〇一	一、六四四、一三六	一、七三、九三八、六九六
移出	九一三、八六五	一、五二、一三七、二二四	九九〇、八八〇	一、七四、四四五、三三三	九八〇、五二五	一、九四、五六、六四四
合計	二、一九七、八七五	三〇七、〇六九、〇三九	二、四二一、五三三	三三六、一三六、二八四	二、六二四、六六一	三六八、四五四、八六〇
合計	二、七七一、二五四	三五二、一〇一、一八四	二、九四三、六四五	三、七七一、〇六四	三、〇八四、八五六	四〇三、五二七、二一八

二、主要船積貨物仕向地別數量價額 (略)

三、主要船卸貨物仕向地別數量價額 (略)

四、貨物港灣諸掛費

- (一) 輸移入の場合 (一般貨物)
 - イ、外國貨物四噸以上又は内國貨物二十五噸以上の場合、受荷主は直接運送店に依頼し本船取を爲すことを得る。此場合左の如し。
 - 一、船内荷役賃 一噸 二七錢 (運賃に含まる。但大連積出のものは含まれず。)
 - 一、船積 同 五〇錢
 - 一、船積より倉庫揚賃 同 六〇錢 (岸壁揚賃は六〇錢以下)
 - 巨大重量貨物等の場合に於ける起重機使用料を含まず。
 - 一、貨車積賃 一噸 六〇錢 (肥料五五錢)
 - ロ、前項以外は船會社專屬運送店扱にて取纏め船卸を爲し受荷主は左の水揚賃を船會社に支拂ひ受取るものである。
- 金銀貨幣 一噸 一〇〇 岸壁取
- 其の他貴重品 百圓 一〇 普通雜貨 一噸 一〇〇 岸壁取

鹽魚類	一噸	一・一〇	岸壁取セメント、豆粕	一噸	一・八六
鑛物レール	一噸	一・三五	岸壁取肥料	一噸	一・〇六
石材機械類	一噸	一・三〇	岸壁取木材	一噸	一・二〇
防腐木材	一噸	一・八〇	外國貨物雜貨	一噸	一・二〇
危險物	一噸	二・二五	火藥類	一噸	七・二〇
牛馬	一頭	三・六〇	豚犬其の他家畜類	一頭	五・五四

備考

- 一、危險物は石油類、揮發油、デレメン油、酸類、カーバイト、ゴム、防水布、雨衣、雨傘、提灯、油類、油布、生石灰、燐寸瓦斯類、酒精等。
- 一、一噸とは四〇才、一、五〇〇斤、二、〇〇〇磅、一、〇〇〇疋、六石、一五擔、二四〇貫とす。
- 一、一口の最低賃金二〇錢。
- 一、金銀貨幣百圓未満は百圓に對する分。
- 一、危險物の最低賃金三〇錢。
- 一、火藥類は一口最低賃金四〇圓。
- 但船積泊り賃は積入れ當夜を除き、翌夜より一夜毎に六圓。
- 一、重量品嵩高品、並長尺物は左の割増とす。
- 重量品 一個一噸以上のもの 一噸に付 二倍
- 同 一個二噸以上のもの 同 三倍
- 嵩高品 一個一噸以上のもの 同 一倍半
- 同 一個二噸以上のもの 同 二倍
- 長尺物 二十四尺以上のもの 三割増
- 三噸以上及長尺四十尺以上のものは其都度之を定む。
- 一、賃金は荷物の才量斤量を比較して多き方を以つて計算し總て厘位四捨五入。

(二) 輸移、出の場合 (一般貨物)

- 噸數に制限なく荷主は運送店に依頼し直接本船積を爲すことを得る。
- 一、貨車卸賃 一噸 六〇錢
- 一、船積卸賃 一噸 六〇錢 (岸壁船積の場合は六〇錢以下)
- 巨大重量貨物等の場合の起重機使用料を含みます。
- 一、船積賃 一噸 五〇錢
- 一、スリング賃 一噸 六錢 (船積より本船積の際船會社專屬運送店苦力賃)
- 一、船内荷役賃 一噸 二七錢 (運賃に含まる)

第三節 乗下船客

最近年間乗下船客は外航船乗一二、五三三人、下六、四四四人計一八、九七七人、内航船乗七二、二〇五人、下九四、七四二人計一六六、九四七人合計一八五、九二四人で、外航路客は時局關係によりて前二年に比し乗下船客共著しく減少せるも内航船客は乗下船客共逐年著しく増加し、ことに下船客は乗船客より年々三割以上増加し、内地人の臺灣渡來増加の趨勢を示してゐる。

最近三ヶ年外國及内國航行船旅客表

外國航路 日本人	上		陸		船	
	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
	一六、五九六	二〇、〇〇〇	六、三九九	一六、九六六	九、五七五	一三、三八〇

合 計	内 國 航 路	日 本 人	歐 米 人	中 華 民 國 人	其 他	歐 米 人	中 華 民 國 人	其 他
110,973	81,339	1,891	56	3	28,396	196	8,087	150
111,104	83,607	1,111	50	9	28,337	196	8,087	150
101,186	94,584	1,411	13	3	6,444	152	11,675	187
84,191	55,110	1,691	33	5	28,829	152	11,675	187
89,963	66,863	1,400	9	6	23,864	152	11,675	187
84,738	71,077	86	1	1	13,553	152	11,675	187

第四節 基隆港より主要港灣に至る距離

那 霸	長 崎	宇 品	名 古 屋	函 館	釜 山	鎮 南 浦	鹿 兒 島	博 多	神 戶	清 水	小 樽	仁 川	清 津	三 池	門 司	大 阪	橫 濱	木 浦
三三六哩	六三八哩	八五八哩	一、〇三五哩	一、三九四哩	七一五哩	八八〇哩	六三〇哩	七〇〇哩	九三〇哩	〇〇六哩	一、四七四哩	八〇五哩	一、一一七哩	六七五哩	七五五哩	九三三哩	一、一三九哩	六七八哩

大 連	青 島	厦 門	廣 東	淡 水	高 雄	海 防	盤 石	太 沽	上 海	仙 頭	新 高 港 (梧 棲)	花 蓮 港	西 貢	蘭 貢	天 津	福 州	香 港	安 平	澎 湖 島	新 嘉 坡	マニラ
八六〇哩	七〇六哩	二二九哩	五六六哩	三一哩	二四〇哩	九三〇哩	一、九〇〇哩	九九五哩	四二〇哩	三一三哩	一一三哩	八七哩	一、三〇〇哩	二、九四〇哩	一、〇四〇哩	一四四哩	四六六哩	二〇〇哩	一八七哩	一、八三四哩	七七〇哩

第五節 港灣設備 (略)

第二章 高雄港

高雄港は臺灣の南部西海岸高雄灣口の内側にある。高雄灣は其の南西一帯に長く連る幅員約八十米の砂嘴によつて外海と隔絶された幅約五百米、長約十二軒の水面積を包有する湖状の入口で、其の西北端は珊瑚岩から成る旗後山と其の北側壽山々脚の間に狭まれ、幅員僅かに百九米の灣口によつて外海に通じてゐる。中南部唯一の貨物吞吐港にして南支、南洋に近く、屏東平野より遠く臺南、嘉義、臺中に亘る廣大なる背域を控へ基隆港と共に臺灣二大重要港灣である。

第一節 船舶

一、入港船舶隻數噸數

區 分	昭 和 十 一 年	昭 和 十 二 年	昭 和 十 三 年
隻 數	噸 數	隻 數	噸 數

外國貿易船	四〇〇隻	七〇、九〇七噸	三六隻	五三、四三三噸	三八隻	六二九、三〇八噸
內臺貿易船	五五〇隻	一、三〇、三三三噸	五五四隻	一、七二、八五六噸	五七隻	一、八四、〇四三噸
計	九七〇隻	一、九二、三九元	八八〇隻	一、七二、二五八噸	八二五隻	一、八三、三九一噸

二、繫船岸壁繫留船と沖懸船との割合

繫船岸壁 四・六
沖懸船 五・四

三、定期船の各線船主別基点終点寄港地入港回数並噸級 (昭和十三年中)

所屬船主名	航路名	基点	終点	寄港地	入港回数	噸級
大阪商船	高雄—東京	高雄	東京	横濱、名古屋、大阪、神戸、門司、基隆	六〇	四千噸級
〃	高雄—大阪	高雄	大阪	〃	一一	三千噸級
〃	高雄—清津	高雄	清津	基隆、鹿兒島、長崎。博多、釜山、雄基、城津、興南	一二	二千噸級
郵船	高雄—仁川	高雄	仁川	基隆、大連、鎮南浦	二四	三千噸級
〃	高雄—東京	高雄	東京	横濱、名古屋、大阪、神戸、門司、基隆、安平	二四	五千噸級
展馬汽船	高雄—東京	高雄	東京	〃	夏期 月五乃至六	三千噸級
大連汽船	大連—高雄	大連	高雄	基隆、營口	三六	三千噸級
東亞海運	高雄—廣東	高雄	廣東	基隆、大連	二四	三千噸級
〃	高雄—天津	高雄	天津	〃	一二	二千噸級

第二節 貨物

一、最近三ヶ年内外貿易貨物噸級價額

大阪商船	基隆—香港	高雄	香港	高雄	二四	三千噸級
〃	高雄—上海	高雄	上海	基隆	二四	三千噸級
〃	比律賓	横濱	ダバオ	名古屋、大阪、神戸、門司、長崎、基隆、高雄、マニラ、セブ	二四	五千噸級

輸出入	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額
輸出	八二、九九四噸	五、二六四、六九九円	九一、二四六噸	五、七二四、一九三円	一四、一七七噸	一四、六四八、〇三四円
輸入	二九八、三九六噸	三三、九八二、六五四円	二六〇、三四三噸	三三、六七三、七九九円	二一〇、五二〇噸	三三、六三〇、六四九円
移出	三八一、二八〇噸	二九、三四七、二七三円	三五一、四八九噸	二八、三六六、九九一円	四三三、二二三噸	三八、三六八、六七三円
移入	一、三三、五三三噸	一九四、四三三、〇〇〇円	一、五〇、六一八噸	三三八、四六九、七六九円	一、五九、七三三噸	二三五、七六六、八四七円
合計	七五六、〇一一噸	七三、六三一、六〇四円	七八七、四五七噸	八四、〇三六、五七七円	八七二、四四五噸	一〇〇、三二八、八九六円
合計	二、〇六九、五四四噸	二、六七七、〇七七、六〇四円	二、二九三、六四六噸	三三三、五〇六、三四六円	二、四六五、九七七噸	三三四、〇〇五、七四三円
合計	二、四五〇、八二四噸	二、九六、三〇四、八七七円	二、六四五、一三五噸	三、五〇、八九三、三三七円	二、八八八、二六〇噸	三、八四、二七四、四一六円

二、主要船積貨物仕向地別數量價額 (略)

三、主要船卸貨物仕向地別數量價額 (略)

四、貨物港灣諸掛費の大体

一噸當 重量 二圓
容積 一圓七〇錢

第三節 乗下船客

昭和十三年中及昭和十四年一月より十月迄の内外航路別旅客乗降人員は左の如く、基隆港とは反對に外航船に由る旅客は内航船のそれに比し著しく多數を示してゐる。

内外航船	昭和十三年		昭和十四年一月-十月	
	上	陸	乗	船
内航船	二、六九〇人	四、八三二	二、三四四	六、二二二
外航船	四六一	四八〇	七四一	六二四
計	三、一五二	五、三一二	三、〇八五	六、七三三

第四節 高雄港より主要港灣に至る距離

基隆	東廻二九二哩	福州	二三四哩
馬公	西廻二二四哩	廈門	一六五哩
那霸	七五哩	汕頭	二四〇哩
鹿島	五一〇哩	香港	三二五哩
長崎	八三四哩	廣東	四〇五哩
博多	八五〇哩	防東	七九〇哩(香港經由)
門司	八九六哩	西貢	一、二五五哩(香港經由)
	九五二哩		

神戸	一、〇五四哩	天津	一、三三二哩	盤石	一、七八五哩(ク)
大阪	一、一四三哩	上海	六四三哩	マニラ	五五二哩(ク)
サンダカン	一、一六八哩(香港經由)	バタビア	二、一六〇哩(マニラ經由)	彼南	二、一四〇哩(シンガポール經由)
マカツサ	二、一五五哩(ク)	スラバヤ	二、二五一哩(香港經由)	ラングーン	二、九一〇哩(香港經由)
シンガポール	一、七六〇哩(ク)	スマラン	二、一八〇哩(ク)	コロンボ	三、三二五哩(シンガポール經由)

第五節 港灣設備 (略)

第三章 花蓮港

花蓮港は花蓮廳下に於ける唯一の吞吐港である。従来港口は東方が海岸に面して、其の風浪を遮蔽する地物なく、僅に十數隻の舢舨によりて碇泊船と陸岸との聯絡を取るものであつた。

昭和六年度初頭から陸路蘇澳花蓮港間百十九軒の自動車道路開通によりて始めて東西連絡の途が開かれ、昭和六年度より工費七百餘萬圓を以つて本港の築港に着手、此程完成。昭和十四年十月開港に指定せられて、伸び行く花蓮港として大に將來を囑望されることゝなつた。干満の差は二米二〇である。

第一節 船舶

一、最近三年入港船舶隻數噸數

船種別	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數

汽船	四一六	二二七、四九三	三六〇	二二、九三一	三七	一七八、五九六
發船	三六三	一八、六五五	四二五	一九、六〇六	三七六	二〇、七四四
支那形船	一一五	二六八	一四六	三九〇	二二七	三二二
計	八九四	二五六、四六六	九五二	二二、九三七	八二〇	一九、七八三

備考 沿海通航船のみである。

二、定期船の各船船主別基点、終点、寄港地間入港回数並噸級 (昭和十四年)

基隆—花蓮港間 一週 六回 大阪商船 二千噸級
 基隆—花蓮港—臺東—高雄間 一週 二回 〃 八百噸級

第二節 貨物

一、最近三年移出入貨物噸量價額

噸量	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	噸	價額	噸	價額	噸	價額
移出	一四三、九八一	三三、〇〇二、五八八	一五七、九三二	二五、一三〇、九三三	一四八、三三四	三四、四七、七五七
移入						

二、昭和十三年移出入主要品價額 (三十萬圓以上)

品名	移出		移入	
	價額	噸	價額	噸
砂糖	九、六〇三、三三五	四	一、三九三、七三〇	
支米	一、六四八、一〇九		一、三八三、四三九	
酒類	一、二九九、七一七		七一一、一五六	
葉煙草	七四三、九〇〇		三三八、四〇九	
落花生	四四〇、六一七		三一七、九七三	
木材	三四二、五五〇			
肥料				
食料				
其他				

品名	單位	價額	噸
砂糖	百圓ニ付	九、六〇三、三三五	四
支米	一噸	一、六四八、一〇九	
酒類	一噸	一、二九九、七一七	
葉煙草	一噸	七四三、九〇〇	
落花生	一噸	四四〇、六一七	
木材	一噸	三四二、五五〇	
肥料	一噸		
食料	一噸		
其他	一噸		

三、港灣諸掛費

花蓮港荷役倉庫株式會社創設せられ、その特殊荷役賃率は左の如くである。

船内人夫賃率表

品名	單位	賃率	品名	單位	賃率
貴重品、高價品、硬貨	百圓ニ付	〇・〇五	原木、原石、石材	一噸	〇・五〇
紙幣	一函	二・〇〇	石炭	同	〇・五〇
一般貨物	一噸	〇・二七	火藥類	同	一・〇〇
砂糖	同	〇・二七	レール	同	〇・五〇
牛馬	一頭	〇・二七	豚、犬、其の他の家畜	一頭	〇・〇七

備考 (略)

其の他の荷役賃

(一) 假揚、誤揚貨物轉送費	水揚賃、積込賃を併算す。			
(二) 倉移し賃	一噸に付	一・〇〇	最低	〇・四〇
(三) 上家より保管倉庫轉倉料	一噸に付	一・〇〇	最低	〇・四〇
(四) 野積場移し料	一噸に付	一・〇〇	最低	〇・四〇
(五) 貨物置換費	一噸に付	〇・三〇		
(六) 貨物改装費	イ、改装に要したる實費 一個に付 未定	〇・一〇乃至一・〇〇の範圍に於て定む		
(七) 倉庫料	未定			
(八) 船内掃除人夫賃	一時間 一人に付	〇・一〇		
(九) 甲板砂摺人夫賃	本島人 男 一日一人 一・八〇 女 一日一人 一・〇〇	内地人 男 一日一人 二・二〇		
(十) 繫離船人夫賃	一、〇〇〇噸以下 三・〇〇 五、〇〇〇噸以下 八・〇〇	三、〇〇〇噸以下 五・〇〇 四、〇〇〇噸以下 六・五〇		
(十一) 曳船使用料	汽船純噸數 二〇〇噸以下 一五・〇〇 小形發動機船 一〇・〇〇 漁船 八・〇〇			
(十二) 旅客手荷物取扱料	一隻一回二時間を超へたるときは爾後二時間を加ふる毎に二圓を加ふ。 イ、東花蓮港驛——本船相互間 一個 二・二〇 ロ、花蓮港驛——本船相互間 〃 四・四〇			

第三節 花蓮港より主要港灣に至る距離

基隆 九五哩

第四節 海灣設備

- 一、東防波堤 一、三三〇米 西防波堤 二〇〇米
- 一、ドック (船溜) 面積 七萬平方米 水深 七・五米
- 一、岸壁延長 四一〇米 漁船岸壁 三六〇米
- 一、上屋二棟 一、四四〇平米
- 一、臨港線 四軒二

以上の工事完成し三千噸級汽船三隻を同時に繫留し一箇年十五萬噸の荷役を円滑ならしめ大型漁船五十隻の繫留を可能ならしめてゐる。
尙漁港の陸上設備は町水産會に於て之を施行し、冷凍施設あり。

第四章 淡水港

淡水港は臺北市を距る西北方二十二軒、淡水河々口にあり、東に大屯山、西に觀音山が相呼應して聳立し、港口は西北に展開して一葦帶水支那福州と相對し、港内は流勢によつて變化するも其の水深は干潮面下三米乃至八米、干満の差二米五〇である。臺北市の大市場を控へ對支我克貿易に期待せらるゝ。

第一節 船舶

一、最近三年入港船舶隻數噸數

區分	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
外航船	二〇六隻	三五,三二二噸	四二隻	四三,九九三噸	九隻	一〇,五四六噸
内航船	四七隻	八三,八七三噸	九七隻	七一,八三三噸	二八隻	五四,九〇八噸
計	二五三隻	一三九,一九四噸	一三九隻	一二五,四一四噸	三七隻	六五,四五四噸

二、繫船岸壁繫留船と沖懸船との割合

總て岸壁繫留

三、定期船

現在のところなし。

第二節 貨物

一、最近三年貿易貨物噸量價額

區分	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額
外國貿易輸出	八五五噸	二六,五九二円	一〇〇噸	四,九四四円	—噸	—円
外國貿易輸入	四三,一四九噸	一,六一七,四六二円	三三,一二六噸	一,九四六,四〇九円	九,三三九噸	七四八,三九五円
計	四四,〇〇四噸	一,六四四,〇五四円	三三,二二六噸	一,九五一,三五三円	九,三三九噸	七四八,三九五円

内國貿易	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額
計	七四,四七三噸	一,六五六,四四四円	六八,七〇六噸	二,〇一〇,五五六円	五四,五六五噸	二,一五三,四五三円
合計	一一八,四七七噸	三,三〇〇,四九八円	一〇〇,九三三噸	三,九七二,八八九円	六三,九〇四噸	二,九〇一,八〇八円

二、船積外國貨物仕向地別數量價額 (略)

三、船卸外國貨物仕向地別數量價額 (略)

四、貨物港灣諸掛費

外國貨物 一噸 一・〇〇(礦油類)

内國貨物 一・八〇(木材)

第三節 淡水港より主要港灣に至る距離

基隆	三五哩	廈門	一八一哩	門司	七八七哩
福州	一〇九哩	神戸	九六五哩	仙頭	二六九哩

第四節 港灣設備

在來の繫船岸壁二七八間及棧橋二二間あり。

第五章 梧棲港

本港は大甲溪及大肚溪口の中に位し、沿岸一帯は茫漠たる淺洲である。干満の差五米五〇、現在對岸との交易なし。近く新高港として登場の筈である。

第六章 安平港

安平港は臺南市の中央より距る西一里八町臺灣海峡に臨み歴史的港灣として名あり。蘭人の本島を占據せし頃は此處に「セイランヂヤ城」を築きて政廳を置けり、當時は海水深く灣入して改隸前までは北部淡水港と共に本島南北の二大開港場であつた。現在大船は海上二湮沖に投錨し貨物の運搬上不便不尠も三十五町の臺南運河によりて中央市場に連絡してゐる干満の差一米五七である。

第一節 船舶

一、最近三年入港船舶隻數噸數

區分	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
外航船	三隻	四、三五〇噸	五隻	九、七九三噸	一隻	—噸
内航船	三八三	九三三、三九〇	三一九	七五九、七一四	二六八	六六六、〇七七
計	三八五	九二七、七四〇	三三四	七六九、五〇六	二六八	六六六、〇七七

二、本港は全部沖懸船で定期船なし。

第二節 貨物

一、最近三年貿易貨物數量、價額

區分	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
外國貿易輸出	九、四八五噸	三、七七一、四〇〇円	九、七〇〇噸	三、〇三三、〇二二円	一三、二二二噸	五、一三三、七八四円
外國貿易輸入	一、二〇一噸	六、三七、八八四円	八〇五噸	九、九四、九三〇円	—噸	—円
内國貿易移出	一〇、六八六噸	九、九五、〇〇四円	一〇、五〇五噸	一、三三、五二二円	—噸	—円
内國貿易移入	九九、四三〇噸	一、三三三、七六五円	四九、四二七噸	一、八三三、五〇五円	四六、七〇五噸	一、五七、九三三円
合計	一四五、〇〇一噸	一九、五三二、三九四円	一四六、四三五噸	一九、八四二、〇一〇円	—噸	—円

輸入噸量、高雄揚不詳

二、最近三年移出品名別數量價額 (略)

三、最近三年移入品各別數量價額 (略)

四、貨物港灣諸掛費一噸當

貨物種類	船積卸	運河使用料	計
普通貨物	二・三〇円	〇・二五円	二・五五円
木貨物	二・四〇円	〇・二〇円	二・六〇円
重量貨物	二・六〇円	〇・二五円	二・八五円
カイバイト	二・七〇円	〇・二五円	二・九五円

第三節 安平港より主要港灣に至る距離

基隆 三三〇軒 高雄 四二軒

第四節 港灣設備

明治三十六年八月未曾有の大洪水ありて曾文溪氾濫、安平港内の滯筋埋没の爲我克船の運航全く不可能となつたので、明治四十年浚渫船成功丸を七萬二千五百圓を以つて建造し、同年から大正九年まで工費二十九萬餘圓を以つて二十九萬餘立方米を浚渫すると同時に税關前面の地域の埋立をなした。

臺南運河は全長三千七百八十二米で、敷幅七十三米の間を上幅三十六米、廣幅二十七米水深干潮面下一米八、在來地盤から二米四に掘鑿したもので、其の南側には干潮面上三米の高さの堤防を築き、其の臺南安平道に接続せる所に二萬一千八百八平方米の安平船溜を築造し、其の北岸に沿ひ延長四百五十五米の石垣を築造して我克船、小蒸汽船、發動船の碇繋に便ならしめた。運河の終端には水面積八萬一千七百二平方米水深一米八乃至二米四の臺南船溜を掘鑿し、其の東岸に沿ひ延長三千二百七十三米の石垣を築造し我克船、小蒸汽船、發動船等の碇繋を容易ならしめてゐる。又船溜に沿ひ九萬餘平米の荷揚場を埋立及繫船設備を爲すと共に貨物保管倉庫三棟を建設した。この工費總額七十萬餘圓である。

現在の海運は支那型船は其の儘港口から運河に入り安平船溜又は臺南船溜に於て荷役をなし、錨地に碇泊する汽船積卸の貨物は小蒸汽船に曳かれた舢舨船によつて運河を経て船溜に出入するのである。使用舢舨(ジャンク)三七隻あり。

第七章 特別輸出入港

臺灣の特別輸出入港に後龍、鹿港、東石の三港がある。

後龍港 新竹州後龍溪の溪口にある。滿潮時には四、五十噸の船舶は容易に出入することが出来る。對岸厦門、泉州、福州、汕頭、温州などの間に交易が行はれてゐる。

昭和十二年の外國貿易額六萬七千圓である。

(昭和十三年皆無)

鹿港 臺中州彰化市の西方十二軒、鹿港溪と濁水溪派流の合流して海に注ぐ處に位する。碇泊場は市街を距る西方六軒對支貿易港として命脈を維持してゐる。

昭和十二年外國貿易額一萬五千五百圓である。

(昭和十三年皆無)

東石港 東石港は臺南州にあり、往昔猴樹港と稱せられ朴子溪の河口の北岸に位する。現在は僅かに支那對岸地方及澎湖安平方面との間に交易が行はれてゐる。昭和十二年の外國貿易額は一萬二千六百圓である。

(昭和十三年皆無)

第八章 漁港

臺灣の漁港に東部の蘇澳、新港兩港及南部の海口港の三港がある。

蘇澳港 臺北州の東海岸にあり、西、北及南の三面は山岳を以つて包擁せられ、東は太平洋に面してゐる。灣内廣く東西二百米、南北二千六百米で、南方澳及北方澳の二小灣に分れてゐる。三、四千噸級汽船の碇泊に適し、臺灣東海岸の良港である。國費六十六萬餘圓を以つて南方澳の平地三萬三千平方メートルを買収し丁字型七萬六千平方メートルの水面積を水深一米乃至二米七に掘鑿浚渫したる漁港を有する。十二月より四月迄の漁期には百隻以上の漁船輻輳し、附近沿岸漁業の根據地である。最近二ヶ年の貿易額左の如くである。

昭和十二年	移出	移入	五一、四八〇圓
昭和十三年	移出	移入	三二六、〇二五圓

新港 臺東廳下に在り東部沿岸の殆ど中央に位する。港口は南に開き水深二米四乃至四米で、港の北東五十四米に亘り

岩石が海中に突出して自然の防波堤をなしてゐる。七十五萬圓を以つて施設したる漁港で、昭和十二年の貿易額は六十三萬圓である。

海口港、本港は臺灣南端に近き高雄州恒春郡の一小濱で楓港の南約二十軒の位置にある。港口は西に面し、海口の西南には車城角突出して、北方の尖山と相對して灣口をなしてゐる。港口は幅約百九米、港口から百米の沖合は水深二米内外で比較的波浪が静かである。

現在の設備は錨地水深一・八米、面積二四、七九〇平米、防波堤三三二米、防砂堤三一八米、護岸石垣三四〇米などで、漁船其の他の寄港避難に多大の利便を與へてゐる。

第八編 臺灣出入物資の交通路と主なる市場(都市)の瞥見

第一章 臺灣交流物資の大要

第一節 臺灣生産物資

臺灣生産物資は第一編第二章に述べたるが如く、昭和十二年中の生産總額(鑛産を除く)は左の通り、八億三千餘萬圓である。

一人當	一五〇圓弱		
農産	四〇二、九九五、八一五圓	工産	三六〇、一四七、二四六圓
林産	一六、六六四、五九〇圓	水産	二一、三八二、四〇七圓
其他	三六、二二三、一五四圓	計	八三七、四一三、二二二圓

更に之が噸量を推定すれば甘蔗九五〇萬噸、甘藷二〇〇萬噸、米一五〇萬噸、其の他の農産物一〇〇萬噸、水産物四〇萬噸、林産物二〇萬噸、砂糖一五〇萬噸、其の他の工産五〇萬噸合計約千六、七百萬噸(鑛産を加ふれば大約二千萬噸)と見らるゝ。而して噸量の大宗甘蔗は各製糖會社私設鐵道により悉く所屬工場に輸送せられ、甘藷も多く農家用であるが故に公共運輸機關を利用するものは、これら甘蔗、甘藷其の他隣保自家用農作物などを差引たる各種の生産物資及生産に要する肥料原料などである。

第二節 臺灣出入物資

臺灣出入物資は多く基隆及高雄の兩港を經由し、その總貿易は第三編に述べたるが如く、既往五ヶ年の貿易額は左の如く昭和九年の五億二千萬圓より昭和十三年の八億二千三百萬圓に増加してゐる。

年	輸移出	輸移入	計
昭和九年	三〇五、九二六、六八〇 ^四	二二五、〇三三、七〇二 ^四	五三〇、九六〇、三八二 ^四
同十年	三五〇、七四四、六七三	二六三、一九七、七四六	六一三、八六四、四一九
同十一年	三八七、九四八、九七八	二九三、六八五、九四八	六八〇、六三四、九二六
同十二年	四四〇、一六九、九九五	三三三、一三三、七四三	七六三、三〇三、七三七
同十三年	四五六、四三三、八三七	三六六、六五九、一九三	八二三、一〇九、〇二九
計	四三九、二八五噸	四五八、四七九噸	八九七、七六四噸
輸出	四三九、二八五噸	計	五、四八四、五七一噸
移出	三、四七五、五三七噸	移入	二、〇〇九、〇三四噸
輸移出	三、九一四、八二二噸	輸移入	二、四六七、五一三噸
計	六、三八二、三三五噸	計	六、三八二、三三五噸
合計	六、三八二、三三五噸	合計	六、三八二、三三五噸

更に昭和十三年の噸量を見るに合計六百三十八萬餘噸にして、その輸移出入別に見れば左の如くである。
 輸出 四三九、二八五噸 輸入 四五八、四七九噸 計 八九七、七六四噸
 移出 三、四七五、五三七噸 移入 二、〇〇九、〇三四噸 計 五、四八四、五七一噸
 輸移出 三、九一四、八二二噸 輸移入 二、四六七、五一三噸 合計 六、三八二、三三五噸
 而して基隆、高雄兩港の占むる地位は外國貿易八七五、九八三噸、内國貿易五、〇九〇、五七七噸計五、九六六、五六〇噸にして、臺灣全島交通物資即ち總貿易噸量に對し外國貿易は九七%強、内國貿易は九三%、總貿易に於て九三%強となる。

第三節 臺灣鐵道輸送貨物

臺灣鐵道は前に述べたるが如く、官設鐵道合計八七九千九である。
 縱貫線 四〇五・九 宜蘭線 九八・八 平溪線 一一・九
 淡水線 二二・四 臺中線 九一・四 集々線 二九・七
 潮州線 四七・〇 臺東線 一七一・八
 而して最近五ヶ年の貨物輸送噸量は左の如く、昭和九年の五百七十萬噸より逐年増加、昭和十三年八百三十萬噸となる。

昭和九年 五、七〇六、一二七噸 同十年 六、二五九、六四八噸
 同十一年 七、一一一、六九〇噸 同十二年 七、二四九、二三五噸
 同十三年 八、三〇一、三二三噸
 更に昭和十二年中の輸送貨物噸量を臺灣西部(本線) 東部(臺東線) に大別すれば左の如く、西部臺灣は全量の九五%を示してゐる。
 本線(縱貫線外六線) 六、八七七、九六三噸 九五%弱
 臺東線 三七一、二七二噸 五%強

第二章 中央縱貫鐵道と基隆、高雄兩港

第一節 西部臺灣の土地、人口並産業

臺北、新竹、臺中、臺南、高雄の五州所謂西部臺灣は夙に開けたる帝國の豊庫である。
 西部臺灣の土地は臺灣全島三百七十萬甲中二百八十五萬餘甲にして七七%に當る。
 西部臺灣の人口は臺灣全島五百六十萬九千四十二人中花蓮港廳外二廳下二十七萬六千六百六十七人(花蓮港廳二二四、〇六四人、臺東廳七七、八四二人、澎湖廳六八、七六一人)を差引きたる五百三十三萬八千三百七十五人にして、全島の九五%強を占む。而して産業に於ては臺灣全島八億三千七百四十餘萬圓中前記三廳下三千三百餘萬圓(臺東廳七七六萬圓、花蓮港廳二、三六二萬圓、澎湖廳約二〇〇萬圓)を差引たる八億三百餘萬圓、即ち實に全島の九六%を占めてゐる。

第二節 西部臺灣の鐵道

西部臺灣の鐵道は前に述べたる本線にして縱貫線、宜蘭線、淡水線、平溪線、臺中線、集々線及潮州線の七線七〇八軒で、全線延長の八割を示し、昭和十二年の運輸貨物は全線總量の九五%を占めてゐる。

而して左に之を各線別に見れば。

線別	營業料	貨物		計數	百分比
		下り	上り		
縱貫線	四〇五・九	二、七五、九三四、一	二、六九八、八四二、七	五、四四、七六六、八	六三
宜蘭線	九八・八	三三三、三七六、二	八〇三、三三〇、〇	一、一三六、五七七、二	一三
平溪線	二二・九	一七、七五八、四	二〇五、〇八一、四	三三三、八三九、八	三
淡水線	三二・六	七八、六三二、七	一七八、五五、一	二五七、一五八、八	三
臺中線	九一・四	三三九、八三三、七	三三三、九〇、五	六七三、八三三、二	八
集州線	二九・七	四八、九九六、八	八四、九六六、〇	一三三、九六二、八	一〇
潮州線	四七・〇	三三四、七九二、〇	五九九、〇四七、六	九三三、八三九、六	一〇
計	二〇二・三	三、八一九、三二二、九	四、八七三、六三四、三	八、六九二、九五六、一	100

備考 本集計が前章本線の噸數より多く符合せざるは重複掲記の故なるべし。

即ち縱貫線(臺中線を加へて)、潮州線、宜蘭線の三直通線は輸送貨物總量の九二%を示し、培養線たる平溪線、淡水線集々線の三線は八%となつてゐる。

第三節 中央縱貫鐵道と基隆、高雄兩港

一、鐵道關係より見たる基隆、高雄兩港

臺灣西部の鐵道、即ち前に述べたる所謂本線は縱貫線(臺中線を含む)外六線にして、内縱貫線、宜蘭線、潮州線の三直線中宜蘭線は基隆港へ、潮州線は高雄港の背域に屬し、培養三線中平溪、淡水兩線は基隆港へ、集々線は高雄港の背景

に配屬せらるゝ。而して最大動脈たる縱貫線(臺中線共)に由る貨物が基隆、高雄兩港に争奪せられ、或は北流して基隆港へ、或は南流して高雄港に朝する。基隆、高雄間の距離は四〇四軒にして、鐵道に沿へる主なる市場(都市)迄の軒程は左の如く臺中州が里程上の分水嶺である。

基隆より臺北 二八・六……………新竹 一〇六・七……………臺中 一九七・四
 高雄より臺南 四六・五……………臺南 四六・五……………嘉義 一〇八・〇……………

…彰化(臺中州) 一八九・〇……………臺中 二〇六・六

驛名	到着	發送	計	驛名	到着	發送	計
高雄	八二、四四六	一、五〇一、九七七	二、三二四、四二三	新營	一七四、八三八	一四四、六六六	三一九、五三四
基隆	七七一、〇〇	一、八四五、七五五	二、六六六、八七五	員林	一一六、六〇八	一〇一、四八九	二一九、〇九七
臺北	五九、〇〇	二〇九、三二二	二六八、三二二	斗南	二〇二、八四四	一三三、七九一	三三七、〇三五
臺中	一四八、七五四	一四九、四〇七	二九八、一六二	田中	九五、一三一	六六、七七六	一六一、九〇七
嘉義	一九〇、八〇九	一九五、二六〇	三八六、〇六九	瑞芳	一七六、二二二	四二、四〇〇	二一〇、六二二
臺南	二二、一五三	一八一、五九六	三九三、七四九	番子田	九四、七九四	五六、五三三	一五一、三二六
屏東	二二、二五九	一五、九〇九	三八、一六八	萬華	一〇〇、六二九	七、五三三	一〇八、一六二
鶯歌	二二、四三九	一五、九〇九	三八、一六八	彰化	九、三三三	二二、三三四	三一、六七七
新竹	八五、四三五	一〇〇、〇一五	一八五、四五〇				

更に主要貨物最高取扱驛を見るに左の如く石炭、米、木材、セメント、バナ、は基隆驛にして、砂糖、肥料、糖蜜、乾

甘藷、鮮魚は高雄驛である。

主要貨物最高取扱驛 (昭和十三年度)

品名	驛名	發送	到着	計	品名	驛名	發送	到着	計
石炭	高雄	五、〇九五	九四七、八二四	九五二、九〇九	甘蔗	池上	二二、九八三	三三九	二二、三二二
砂糖	高雄	四、八七九	七八七、四六一	七九二、三四〇	バナ	基隆	—	八五、四八三	八五、四八三
米	高雄	二、二〇九	四四七、三四三	四四九、五五二	糖蜜	高雄	五、五三八	五五、二七八	六〇、八〇六
肥料	高雄	三七五、〇〇九	三四六	三七五、三五五	煉瓦	三塊昔	七、一八五	二〇	三七、二〇五
木材	高雄	五五、六〇六	二七、五五一	八三、一五七	乾甘藷	高雄	二三四	六二、七八〇	六二、九〇四
セメント	高雄	一〇八、〇一一	一五	一〇八、〇二七	鮮魚	高雄	二五、七三三	四、二四三	二九、九七六
砂、砂利	西勢	五八、七九四	七、〇〇〇	六五、七九四					

二、土地人口、生産物資より見たる基隆高雄兩港

地理的より見るときは臺中州が基隆、高雄兩港の共同背域なるが故に仮りに臺中州を兩港に折半して見れば、先づ土地人口に於て左の如く土地は四六對五四、人口は四七對五三にして、何れも基隆港より高雄港大である。

臺中州 新竹州	基隆港背域		高雄港背域	
	土地	人口	土地	人口
	四七、一七五	一、一〇一、八八六	五八、九六二	一、四三三、八四四
	四七、一七五	七六六、四二五	五八、九六二	七九五、七三五

臺中州	計	兩港百分比	臺中州	計	兩港百分比
三、〇、五九六	六五、七五六	四六%	三、〇、五九六	六五、七五六	五三%
一、三三、四四四	二、四九、〇六九	四七%	一、五二、四九〇	二、八四四、三〇五	五三%

次に生産物資(臺北、新竹の鑛産を含む)は約九億四千二百餘萬圓にして全島中最も大なる生産物資を領する臺南州を背域とする高雄港は土地人口より遙に優位にして、基隆港の四〇%に對し六〇%を示してゐる。即ち左の如し。

基隆港背域生産額		高雄港背域生産額	
臺北州	一五六、八三八、〇〇〇圓	臺南州	二八五、九三三、六五七圓
新竹州	一〇〇、〇六一、五七二圓	高雄州	一六〇、八二七、八三七圓
臺中州	一一九、五七八、九九七圓	臺中州	一一九、五七八、九九七圓
計	三七六、四七八、五六九圓	計	五六六、三四〇、四九一圓
兩港百分比	四〇%	兩港百分比	六〇%

三、貿易上より見たる基隆、高雄兩港

臺灣全島の對外貿易は既に述べたるが如く、昭和十三年八億三千萬圓にして、内基隆、高雄兩港に於て其の九六%を占め、基隆港は外國貿易は輸出に於て、内國貿易は移入に於て覇をなし、高雄港は外國貿易は輸入に於て、内國貿易は移出に於て嶄然重きをなしてゐる。而して雨期の關係上前半年度は基隆港の黄金期にして、下半年度は高雄港の書入れ時である。

既往三ヶ年の兩港貿易状況を對比するに左の如く、噸量は基隆五三對高雄四七より五二對四八となり、價額は基隆五五對高雄四五より五一對四九となりて最近殆ど伯仲し、廣大なる背域を領する高雄港の前途洋々たるを示唆してゐる。

年次	基隆		計	高雄		計
	外國貿易	內國貿易		外國貿易	內國貿易	
昭和十一年	五、四、七九	二、一、九七	七、六、七六	三、八、二八	二、〇、六九	五、八、九七
同十二年	五、四、一三	二、四、二一	七、八、三四	三、五、四九	二、三、三六	五、八、八五
同十三年	四、〇、二五	二、六、四一	六、六、六六	四、三、二八	二、四、五七	九、〇、八五
			百分比			百分比
			五三%			四七%

年次	基隆		計	高雄		計
	外國貿易	內國貿易		外國貿易	內國貿易	
昭和十一年	四、九、四三	三、〇、六九	八、〇、一三	二、九、二七	二、六、七〇	五、五、九七
同十二年	四、一、五〇	三、三、二八	七、四、七八	二、八、九一	三、三、〇六	一〇、七、八四
同十三年	三、〇、二二	三、六、八四	六、六、〇六	三、八、二六	三、四、〇五	一〇、〇、三一
			百分比			百分比
			五五%			四五%

第三章 臺東線と花蓮港

花蓮港は最近第一期港灣修築工事を完成し昭和十四年十月新に開港に指定せられたる港灣である。現在臺東港の背域をも加へたる東部臺灣、即ち花蓮港廳下に臺東廳下を併せたる土地、人口産業左の通りにして、基隆、高雄兩港の背域に對

比し人口、産業は極めて微々たる存在なるも、花蓮港の港灣構成要件については後章花蓮港市場の項に詳細する通り前途頗る有望にして、臺東線の利用活躍と花蓮港發展の將來は蓋し刮目に價すべく思料せらる。

項目	土地		人口		生産額
	面積	人口	人口	人口	
花蓮港廳	四七七、二一三	一、二四、〇六四	一、二四、〇六四	一、二四、〇六四	二、三、二六五、九五二
臺東廳	三二六、四二八	七、七、八四二	七、七、八四二	七、七、八四二	八、九三九、五八一
計	八〇三、六四一	二〇一、九〇六	二〇一、九〇六	二〇一、九〇六	三、二、二〇五、五三三

備考 生産額は昭和十三年中。

第四章 臺灣主要市場(都市)の瞥見

第一節 西部臺灣市場

明治二十八年領臺以來臺灣産業政策は根幹を農業に置き併せて農作物を基礎とする製糖、製茶工業の振興に専ら力を注いだ爲他種工業は自然の伸張に委せられて來た。實に本島の産業の發達は政府育成に俟つ所極めて大であり、西部臺灣の如きは内地以上に井然たる開拓を見たのである。生産品の需給關係も概ね政府によりて企劃支配せられ、生産品は大市場に於て集散するにあらずして生産各地より直接島内、島外に分布せらるゝ現狀である。従つて大阪の如き大市場を現出することなく、各種物資の生産地が生産市場であり、消費地である。

島内最大都市臺北市は、島内中央機關の所在地として大をなし、之に次ぐ臺南市は最大生産州の地方廳所在地及安平港によりて今日の繁榮をなしてゐる。高雄市は港灣と州廳所在地と生産地を兼ねて第三位。臺中市は大生産地たる臺中州にありながら、臺中線に沿ひ且基隆、高雄兩港の分水嶺に在りて彰化其の他の市場を分派して小京都として清楚である。以

下基隆、嘉義、新竹、屏東各市それ／＼異りたる使命によりて發展途上にある。

○ 臺北市場

臺北市は臺北平野の中央に位し、臺灣總督府の所在地として全臺灣の首都である。尙臺北州廳の所在地でもあり、臺灣に於ける文化經濟の中心地である。

一、臺北市の土地、人口

廣袤東西二里八町、南北二里十二町面積四、二一八甲で、昭和十二年末の戸數六七、〇八七、人口三〇二、六五四人である。(臺北州の人口一、一〇一、八九八人)

二、臺北市の産業經濟

臺北市生産總額は昭和十三年中左の通り五千八百四十六萬圓にして、工産頭抜けて多く、畜産、農産の順である。(昭和十二年臺北州生産額一五、六八三萬圓)

農産物	二、五三六、八〇八圓	畜産物	七、六七八、四二二圓
水産物	三一、八七二圓	鑛産物	七四二、九三〇圓
林産物	一五、五七一圓	工産物	四七、四六〇、〇二九圓
計	五八、四六五、六三一圓		

限られたる本市區域内に於て居住地域と最も關係乏しい林産、水産、鑛産は見るべきものなく、農産は蔬菜、果樹で、是等生産地、即ち園藝用地は全地區の六割を占め、畜産は屠畜によりて共に重要部門に屬してゐる。

生産の大宗たる工業は煙草、樟腦等の専賣品工業及粗摺精米、製茶業等の食料品工業によりて大をなし、其の他の工業は微々たるものである。

臺北市は消費都市として全島に冠絶してゐる。臺北市に於て經營する「市場」は中央卸市場、家畜市場及之と連絡する市營小賣市場である。

(一) 中央卸賣市場

昭和四年五十萬圓の經費を投じて設立したもので魚部、青物部、雜部に分れ、別に冷蔵部を附屬せしめてゐる。

市場制度は絶對單數制で各部共市が直接委託を受けて販賣して居り、内地の如き業務の全部を引受くる所謂代行機關は存在してゐない。唯冷蔵、製氷及代金決済事務の全部並に其の他二三の点に關して各一部の業務を中央市場株式會社に分担、代行せしめてゐるが、然し之は製氷、冷蔵業務以外單に内部的の關係で荷主其の他第三者に對しては市が總て責任を負ふものであり、又其の責任を遂行するに支障なき内部組織を有せしめてゐるのである。此の外に青物荷受組合があり、青物託送品の荷受業務を取扱つて居るが、之も市と組合との内部關係であつて荷主其の他第三者に對する責任の分割を伴ふものではない。

魚部は手數料八分、糶に依る競賣で仲買人は現在七十三名である。

青物部及雜部は孰れも地元品五分、託送品八分で魚部と同じく糶賣であるが、地元生産者中には未だ糶賣を理解する者少き爲希望者に限り糶に附せず生産者自から販賣し得る制度を認めてゐる。

昭和十二年中央卸賣市場の取引高は

魚部一七五萬圓、青物部百一萬圓、雜部を加へて二百八十八萬圓である。

(二) 家畜市場

大正九年の地方制度改正に依り屠場は州の所管となり、家畜市場は臺北市に移管された。

臺北市が業務を開始したのは大正十年四月である。市自ら委託販賣の衝に當り、中央卸市場と同様代金決済其の他二三の点につき昭和家畜株式會社をして内部的に代行せしめてゐる。本市場の取扱品目は牛、馬、豚、羊等であるが、現在は生豚のみ取扱ひ手數料は三分、仲買人は現在六十一名である。昭和十二年の取引高は二、四七四頭三百三萬圓である。

(三) 小賣市場

小賣市場は西門町市場、永樂町市場、千歲町市場、御成町市場、新富町市場の五市場と私設の小賣市場五あり、代表的ものは西門町市場及永樂町市場の二である。

1、西門町市場

内地人向の代表的市場である。大正九年地方制度改正に伴ひ臺北州より臺北市に移管されたものであつて敷地廣く共

の整備せられたる点は全島第一である。本館、八角堂、外店舗より成り本館は生鮮食品料を八角堂及外店舗は日常雜貨類を夫々販賣してゐる。

2、永樂町市場

近來頗る勃興しつゝある商業大稻埕の中心地を占め本島人向の市場として全島に普く知られてゐる。西門町市場と共に臺北市に移管されたもので、本市場の利用者は現在一日の出入二萬人に達する。賣店數も亦百八十を數へ本島人向の食料品、飯食物、藥草、古物、陶器、衣類等あらゆるものとして販賣せられざるものなく、本島大衆生活の片鱗がこの市場を通じて窺知されるのである。

昭和十一年中市營市場の賣上高は西門町市場百十三萬圓、永樂町市場百八十二萬圓、其の他の三市場を併せて三百五十萬圓である。

三、臺北市場と淡水港

臺北市場は現在二九籽を距る基隆港に依存してゐる。然し臺北市は間近く豊富なる炭田を有し外地産原料に依る近代工業勃興に極めて有利の條件を具有する。而して淡水港は臺北市を距る二一籽淡水河口にあり大陸に近接し、臺北市との關係は恰も塘沽又は太沽と白河に依る天津港との關係に酷似してゐる。淡水港及淡水河に少しく近代河川運輸整備を施せば臺北市は文化消費都市たると共に更に工業經濟都市として其の大をなすであらう。

○ 基隆市場

基隆市は縦貫線及宜蘭の起点にして臺灣の門戸たる基隆港を擁し、三面は山岳、丘陵で平野は丘陵の間を海濱に沿ひ細長く展開してゐる。

一、基隆市の土地、人口

廣袤は東西七籽四八一、南北五籽四五九、面積四六平方籽八七六で昭和十三年末戸數二一、二八〇、人口九五、三五四人である。

二、基隆市の産業經濟

基隆市の存在は港灣にあるが、曩に日月潭水電工事竣功により臨港地帯に化學工業の勃興を見つゝあり。昭和十三年生産總額は三千九百萬圓にして工産その六割を占めて二千五百十二萬圓、鑛産六百八十二萬圓、水産四百八十八萬圓の順である。

農 産	二二四、九〇五圓	畜 産	一、二六六、九〇〇圓
林 産	三八、六七〇圓	水 産	四、八八七、七一圓
鑛 産	六、八二二、一一八圓	工 産	二五、八二八、二四六圓
計	三九、〇五八、五五〇圓		

水産業は本市が本邦屈指の大漁場に近く南方高雄と共に臺灣水産業の双壁である。

工業は精米第一にして臺灣肥料株式會社の合成肥料、臺灣電化の硅素鐵、海南製粉の製粉などが重なるものである。

臺灣北部一帯は古くより、石炭、金、銅の産出あり、多くの鑛業企業は此處に密集し鑛業地帯を形成してゐる。特に本市附近よりの産炭高は全島の約九割を占め、其の三割は本市産出である。

當市の市場は卸市場四、小賣市場四で左の如くである。

(一) 卸 市 場

臺北水産會基隆魚市場

同 上 基隆珊瑚市場

基隆市中央卸賣市場(基隆中央市場株式會社代行)

同 上 家畜市場

昭和十二年中取扱高は中央市場三二五、四七五圓、家畜市場九三六、三七三圓、魚市場一、一一八、六四七圓、珊瑚市場二三九、八四二圓計二、六二〇、三三七圓である。

(二) 小 賣 市 場

公設市場福德市場、同富貴市場及同幸町市場は市營で外に濱町市場がある。賣上高は福德市場八四萬圓、富貴市場一

五萬圓、幸町市場五萬圓、之に濱町市場分を併せて百五萬餘圓である。
基隆市は由來港灣都市として急速な發展を遂げたるが爲消費部門は生産を越へて活潑で物品販賣業相當多きも、其の多くは弱小經營に係る所謂中小業者に屬し、多くの困難に直面してゐる。その根本的理由として長期間に亘る降雨、顧客の固定、一般物價の高率等があげられてゐる。

○新竹市場

新竹市は新竹州廳の所在地、近年市の近郊竹東、竹南方面に天然瓦斯の發掘を見、各種産業勃興の氣運にある。

一、新竹市の土地戸口

新竹市面積は二方里餘三、二八〇里で、昭和十二年末の戸數二一、二三四、人口五六、三七六人である。(新竹州七六六、四一五人)

二、新竹市の産業經濟

新竹市の昭和十二年生産額は左の通り七百五十萬圓にして農産、工産何れも三百萬圓臺である。(新竹州生産額一〇〇、〇六一、五七六圓)

農産	三、三五九、一二四圓	工産	三、五四七、四五三圓
畜産	六〇〇、〇〇〇圓	計	七、五〇六、五七七圓

農産は果樹、米最も多く甘蔗、粗製茶などあり、工産は砂糖一四九萬圓を第一とし、蒲草紙一三四萬圓、木竹籐細工二五萬圓、以下白粉、帽子などあり。蒲草紙は蒲草と稱する臺灣北、中部蕃地に野生する灌木で、蒲草紙は此の樹を適當の長さに切り、更に螺旋狀に截りのばして薄片としたもので、當市大和纖維株式會社工場産、遊花用として海外にも輸移
出されてゐる。木竹籐細工並バナナ帽は當地獨特の氣品ありて名あり。

次に當市の市場は卸市場一、家畜市場一、消費市場四あり、賣上高は消費市場百十萬四千圓、卸市場十八萬圓、家畜市場六十三萬圓計百九十一萬四千圓である。

○臺中市場

臺中市は臺中州廳の所在地本島の中央に位し、東中央山脈と西大肚の丘陵とはさまれたる臺中平野にあり、氣候適順にして山翠く水清く市街は鐵道線路により略東西の兩部に分れ、線路以東は工業區として囑目せられ、線路以西の市街地は綠川、柳川の二川に八橋を架け街區整然「小京都」の稱がある。

一、臺中市の土地、戸口

臺中市は東西一里二十九町、南北一里十七町、面積一方里三八七七にして、昭和十二年末の戸數一六、八二四、人口七六、五九二人である。(臺中州の人口一、二五一、五一三人)

二、臺中市の産業經濟

昭和十三年臺中市の總生産額は二千五百二十二萬圓、工産大部である。(昭和十二年臺中州生産額 二三九、一五七、九九五圓)

農産	一、四一八、八九一圓	工産	二二、六〇〇、〇〇〇圓
畜産	一、一〇二、五七七圓	計	二五、二二一、四六八圓

工業は製糖業の六百二十萬圓、酒精工業百八十萬圓、靱摺業三百七十萬圓、精米業百七十萬圓を主とし、製氷業、菓子類製作、鐵工業、木竹製品製造業などである。

農産は米を第一とし蔬菜、果實、畜産は豚が主である。

臺中市の市場に卸市場青物部、卸市場魚介部、家畜市場本場、同分場、及消費市場(五ヶ所)あり。

卸市場青物部は臺中市營にして補助機關として臺中果菜荷受組合がある。手数料六分。

卸市場魚介部は臺中市市營、手数料六分。

家畜市場本場は卸市場同様の市の直營にして屠肉を目的とする豚、牛、羊のみを取扱ふ。使用料豚三分、牛一頭五十錢、山羊は一頭十錢。

家畜市場分場は仔豚及屠肉を目的とせざる成育豚を取扱ひ、賣買成立の際一頭につき使用料十錢を徴收する。
昭和十二年度の卸賣市場及家畜市場取扱高は百九十萬圓にして、即ち左の如くである。

魚介部	五一〇、三二一圓	青物部	三九二、六八六圓
家畜市場	八七六、六一五圓	仔豚分場	一二二、四〇六圓

計 一九〇二、〇一八圓

消費市場は市營にして榮町消費市場、新富町消費市場、敷島町消費市場、干城町消費市場及旭町消費市場の五である。賣上高は二百一十一萬四千六百圓にして鳥獸肉、魚介、雜貨、蔬菜、などの順で、各市場別は左の如くである。

榮町	一、〇五六、四四八圓	新富町	七五二、八〇〇圓
敷島町	二、〇〇六、八三七圓	干城町	八二、六一八圓
旭町	一五、九〇六圓	計	二、一一四、六〇九圓

尙市内に臺中芭蕉検査所あり。臺中州青果同業組合の管理に屬し、州下及本島の重要移輸出品たる芭蕉實の生産改良及取引の改善發達を圖る爲、移輸出品の検査を行ひ共同出荷をなすものである。

從來市場組織にして糶賣なりし市場を大正十五年検査所に改めたるものにして、前身臺中市場當時は取扱高百六十五萬圓の記録を示し甚だ股賑を極めたるも、検査制度となるに及び生産各地に検査所を増設せるが爲昭和十三年は僅に一萬九千四百五十圓に過ぎざる状況で、臺中バナナ市場の名も過古に屬することゝなつた。

○嘉義市場

嘉義市は嘉義平野の略中央に位し、背後に丘崗を負ひ、前面には廣漠たる平野を控へ、附近一帶は甘蔗の栽培盛んである。鐵道は縱貫線の外東方に阿里山線、北西に大日本製糖會社線、南西に明治製糖會社線を分派し、所謂四通八達の地で阿里山森林事業並に地方糖業の中心地である。

一、嘉義市の土地戸口

嘉義市は東西三里九町、南北二里、面積三平方里六、二六四で、昭和十二年末の戸數 一六、五一八、人口八〇、二五二人である。

二、嘉義市の産業經濟

嘉義市昭和十二年の總生産額は九百七十六萬圓にして、工産を大宗とし左の如く工産七八六萬圓、農産一〇四萬圓、畜産八〇萬圓などである。

農産	一、〇四三、〇九九圓	林産	一九、五二〇圓
畜産	八〇〇、〇〇〇圓	水産	三八、二二二圓
工産	七、八六〇、六九六圓	計	九、七六一、五二七圓

農産は米、甘蔗、蔬菜、甘蔗の順で林産は主として竹材である。畜産は豚が主、工産は製材を第一とし精米之に次ぐ。市場は左の通り卸賣市場、家畜市場及東西兩消費市場である。その賣上高左の如く合計三百八十七萬九千餘圓である。

卸市場	五〇二、七四五圓
家畜市場	二二二、七九一圓
東消費市場	九〇二、五四三圓
西消費市場	一、〇八七、五五八圓
計	三、八七九、六一二圓

○臺南市場

臺南市は臺灣文化發祥の地、二層行溪と曾文溪との間に介在する臺南平野の略中央に位し、西は安平港によつて支那海に臨み、東は廣漠たる平野を隔て、遙に中央山脈を仰ぎ、南は近く高雄港を控へて本島第二の大都會で、市街は至る所綠樹に圍まれ、宛然「綠の都」を形成し四季翠滴の中に燎乱の香花点在南國情緒豊かである。

一、臺南市の土地戸口

土地四、五七九甲、昭和十三年末戸數二六、一四七、人口一二四、三五一一人である。(臺南州昭和十二年人口一、四二三、八一四人)

二、臺南市の産業經濟

臺南市の昭和十三年中の總生産額九百五十一萬三千餘圓にして工産を大宗とし水産之に次ぐ。(臺南州昭和十二年生産額二八五、九三三、六七五圓)

農産	六三四、一〇八圓	畜産	四八六、〇五六圓
水産	一、三〇五、四二一圓	工産	七、〇八七、九八三圓
計	九、五一三、五六八圓		

農産は米、蔬菜、甘蔗などにして畜産は豚が主である。水産は養殖大部を占め、工業は精米、織維工業などの外塩田七三二甲を有する臺灣製塩會社産の天日塩、及煎熬塩がある。安平港の貿易は二千二百萬圓にして出貨は約一割の二百八萬圓、入貨は九割強の二千百餘萬圓である。臺南市が大なる消費都市たるを物語り商況活潑である。

臺南市の市場は魚市場、青物市場、家畜市場及消費市場に分れ、市が直接經營し大要左の如く總取扱高六百三十七萬圓である。

魚市場	取扱高 八七〇、五八九圓
青物市場	補助機關として青果荷受組合あり。取扱高五四八、四四三圓
家畜市場	取扱高 一、二八八、八八九圓(豚を主とする)
消費市場	東、西、南門、明治、永樂、安平の六ヶ所取扱高三、六六四、四五三圓

○高雄市場

高雄市は北に高雄山を負ひ、南に旗後山聳立、相對峙して港口を扼し、旗後山から西南一帯は外洋に沿ふて砂濱蜿蜒として連り高雄港を抱いてある。

縦貫線の終点、潮州線の起点で南支南洋方面への交通上重要な地を占め、高雄州廳の所在地にして後方地帯は遠く拓けて廣大なる生産的大寶庫である。近時工業地帯造成進行中で將來の發展期して待つべきものがある。

一、高雄市の土地戸口

東西一里二九町、南北三里二町、面積三方里二七で昭和十二年末の戸數二二、五六六、人口一〇一、一七三人(昭和十四年六月末一一四、四五七人)である。(高雄州昭和十二年末人口七九五、七三五人)

二、高雄市の産業經濟

雄市の昭和十三年總生産額は四、千九百八十一萬圓にして工産額抜けて多く水産之に亞ぐ。(昭和十二年中高雄州生産額一六〇、八二七、八三七圓)

農産	一、八二四、二二六圓	畜産	一、七〇九、八九一圓
林産	五七二、五二七圓	水産	四、二二一、八一六圓
工産	四一、四八三、四二五圓	計	四九、八一、八八五圓

農産は米が大部で、畜産は豚を主として家禽之に亞ぐ。林産は石灰石を主とし、工産は金屬工業最も多く、化學工業之に亞いでゐる。

貿易は出貨多く、出貨は米、砂糖、糖蜜、バナ、鳳梨罐詰など主なるもので、入貨は肥料最も多い。高雄市の市場は市經營に係る中央卸賣市場、家畜市場及小賣市場(八ヶ所)に分れ、その昭和十二年の取扱高左記の通り合計三百七十二萬餘圓である。

中央卸賣市場	五四四、五六一圓 (青物が主である)
家畜市場	六二六、五八八圓 (豚)
小賣市場	二、五五五、九一二圓
内譯	
湊町小賣市場	三七四、四九三圓
塩埕町小賣市場	一、五八七、九九八圓
苓雅寮小賣市場	一四四、五九一圓
内惟小賣市場	三三二、七八二圓
旗後小賣市場	二四九、八〇三圓
三塊厝小賣市場	七八、八〇三圓
田町小賣市場	八七、四四二圓
合 計	三、七二七、〇六一圓
三、高雄市の工業地帯	

高雄市の通稱荅雅寮より戲獅甲に亘る約六十萬坪の臨海地域は將來工業地域として豫想され、更に高雄州は約二百萬圓の巨費を投じて之が接續地帯に百萬坪の埋立を完成すべく計畫中にして將來必要に應じて沿岸の埋立及運河開鑿等も考慮中である。

「日本アルミニウム」會社工場がこの實現第一歩として昭和十一年五月竣功した。

目下建設中のもの二、三各方面より工場建設地として申込あり。

現在決定したる工場敷地は左の如くである。

日本アルミニウム會社	一〇萬坪	臺灣特殊窒素會社	一萬七千坪
臺灣肥料會社	二萬一千坪	臺灣電力會社	三萬四千坪
臺灣畜産工業會社	一萬坪	日本鑛業會社	一二萬八千坪
日本石油會社	三萬八千坪	臺灣國産自動車會社	二萬九千坪
日本アルミニウム會社	一〇萬坪(旗後の分)	南日本化學工業會社	二〇萬坪

此の臨港地帯一帯が重工業地域として臺灣に君臨する蓋し期して俟つべきであらう。

○屏東市場

屏東市は舊名阿緞高雄港と隔たること東方二四・六軒阿緞平野の西北に位し、下淡水溪左岸に沿ひ一面渺茫たる平野にして一の小丘をも見ず、中央山脈大武の高峯を隔て、臺東廳と境する。下淡水溪の人道橋成り帝國最南端の都市として多くの特異性を有する。附近農産物の集散市場にして、産業都市として又南支南洋に對する一大生産地として躍進的途上にある。

一、屏東市の土地戸口

屏東市の廣袤は東西六、一〇九米、南北八、九四五米、面積六二方軒二七三にして、昭和十三年末の戸數一〇、四五四、人口五〇、七二六人である。

二、屏東市の産業經濟

屏東市の昭和十三年の生産總額は左の通り二、千、六、百、八、十、六、萬圓にして工産二千二百萬圓を筆頭とし農産、畜産の順である。

農産	三、一〇一、三八六圓	畜産	七九九、八六〇圓
工産	二、二九五三、五三一圓	林産	七、〇四五圓
計	二六、八六一、八二二圓		
魚市場	五〇〇、〇〇二圓	卸賣市場	三九七、八三八圓
家畜市場	三九六、〇八八圓	小賣市場	一、七九二、二三九圓
計	三、〇八六、一六七圓		

第二節 東部臺灣市場

明治二十八年領臺以來臺灣産業政策は農業を根幹とし併せて製糖、製茶等の農産加工工業で他種工業は自然の伸展に委せて來た。而して東部臺灣と西臺灣との交通は巨峯斷崖連々三、四十里に及ぶ一、二本の陸路と海岸線の出入なく巨浪奔騰する海邊に命懸なる舢舨によるに過ぎなかつた。東部臺灣は全く「陸の離れ島」で、更に峻嶮の連峰より奔轉落下する數條の河川の爲産業開發極めて遅々たるものがあつた。然し臺灣産業新政策として「農業本位」より「臺灣工業化と島内農業調整」が登場し、花蓮港築港完成の外潮州臺東道路の開通、氾濫河川の電力化など東臺灣は時局の波に乗りて劃期的飛躍發展を期待せらるゝことゝなつた。

○臺東市場

臺東街は臺東廳の略中央卑南大溪の右岸にある臺東廳下は花蓮港廳下と共に最近東部開發、山地開拓の機運熟し目覺しき活動に入らんとしてゐる。鐵道は臺東—花蓮港間を結ぶ臺東線あるのみなるも、管内の幹線道路は略完成し、南廻西臺灣に通ずる潮州臺東線は昭和十四年竣功して南海自動車會社の乗合バス運轉し、中央山脈を横斷する道路として關山線、内本鹿線、知本越、浸水營越の諸線あり山地開發の産業道路の一として都蘭—富里道も昭和十四年度より着手せられた。

一、臺東街の人口

臺東廳は臺東、關山、新港の三郡で總面積二二八方里五一、昭和十二年末の戸數一三、五二五、人口七七、八四二人で、内臺東郡は戸數八、一八一、人口四〇、九九九人で臺東街は戸數三、三八三、人口一七、一六八人である。

二、臺東廳の産業經濟

臺東廳の總生産額は左の通り八百九十三萬圓にして臺東郡略その半を占め、臺東街は臺東郡下の市場をなしてゐる。

農 産	四、七〇〇、〇〇〇圓	畜 産	六九九、二六八圓
水 産	六七五、三二〇圓	工 産	二、七〇〇、〇〇〇圓
林 産	一六五、〇〇三圓		
計	八、九三九、五八一圓		

農産は米が第一にして甘蔗之に次ぎ、畜産は豚を第一として水牛之に次ぐ。林産は薪炭、木材、竹材で、工産は砂糖大部で臺東製糖株式會社がある。

臺東港及新港既往三年の貿易（九割は臺東港）は左の通りにして。

年 次	移 出		移 入		計	
	數量	價 額	數量	價 額	數量	價 額
昭和十一年	一六、〇〇五噸	二、九五、四九	三、二八七噸	三、〇五、八三〇	三七、二九三噸	六、〇九、三二九
同 十二年	一六、四九二噸	一、二九一、五三	三、三七五噸	二、九八、八八六	四〇、三二六噸	四、二〇、三九

同 十三年	三五、五〇六	七、七五、九二	三、二六八	五、三三、五五	六九、七七四	一三、〇〇、〇〇六
-------	--------	---------	-------	---------	--------	-----------

昭和十三年は一千三百萬圓にして移出品中砂糖は移出總額の八割を占め、米之に次ぐ。特産品たる籐は西部糖業、茶業の製品包装用として、薯榔は漁具染色用として共に移出品中確固たる地位を獲得してゐる。移入品の主なるものは食料品、被服料品、建築材料、肥料である。

臺東街に消費市場あり、昭和十二年の賣上高は二十四萬三千圓である。

三、臺東廳下の山地開發

東部開發は主として平地開發を目標とするも臺東廳下の大半を領する山地開發が喫緊事に屬する。茲に從來顧みられざりし廣大なる山地及高砂族の焼畑式耕作法によりて荒廢された傾斜地を利用して纖維用、單寧用、藥用、香辛用、嗜好用油脂用、用材用等の所謂熱帯作物栽培が國策として支持を受けて登場するに至つた。

明治製菓、森永製菓、臺灣拓殖、星キナ産業、武田製藥、杉原産業、松本商行、臺東殖産、臺東振興、臺東灣コーヒー、木村コーヒー、臺灣資源などの大小事業家の企業確立し、その大半は既に事業に着手してゐる。臺東特産市場として現在の臺東街の飛躍を見るも近きにあらう。

○ 花 蓮 港 市 場

花蓮港街は花蓮港廳下花蓮郡花蓮港溪の左岸にある。

花蓮港廳下には鐵路臺東線の外指定道路として花蓮港—臺東線、蘇澳—花蓮線、上大和—臺東線などあり、蕃地道路に能高道路、八通關越道路、内タロコ道路がある。東部臺灣開發の呼ばるゝの時設備完成し新に開港となりたる新興花蓮港の登場によりて百花一時に開くの觀あり、將來の發展刮目に値する。

一、花蓮港街の土地人口

花蓮港廳は花蓮郡、玉里郡、鳳林郡の三郡にして廣表は東西約七里乃至十一里、南北三十五里餘、面積三百方里（内平

地八十七方里)にして本島全面積の八分の一強に當り、臺北州、新竹州、臺東廳、澎湖廳より大和歌山縣に伯仲す。山野の分布は山八・七、平地〇・七、川〇・六の割合である。昭和十三年末總人口は十二萬九千七百二十八人にして内、内地人一萬六千九百三十三人である。而して花蓮港街は人口二萬五千四十二人、内地人七百九十六人、本島人一萬七千八百四十六人にして、内地人の歩合の多きこと全島第一位で兩三年を経ずして人口五萬を突破するであらう。昭和十五年度より市制實施さるべく確定視されてゐる。

二、花蓮港の産業經濟

花蓮港廳下の昭和十三年總生産額は二千三百二十六萬餘圓にして農産、工産何れも八、九百萬圓である。

農 産	九、三五一、一六〇圓	畜 産	二、六七〇、九〇七圓
林 産	一、一六四、八五〇圓	水 産	三五九、〇〇六圓
工 産	八、八七五、八二九圓	鑛 産	八四四、二〇〇圓
計	二三、二六五、九五二圓		

農産は米の四五八萬圓を大宗とし甘蔗二三一萬圓、蔬菜六〇萬圓、煙草五七萬圓、落花生三五萬圓、甘藷二七萬圓などである。

畜産は豚を第一とし、牛も年々二百頭内外を管外に搬出する。

林産は檜が總生産の約七割を占め東京、大阪方面にも移出し花蓮港材の名聲を博しつゝあり。その他割籐、蓮草、石材などがある。

水産は工事中の花蓮港漁港完成の曉發達すべし。

工業は製糖、製材、精米を主とす。砂糖の新式工場二あり、塩水港製糖會社經營である。

鑛産には砂金十五萬圓がある。
花蓮港の貿易は昭和十三年中は内國貿易にして砂糖、木材は直接内地に移出し、樟腦、樟腦油を始め割籐、皮革、酒精バナ、葉煙草等は島内に搬出す。雜穀、酒類、味噌、醬油、罐詰、魚類、石油、金物、肥料、材木、綿布、石炭等は内地及島内より搬入する。

移出高一千六百八十七萬二千二百六十一圓、移入高八百二十五萬八千六百七十一圓合計二千五百十三萬九百三十二圓である。

花蓮街營市場に卸市場、消費市場あり、その賣上高は左の如くである。

消費市場	五三四、〇〇〇圓	卸市場	六二六、〇〇〇圓
------	----------	-----	----------

三、臺灣の工業と花蓮港

東亞建設は日滿支經濟「ブロック」強化の外に特殊鋼の原料石油、ゴム、錫、綿花、羊毛の如き尙南洋に仰がねばならぬ。

即ち南方政策が東亞「ブロック」形成の重要問題であり、臺灣の有する生産コスト安、地理的優位などは臺灣をして南方政策の據点として此種工業の樹立に乗出すべき重大なる意義を有するに至つた。由來東臺灣は交通不便にして未開發の状態にあり、花蓮港廳下の如き廣大なる土地を領しながら、生産總額二千三百萬圓にすぎず、人口も僅かに十三萬である而して生産も農産と農産加工工業であり、貿易方面より見るも米、砂糖が全移出の七割以上を占めてゐる。然るに今回七百萬圓の巨費と八年餘の歳月を要したる花蓮港築港が完成し開港として登場することゝなつた。

東部臺灣は西部臺灣に比し豊富なる水力電氣を包藏し、地價極めて低廉(坪當り一圓五十錢)其他工場建設に有利なる要件を具備してゐる。茲に近代式花蓮港築港は工業勃興に更に拍車をかくることになつた。

昭和十四年六月資本金二千萬圓の東臺灣電力興業株式會社創立せられ、各河川の電源開發に着手する様になり、それと同時に。

- 日本アルミニウム株式會社 (資本金三千萬圓) アルミ工場
- 東邦金屬製鍊株式會社 (資本金一千萬圓) ニッケル、コバルト工場
- 新興窒素工業株式會社 (資本金五百萬圓) 尿素石膏製造工場
- 東洋電化工業株式會社 (資本金五百萬圓) 磷酸アンモニウム工場
- 塩水港パルプ工業株式會社 (資本金一千五百萬圓) パルプ工場

の五大電氣化學工業が轉を並べて出現することゝなり、東邦金屬は昭和十五年一月、日本アルミは同三月、その他の三大

工場も昭和十六年中には操業を開始することとなり、昭和十七年度には各社の生産額九千萬圓に達すると見られ、更に事業計画が豫定通り進捗すれば昭和二十年度以降は生産総額一億八千萬圓となり現在臺灣全島に於て最高工産額を誇る臺南州の一億四千萬圓を凌駕することとなるであらう。

東洋電化は既に花蓮港に本社を置き東邦金屬、新興窒素及東臺灣電力も本社を當地に置くことになつた。日本アルミ、東邦金屬、東洋電化は何れも南アフリカ及南洋より原料を輸入するものであり、之と關聯して大なる電力を要する合金、鐵、電氣製鐵、製鋼事業及銅の製鍊、マグネシウム工業、カーバイト工業、硫安工業、曹達工業、アンモニア工業、及バルブを原料とする製紙工業も起り得べく期待せらるゝ。

電氣化學工業の外築港の完成を期としてスタートを切りたる産業各般の躍進と共に甘蔗に對する製糖工業、甘藷のアルコール工業、キャッサバの澱粉工業、苧麻の紡績工業、製材工業、水産物加工業など勃興しつゝあり、應は此等の企業に對し特別の考慮を拂つてゐる。

應下の大森林、無盡蔵の石灰石、タロコの砂金など開拓の急を要するもの枚擧に遑あらず、之が爲港の擴充整備、陸上機關の達成、電力水源の涵養、工場用地の設定を要し人口の増殖も急務中の急務である。

四、花蓮港と移民村

花蓮廳下の耕地は田一萬一千甲歩、畑一萬七千甲歩合計二萬八千甲歩であるが、未だ廣大なる未開墾地が存在する。是等未開墾地の開墾と林鑛業始め其他一般産業躍進の爲め總督府は東部開發計畫に積極的方策を講せんとしてゐる。この計畫實現と共に堤防治水、土地改良、水利、道路、橋梁の架設工事が進捗すれば土地丈でも百甲歩以上の集團甲地が平地に於て二萬甲歩、山地に於て八千甲歩が可耕となるべき見込である。

總督府は是等の開墾の爲め千戸五千甲歩の内地人農業移民の計畫であるが、花蓮港廳下には明治四十三年入植今日隆々たる繁榮を築いてゐる吉野村(二五七戸)、林田村(一七八戸)、豊田村(一七三戸)及自由移民瑞穂村(一五九戸)の内地農業移民の豊富なる經驗を有する。昭和十二年末三移民村の現況は左表の如くである。

村別	戸數	人口	土地面積	收 入			支 出			收入殘差引額
				農業收入	副業收入	計	生活費	經費其他	計	
吉野村	二九七	一、五八六	一、七〇〇	六三、四〇四	二一〇、七三三	七三、七六六	一五九、六八三	五三九、三六五	六八八、九四七	四八七三九
豊田村	一七三	八七六	七二四	四〇、三三三	二七、二二五	四七、五五七	九四、一三〇	三三八、七四四	四三、八七四	四、六六三
林田村	一七八	七五七	七六六	四五、八三九	四〇、五〇〇	四九、七三九	一三一、一五二	三五八、〇六七	四九、三三八	八、一八一
計	六四八	三、三二九	二、七六〇	一、四八四、五八五	一、七八、〇四七	一、六六二、三三三	三八四、九六三	一、二六、〇七六	一、六〇一、九三九	六、五九三

第九編 新高港出現と臺灣交通事情と將來

第一章 臺灣の地理的考察と新高港の出現

第一節 臺灣港灣の地理的分布と中部港

臺灣は前に述べたるが如く澎湖列島、臺灣本島及其の近傍の諸島嶼より成り其の面積は九州に匹敵するも、其の海岸線は九州の五分の一強で格段に短く、従つて天然の良港は極めて尠ない。現在に於ける全島の港灣分布の状態は北に基隆、南に高雄あり、而して東部臺灣に新に開港となりたる花蓮港がある。

臺灣總督府の港灣政策は基隆、高雄南北二港主義を採り來りたると共に巨費を投じてその港灣設備を完備したが、本島の全面的躍進特に各種産業の勃興を見るに至りて従來の南北二港主義を以つてしては鐵道輸送力之に伴はざるの虞あり、新に四港主義を採り本島の飛躍に遺憾なきを期することとなりて先づ西部の基隆、高雄兩港の外に東部に花蓮港の登場を見たのである。

次に本島は其の形狀略楕圓形で南北約四〇〇軒、東西の最廣中約百六十軒であるが、現在の商港であり開港である基隆、高雄兩港に就て見るに、基隆港は最北端に位し、高雄港はその南方三百十餘軒に位置するが何れも南北一方に偏在する。従つて此の兩港の圈内に屬する最も廣大なる中央部は何れも兩港に對し最遠の距離に在る。

交通上の距離に依つて検討すれば基隆、高雄兩港間は海路二百二十四哩、鐵路四百四軒で、本邦に於て現在斯かる長距離の中間に一港をも有せない地方は他に例なきところで、内地に於ては約百哩内外を距て、對外的の商港を有する現状である。即ち本島に於て二百二十四哩の中間にありて、産業的價値の極めて高き陸地面積の最廣部分を持つ海岸に國港一港を新設することは港灣の分布上最も必要で、茲に中部港建設計畫樹立されたのである。

中部港の位置は臺南州の海口附近より臺中州下の梧棲附近の海岸で、港の背後地の關係よりすれば成るべく南半部に寄

るを適當とするも、これに該當する海口附近より臺中州下の沙山附近二里の海岸は其の中央に濁水溪あり、その名の如く多量の土砂を排泄するを以つて全然築港の見込なく、自然技術的に大觀して其の位置は鹿港又は梧棲の海岸に限定せられた。而して鹿港は海底の異動極めて劇しく遂に梧棲に中部港建設確立を見たのである。

中部港は「新高港」と命名せられた。新高港は本島最廣部たる中部地方の經濟價値向上せしむると共に此の商港に接續する工業港の新設を可能ならしめ以て中部臺灣の豊富なる未開發水力電源の開發と相俟つて各種工業の開發振興を圖らんとするものである。

新高港の位置 新高築港地は北緯二十四度十五分二十七秒、東經百二十度三十一分二十秒に位し、臺中州下大甲郡の南西に在りて臺灣海峡に面し、北基隆へ百十二哩、南高雄へ百二十哩を距て兩者の略中央地点にあり。而して新高港より内地對岸並に南洋地方諸港への距離は略左の如くである。

港名	距離	備考
長崎	七四五	
博多	七九六	
門司	八五一	
福州	一一七	
上海	五七五	新高港より福州へ一一七哩、福州より上海へ四五八哩
大連	一一九	上海より大連へ五四四哩
青島	九八五	上海より青島へ四一〇哩
廈門	一二七	
汕頭	二三三	廈門より汕頭へ一〇六哩

香港	三四〇	新高港より直航距離、厦門、汕頭經由は四〇八哩
廣東	四一五	香港より廣東へ七五哩
瓊州	五八〇	新高港より直航距離、香港經由は五九六哩
海防	八二八	瓊州より海防へ二三二哩（香港經由）
マニラ	六七二	新高港より直航距離、香港經由は九七一哩
タラオ	一、五二〇	香港よりタラオへ一、一八〇哩
西貢	一、二五七	香港より西貢へ九一七哩
シンガポール	一、五四〇	新高港より直航距離、香港經由は一、七九四哩

新高港の地勢及氣候 臺中方面と海岸地方との中間に匍匐する丘陵大肚山の餘勢を受け東より西へかけて極めて緩かに傾斜するも大体に於て平坦にして山なく、一面水田に覆はれてゐる。
 一帯海に面し一般に氣候溫和、四季海風常に吹き來り、夏季涼しく、冬季又溫度の甚だしく低下することなし。春秋兩季は氣候溫和にして長閑なる日和が多い。

第二節 新高港の築港

新高港は前に述べたるが如く梧棲港地先で昭和十四年度よりの繼續國庫事業として工事に着手してゐる。商港は基隆港より百十二哩、高雄港より百二十哩の位置にありて臺中州大甲郡梧棲街及清水街の地先海濱に跨がり、尙之に接續して別に新設せらるべき工業港は梧棲街より龍井庄の地先海濱を占め、此の兩港を合せたる地域は清水、梧棲、龍井の三街庄に亘り其の南北港界の距離は約十一杆の長きに上る。
 その工事概要は左の如くである。

一、總計畫に依る工事費は二千六百九十八萬圓を豫定するも現下各般の情勢に鑑み急速緊切なるものを第一期工事とし

一千五百萬圓を以て昭和十四年度以降四ヶ年計畫、即ち昭和十七年度竣切の豫定である。

二、總計畫に依る工事概要

- (一) 海岸線に沿ひ相距ること五、一五〇米の二点より双腕形に北防波堤延長三、八〇〇米、南防波堤延長五、三三〇米を突出せしめ、面積一二、四〇〇、〇〇〇平方米の水面を抱擁せしむ。
 - (二) 航路、汽船泊地、運河、荷揚場等に充つる水面合計一、七七三、〇〇〇米を水深干潮面下九米乃至三米に浚渫す。
 - (三) 浚渫土砂の一部を以て埠頭、荷揚場其の他の用地五〇四、〇〇〇平方米を干潮面上六米に埋立つ。
 - (四) 岸壁延長一、三三四米、荷揚石垣延長一、四二〇米を築造す。
 - (五) 浚渫水面に繫船浮標十八箇所、浚渫線境界要所に標識浮標、防波堤の先端に燈臺を設置す。
 - (六) 岸壁に沿ひ上家六棟の面積二六、〇〇〇平方米を築造し、道路其の他の雜設備を爲す。
 - (七) 工事に各種材料の運搬を主たる目的として甲南驛、築港地海岸間に延長約十二杆の鐵道を敷設し、尙大甲溪河床より石材採取の爲支線を設く。
- 四、漁港、工業港、築港工事計畫概要**
 臺中州は新高港築港工事の進行に従ひ地元港灣事業として漁港及工業港の築港計畫あり、本工事は未だ起工時期確定せざるも現有計畫の大体は左の通りである。
- イ、漁港の築港工事概況**
- (一) 汽船錨地の東北端に接し清水街地先の海濱に於て北防波堤方面に向ひて幅員百八十米乃至五十米の漁船航路及泊地に充つる水面合計約十六萬三千平方米を水深干潮面下四米に浚渫す。
 - (二) 前號浚渫土砂を以て漁港の陸上設備、物揚場、船揚場、船舶修理工場其の他の用地約四十二萬平方米を造成す。
 - (三) 物揚場延長四百米（水深四米）仮護岸延長一千五百米を築造す。
- 工事に要する期間は二箇年とす。
- ロ、工業港築港工事計畫概況**
 南防波堤根部の外端より大肚溪の河口に至る梧棲街及龍井庄の海岸に沿ひ直線延長約五千六百米、幅員平均一千五